

---

# おばあちゃんの十円

杉山邦夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おばあちゃんの十円

### 【Nコード】

N5743M

### 【作者名】

杉山邦夫

### 【あらすじ】

東京の下町で生まれ育った女性が長崎の大学に進学する。彼女はそこで恋人と親友に巡り会い、卒業後ふたりは結婚するのだが、その式の十日前、彼女は突然帰郷し自身の過去を回想する。愛と癒しの物語。

主人公村田真砂子は母親との間に葛藤がある。彼女はキャンパスで知り合った美莊美禰子に痛烈に惹かれていく。まるでソウルメイトと出会ったように。そして報われなかった思い、痛みと向き合い、癒し、自身の女性性を再生していく。

## 第一部

2000年 秋

—

ただいま、と玄関の戸を開けたが、お帰り、と迎えられるわけでもない。すぐ左手のダイニングキッチンに、母の居る気配がする。スリッパに履き替え、テーブルの椅子に腰掛けている母を見やる、その瞬間、

「伸一さんから電話があつたわよ」  
と、嫌味を利かせた声がした。

真砂子は目を合わせるのを止めた。見上げれば、あくまで自分を非難する、大きなエゴがそこにある。

そう、と努めて平静を装ったけど、強張る顔の表情といい、胸の鼓動といい、こころの動揺は、容易に収まるものではない。視界の隅には、母の容赦ない視線が浴びせられている。

テーブルの前を通り過ぎる。背中いつぱいに、無言の非難が押しかかる。真砂子は口惜しさでいつぱいになった。

そりゃ、自分が悪いのはわかってる。

いくら帰りたい、帰りたい、とこぼしていたとはいえ、式も間近な花嫁が、ふらつと実家へ戻ったら、婚約者は気が気じゃないだろう。

『あんたはそうやって昔から人のことを考えない』  
昨日母に言われた。だが、

考えないわけがない。

そりゃ母の目から見れば、自分は未熟で至らないのだろう。けれどこれでも私は私なりに、周囲の人を精一杯思いやって生きているのだ。それをまるで重大な犯罪でも犯したかのように、一方的に責

め立てる。私は人にそんなにまで酷く言われたことなんかない。母の評価が一番否定的だ。まして生涯を伴にしていくな人を、どうしても思わずにいられようか？

すると母は冷ややかに、

本気だつたら思いとどまるわよ。

と言いたげな目で睨むのだ。真砂子はその目が堪らない。

『なにもこれつきり会えなくなるわけじゃないだろう』

それはわかつてる。わかつてはいたのだ。

これつきりじゃない。帰ろうと思えばいつでも帰れる。戻って、何があるというわけでもない。ただ迷惑をかけるだけじゃないか。私だってそうやって何度も何度も自分に言い聞かせてはみた。

けれどどうしても戻らずにはいられなかった！

木玉の数珠暖簾を、ちやらん、と払い、階段を昇る。パタンと閉めたドアにもたれ、唇を噛み締める。よくこんな風にここへ逃げ込んだ。綺麗に片付けられた五畳程の洋間。

この部屋を手に入れたのは十一の時だった。

その頃の多くの女の子のように、真砂子もまた洋風の一人部屋に憧れていた。弟とは仲が良く、口喧嘩さえしたことがなかったが、一人部屋の価値というのは特別なものがあつた。だから、

『今度家を建て替えたら、真砂子の部屋を作つてあげるね』

と言われた時の喜び様は、父が娘に関して抱いた最も美しい記憶の一つとなつた。

『どういう部屋がいい？』と尋ねられ、少女は、洋間、と答えた。

『あらっ！？ 洋間なの？』

母が頓狂な声を上げた。娘が畳の部屋を選ぶとばかり思っていたから、驚いたのだが、少女はもつと驚いた。

『この頃の女の子はみんな洋間だよ』

父はこともなげに言った。母娘の間に生じた緊張などまるで気づかずに、穏やかに微笑みながら、その優しい目を娘に向け、

『それとベツト』

そう！ ベツトが欲しい。

少女は瞳を輝かせて父を見た。それが父の一番好きな娘の表情であつた。けれど、

『あら、ベツトはダメよ。敷きっぱなしなんて気持ち悪い』

母はきっぱりと拒絶した。

『第一狭過ぎるじゃない』

口調もそうだが、この人の睨む眼は、とてもきつい。

『真砂子。あんたベツトなんて欲しくないでしょう？』

自分の意にそぐわない、感情には容赦ない、無慈悲な怒りはいつでも少女の願いを踏み潰<sup>つぶ</sup>してきた。けれど、

『欲しいよなあ』

父は相変わらず呑気な顔で、娘に愛嬌を振りまいた。

この人は、何も気づいていないのだ。

母の暗い側面。火がついたらなら手の施しようが無くなる程の、その剣幕を。それにずっと怯え続けていた娘の心情など、何も。

泣きつきたい気持ちで、少女は小さく、うん、とうなずいた。

でも、と母は不承だった。父はいつものもののほほんとした調子で、好きにさせておやりよ、真砂子の部屋なんだから、と宥<sup>なだ</sup>めてみた。相手がたやすく折れてくれるものと、高をくくっていたらしい。

けれど母の目つきは、普段のそれではなかった。交渉の余地など一切なく、ただひたすらに相手の意を殺しにかかる。娘には馴染みの、けれど夫はまったく知らずにいた、非情な？刃？が瞳の奥に煌めいている。それは氷のような冷血の肌触りだった。

そんな？妻？を目の当たりにして、父は心底ぞつとしたらしい。机をドンドン叩き威嚇する。そして互いに激しく喚<sup>わめ</sup>き、怒鳴り、まくし立てる。それは複雑に絡<sup>から</sup>み合いながらも永遠に噛み合うことの

ない、大きなふたつの歯車のようだった。その回転に引き込まれ、引き裂かれてしまう恐ろしさを、少女は感じていた。

突然、弟が大声で泣き出した。皆がはっとして振り返る。父母の剣幕に押し潰され、氷の様に固まっていたところが、唐突に痛みを感じたのか。その反応が、父母を正気に戻してくれた。？憑きもの？が落ちた母。父はその機を見逃さず、それ見たことか、とここぞとばかりに妻を責め立てた。その攻撃は、生身の母の一番弱い所を突いた。

結末は悲惨だった。母は金切り声をあげて泣き叫び、不当に虐待された被害者のように傷つき、ひどい捨て台詞を残し、立ち去った。父は全身の毛を逆立てた猫のように唸り、長くその余韻を振り払えずにいた。

多くの代償が払われた。けれど、

真砂子の洋間は認められたのだ。

お姉ちゃんなんだから、と宛<sup>あて</sup>われたのは西日の強い二階の一角であつたが、少女はその日差しさえもすでに氣に入っていた。

『今度ね、私の部屋ができるの』

真砂子はそう言つて友達を羨<sup>やう</sup>ませた。

『洋間なの。小さいけど、私だけの部屋』

彼女もまた、そうやって羨まされてきた一人だった。

けれどこの建て替えを一番喜んだのは母ではなかったか？

内装のカタログを広げては飽<sup>あ</sup>きもせず、いつまでもにこにこ眺めていた。設計図<sup>ブループリント</sup>を見ながら、工務店の人達としばし話し込む。毎日現場に足を運び、工事のはかどり具合が一番気にしていたのも母だった。そんなある日、

『真砂子の部屋がいいの。壁紙がとってもいいの』  
と母が言った。

その柄は自分で選んだものだった。淡い檸檬<sup>れもん</sup>色の花模様、見た瞬

間にぴんときた。ずっと憧れていた自分の部屋のイメージが、ふと現実の形となって浮かんだ。これを選んだとき、母は怪訝けげんそうな顔をした。けれど今は素敵ほだと言って誉めてくれる。

引越しの朝、少女は真つ先に二階へと上がった。家具はもう入れているという。真新しいドアの向こうに、自分だけの世界がある。憧れていた生活が始まるのだ。少女は胸をときめかせ、扉を開けた。けれど望んだようなベットはなく、代わりに小さなソファ―（ベツト）が置いてあった。

これを広げて蒲団ふとんを敷くのだ。それなら敷っ放しにもならず、天日にも干せる。母の機嫌を損ねることもない。階段を上がってくる足音が聞こえた。

『いい部屋でしょ』

母は朗らかに、少女の背中に話しかけた。

『・・・うん』

少女は振り向かず、応えた。

『あんたいいセンスしてるわよ』

母は階段を下りていった。

真砂子は部屋の中を見渡した。壁紙は綺麗だった。淡い黄色の色彩が、部屋を明るくしてくれた。近づく、細やかな花模様が浮かんできた。

自分で選んだ柄だ。

少女は努めてこの部屋を気に入ろうとした。これでもベットには違いないのだし、ソファ―だって欲しかった。けれども夜、蒲団を敷いて横になると、折った背もたれとの境が凹んで傾いて、寝難ねにくかった。

翌朝、自分の部屋で寝るのは気持ちいいだろう、と言われても、望まれているような素直な返事ができなかった。学校へ行って、羨ましがる友達に囲まれても、目を逸そらして微笑むだけで、気持ちは沈んだままだった。

けれどそんな彼女を、この部屋は温かく迎えてくれた。

琥珀色の日差しが、真砂子の壁紙を金色に染め抜いた。コルク調の床も萌えるように輝いて、ずっと憧れていた避暑地のイメージのままに、木目の優しい香りを漂ただよわせていた。

こんな部屋が欲しかったのだ、と思った。

そして暮れゆく光の変化を、じっと見つめていた。

ちょうど今と、同じように。

## 二

「そりゃ姉貴が悪い。母上が怒るのも無理はない」

「それはわかつているわよ。ただどうしても、帰らずにはいらなかったの」

「うん。それもわかる」

と言つても素っ気ない。にこやかだが、姉のトラブルよりはむしろ、もんじゃの焼け具合を気にしてる。母との関係が拗こじれると、高志は大抵自分の側に立つてくれる。けれど肩を持つようなことはしてくれない。もうちょっと親身になってくれても、と真砂子は思う。けれどこれくらいの距離感が、ちょうどいいのかもしれない。

真砂子は帰郷する度に弟を食事に誘った。長崎へ行ってから始まった習慣だが、離れていれば互いの不在の間の出来事を話してみたいくなるものだし、弟はいつも喜んでついてきてくれた。

「まあ放つとくだね、あの癪かんしゃく癪は。毎度のことじゃない」

そう。母は短気だ。つまらないことにすぐ腹を立てる。

「じきに直るよ。いつも通りに」

それも人の失着を咎とがめるといふ以上に、自分の感情を害されたこ



とに対する怨み<sup>うらみ</sup>をぶつけてくるようだから、堪<sup>たま</sup>らない。

「それはそうなんだけど、」

言い方だつて色々あるものを、何もそう好戦的に構えなくたって、  
「気にすることないよ」

母こそ人のことを考えない。

「あれでも結構喜んでいるのかもよ」

真砂子は逸<sup>そ</sup>らしていた目線を合わせた。高志は穏やかに、意味ありげな微笑を浮かべている。

あるいはそうにのかもしれない。式の日取りが決った時、弟は手紙に、

『母は近頃古いアルバムを取り出しては、そつと眺<sup>なが</sup>めているようです』

と書いてきた。

弟のグラスのビールを注ぐ。高志は、

「いやあ。姉貴はともかく、姉貴の財布と別れるのは辛いなあ」と笑う。

姉が嫁に行くというのは、どういう気持ちなのだろう。目の前の弟は、何ごともないような涼しい顔をしている。これでも少しは寂しがつてくれているのだろうか。この子も来年は二十才になる。近頃は、なんだか自分の愚痴ばかり聞かせているような気がする。

二人は仲の良い姉弟だった。幼い頃、よく弟の世話を言いつけられた。学校から帰ると、特徴のある抑揚<sup>よくよう</sup>で、

『まさ子ちゃん。あゝそゝぼゝ』

と友達が呼びに来る。階段を降りながら、呼び止められなければいい、と思うのだけれど、

『真砂子。高志も連れてお行き』

いつでもきつちり呼び止められた。ほんとうは、友達同士で遊びたかったのだけど、

『お姉ちゃんなんだから』

と言う母のその傍らで、小さな弟は上目使いに見つめている。

断りたくても、断れるものではない。

けれど少女は、母の機嫌が悪くなるまでぐずぐずとしていた。叱られるような強い口調で言いつけられるまで、弟の手を引くことがなかったような気がする。友達は、文句こそつけたりはしなかったが、真砂子はすまない気がしてた。飯事<sup>まめじこ</sup>など、男の子が好みそうもない遊びをする時は、弟の顔色を窺<sup>うかが</sup>った。

自分の部屋を与えられた時、高志は寂しいようなことをぼつりと言った。

「ところで、長崎へは連絡したの？」

「・・・へっ!？」

「まだしてないんでしょう？」

不意を突かれてどきつとした。けれど弟は、姉の困惑具合に同情を寄せるかのような笑みでいる。

この子は、むやみに人を責めたりはしない。だから真砂子も、素直に、うん、と返事ができる。高志はひとつため息をついて、

「それは困ったね」

そう。困っているのだ。私から、連絡しなければいけないのはわかってるのだけど、昨日は母とやり合って、今日は今日で気持ちの整理のつかぬまま、勤め先には電話をしづらくて、後ろ髪を引かれながらもずるずると、向こうから、かけてきてくれるのを待っている。

携帯は見事に置き忘れてきた。

「甘えてるな、私」

ビールが苦く感じる。

「そんなに落ち込むこたあないよ。大したことじゃないじゃん、これくらい。べつに破談にしよう、ってわけじゃないんだから」

弟はグラスにビールを注いでくれた。それはそうだ、と真砂子は苦笑した。

「まあ、とにかくにも、まずは電話することですね。かけづらいのはわかるけど。なんたって兄上は寛大ですから」

そう。伸一は許してくれる。私の気持ちをわかってくれる。そしてきつと、気の済むようにさせてくれる。のはわかっているから。甘えるつもりはないけれど、どうしても寄りかかってしまう。

「どうせだったら、兄貴も連れてくりゃよかったのに。そうすりゃ母上だって、怒れなかったでしょう」

まさか、そういうわけにもいかない。

「知能犯」

「ははは」

高志は伸一を気に入ってる。それは彼も同様に、二人とも男兄弟が欲しかったのか、初対面の時から妙に馬が合う。高志は得意の野球の話をして、義兄<sup>あに</sup>を笑わせた。

弟は野球が上手だった。高校では投手兼三塁手で三番打者。最後の大会は三回戦で優勝校の関東一校を相手に六回から登板、四イニングを投げて、

「一点！ たった一点に押さえたの。あの強打線を。これは自慢している」

打者としては七回裏、相手のノーヒットノーランを破る初ヒットを打った。

「初球。アウトコースのストレート。推定球速145km！（ちょっとオーバーかなあ？ まあほんのちよつとだけどねえ）振り遅れという噂もあるけど、鋭い打球がライト前へ……」

いやあ大感動だったなあ。もう、一塁ベースの上に記念碑を建てたかったよ。「永見祐太郎の剛速球、村田高志の前にここへ散る」って。

ところが次打者の長内のほか、痛烈にライト線破りやがったじ

やない！

俺としちゃあチーム唯一のヒットということで球史に名前を留めたかったんだけど。さっすが、キャプテン！ もう夢見心地でサード・ベースへ。ヘッドスライディング。もちろんする必要は全然なかったんだけどねえ。ポーズ、ポーズ。高校野球お得意の。いかにも純真で一生懸命やってますう、って。

これも初球のストレート。まるでうちの打線が、カウントを取る直球に的を絞ってるなんて、高度なことやってるように見えたじゃない。ノーアウトランナー二三塁、一打同点。盛り上がった盛り上がった。相手ベンチから伝令が飛んだもんね。こんな弱小チーム相手に。あいつらにとつちや、前代未聞の不祥事だよ。これは』

長内君というのは高志の親友で、あいつがいなかったら、こんなにも野球に打ち込めなかった、といつか言っていた。

『けれど残念ながら反撃もそこまで。もう永見の野郎、怒りの全力投球よ。こええこええ。三者連続三振。外野フライ一つ打たせてくれないんだから。感動したね。これが本物のエース、ってやつだね。やっぱりものが違うねえ、彼は。で、その後すぐわたくしめがあっさりどダメ押しの追加点を取られてしまいました。最後は俺と長内の連続三振でゲームセット。いやあ怖かったねえ、あの永見ちゃん！ なまじクリーンヒットなんか打ったもんだから、もうあらん限りの憎しみを込めて投げ込んできたもんね。さっすが、ドラフト前に四球団から引き合いが来ただけのことはあるね。大物になるよ、彼は。うん、なつて欲しいいねえ』

と一応は相手を立ててみせる。が、

『しかしヤツも打たれてはいけない男に打たれてしまったね。あの野郎はオールスターに出ようがタイトル・ホルダーになるうが、大物になればなるほど、「あいつは高校の時、俺に打たれたんだ」って、一生言われ続けるんだから』

伸一もスポーツ好きだから、二人で大いに盛り上がっていた。彼に家族を気に入ってもらえるのは嬉しい。けれど自分の理解が届か

ないところでの連帯は、あまり持つて欲しくないとと思う。ちよつとわがままなことかもしれないけれど。

「でも昨日は本当いいタイミングで帰ってきてくれたわ。とっても助かった」

「へえー、そうなの」

と弟は、いつものようにとぼけた口をきく。ちゃんと気づいているはずなんだけど、と真砂子は思う。あるいは、氣を使つてくれるのかもしれない。

夕方、家に着いた真砂子は食事の支度を始めた。後ろめたさもあつたけど、そうして家族の帰りを待つのが、長崎へ発つ前の習慣であつた。

玄関の開く音がして振り返り、娘は朗らかに、

「お帰りなさい」

と言つた。

「あらっ！？ 帰ってきたの？」

娘の突然の帰郷に当惑しながらも、

「ああ、帰つてきちゃったんだ」

母は怒るでもなく呆れるでもなく、迎えてくれた。

「うん」

ばつの悪い子供のように、娘は俯く。

「そりやねえ、嫁入り前は、いろいろとねえ」

母は感慨深げに呟く。煮立ち始めた鰯の匂いが、鍋の中から漂っている。

「作ってくれたの？」

「うん」

と、そこまではよかったのだ。母が、

「でも伸一さんも、よく許してくれたわね」

と言つまでは。

「わたし、なんで帰ってきちゃたんだろう？」

真砂子は深くため息をついた。

「ハハハハハハ」

高志は派手に吹き出した。姉を気づかう気配など微塵もなく、腹を抱えて笑い転げ、

そりゃいい。そりゃいいわ、と、一人悦に入っていた。

私がここへ帰ってきたのは、母に叱られるためでも、ましてこの子に笑われるためでもない。

真砂子は無神経な対応など絶対に許せない。もし顔を上げていたら、高志は自分が姉に与えた屈辱の代償の高さを思い知っただろう。だが幸いにも何も気づかぬまま、笑いの発作は不意に止んだ。そして一瞬にして酔狂がすっかり醒めきってしまったような視線を床に落とし、呟いた。

「そりゃきつと、長崎へ帰るためでしょう」

二人は店を出た。穏やかな夜風が心地よかった。真砂子は空を見上げ、星座を探した。弟は、

「もう姉貴とふたりで出かけるのも、これが最後だね」  
と言った。

### 三

家に帰ると電話が鳴った。電話は台所ダイニングの向こう、階段の手前にある。先に上がった弟は、気にもとめずに階段を昇っていった。母は夕方出かけたきり、まだ戻っていない。真砂子は仕方なく、受話器

を取った。

「はい。村田です」

「なにが村田とお」

まずい、と思った。でもだからといって、早速に受話器を下していいものではない。

「美禰子さん！」

ちよつとご機嫌斜めではあるけれど、私の一番話をしたかった女性<sup>と</sup>。

「婚約者<sup>フィアンセ</sup>に連絡もしないで、どおこほつつき歩いてるとよ、この不良娘があ」

「はい。すみません」

「なにがすみませんよ。『すみません、美禰子さん。東京へ帰ります。後のこと・・・よろしく願います。伸一さんに、うまく言っておいてください』ですって！？ まったく、人の留守につけ込んで、なんていたずらをしてくれたのよお」

彼女は自分の口調をとても上手に真似した。臨場感があって、真砂子は笑いを抑えるのに苦労した。

「はい。ごめんなさい」

「ゴメンナサイ？ 何がごめんなさいよ。あれからわたしがどれだけ苦労させられたと思ってんのよ」

「はい。反省しています」

「何よしらしらしい。ヘタでもいいから、演技くらい真面目にやってよね」

「ははははは」

真砂子は嬉しかった。すべて順調<sup>うま</sup>くいってるのがわかった。やはりこの人に託したのは正解だ。美禰子はひとつため息をつくど、

「まったく、真砂子ちゃんには参<sup>まい</sup>っちゃうわねえ」

そう。自分でも参<sup>まい</sup>ってるのだ。よくもこれだけ思い切ったと、自分でも信じられない気がする。

「で、どう？ そっちは。お母さんに叱られたんでしょ？」

「・・・えっ!？」

「えっ、じゃないわよ。こっぴどく怒られたんでしょ?」  
それはそうだ。

「はい」

「怒られて当然でしょ?」

理屈ではそうかもしれない。けれど人には?感情?というものがある。癩癧をぶつけられた方は、堪<sup>たま</sup>らないのだ。

「でも程度が不当だと思います」

「それくらいは宿泊料だと思います」

それにしては、随分と割高だ。

「伸一君に叱られるよりましでしょ」

!!

「美禰子さん。伸一さんなんて言っていました?」

「さあ、なんと申しておりましたかしらあ?」

彼女はさつと声の調子<sup>トーン</sup>を変えた。

「事態は思っているより、深刻なこととなっているみたいですからあ。直接お電話なさって、ご自身の方からお聞きになつてはいかがですかあ?」

その悪戯<sup>いたづら</sup>っぽくりタルダンドする口調。演技<sup>うつつ</sup>だとわかっていても、言われた方はどきつとする。

「美禰子さんあゝん」

「なによ。哀れっぽい声出して」

今日の彼女は意地悪だ。私は相当悪いことをしたらしい。

「でも少しは懲<sup>こ</sup>りたみたいね」

「伸一さん、怒ってませんよね?」

「うん、だいじょうぶ。真砂子さんが行っちゃったあ、ってめそめそしてた」

嘘だ!

「美禰子さん!」

「ははははは、冗談冗談。ほんとねえ、これから連れ戻しに行



くって気合い入れてたわ」

それも嘘だ。彼が本気になったなら、とつくにここへ着いている。それにしても、

今日の彼女のジョークは低俗だ。

年端のいかない子供のように、相手の気持ちを掬<sup>きく</sup>することがない。感情の行き違いなど、好まぬの女性<sup>ひと</sup>なのに。

真砂子は口をつぐんだ。この女性<sup>ひと</sup>と不調和でいるのはたまらない。そして彼女はこの沈黙の意味を、機敏に察してくれた。

「まったく。真砂子ちゃんには、ほんと参っちゃうわよねえ」

その唇から、諧謔<sup>かいぎやく</sup>的な色彩が消えた。そしていつものような、共感的な温もりが伝わってくる。

彼女の音色だ。

「伸一君のことだったならご心配なく。彼があなたのことをちゃんと理解してくれてる、っていうのは、あなたが一番よくわかってるじゃない。」

でもいくら信じてるとはいえ、不安というのはつきまとうてしまふものなの。そんなの電話一本で済むことなんだから、早くかけなさい。こっぴどく怒られたのはわかってたから、伸一君には、そつとしておいてあげてほしい、って言うとした。あなたからちゃんと連絡させるって、わたしが受けあってね。まあ本意じゃんだけど、結局はあなたのご依頼通りにね。もっとも、彼がちゃんと守ったかどうかは、知らないけれど。

だから何も心配しなくていいよ。もう済んでることなんだから。不意に帰っちゃったその気持ち、わたしもわかるような気がするわ」そう。この女性<sup>ひと</sup>ならわかつてくれると思う。私にとって唯一親友と呼べる人。彼女と出逢ったのは、大学二年の春、伸一に交際を申し込まれた日、

ちょうどその時……

長崎での最初の一年は、環境にまったく馴染めず、深く思い悩んだ。それがようやくに吹っ切れた頃だった。伸一は、キャンパスの数少ない知り合いのひとりだった。ちょうど読書に凝っていて、切りつめてたから学校の図書館で借りていたのだが、常連となると受付で顔を覚えられ、

『これいい本だよね』

とか、

『この小説ね、悪役なんだけど、すごい面白いキャラクターが出てくるんだ』

と声をかけられた。

そんな何気ない一言が、とてもありがたく感じられるほど、繊細になっていた時期だから、自然と笑みを返していたのだが、

どうもそれがいけなかったらしい。

誘われて、図書館の裏のプラタナスの並木道を歩いていた。キャンパスのこの場所は気に入っていた。静かで、穏やかな木漏れ日が肌に心地よい。人影も疎らで、真砂子はひとりになりたい時はよくここに来た。その日は天気が良く、温かな日差しがとても心地よかった。伸一は、大事な話がある、と立ち止まり、

単刀直入に、

「好きだ。交際つきあってほしい」

彼とは知り合って日が浅く 伸一は一目惚れだというが、真砂子はそんなものなど信じちゃいなかった 特別な感情も何も抱いていなかったから、思わず、

「それは、真剣な意味で、ですか？」

と聞いてしまった。伸一は一瞬たじろいだけど、すぐに姿勢を立て直し、

「もちろん。いいかげんな気持ちじゃないよ。もつとも、結婚とか、そこまで考えて言ったわけじゃないけれど」

真砂子は頭が真つ白になった。ただあまりに突然だったから、つい、？言葉？をまちがえたのだ。

「俺は誰かを好きになつたら、はつきりそう言おうと決めてたから」結婚を決意しないかぎり、誰かに好きだ、と言つてはならないのならば、

「いいかげんな気持ちじゃなく、俺は君のことが真剣に好きだ」

あまりにも非現実で馬鹿げてる。

真つ直ぐに自分だけに向けられている眼差しを、外す術もなく、真砂子も見つめ返した。それは今まで体験したことのない種類の時間の流れだった。けれど愛されているという感覚が女性を捉える、あの独特の恍惚を、彼女が知るのはまだ先のことであった。

その時、伸一の目が泳ぎ、真砂子の背後の誰かを見た。人の気配などまったく感じていなかった真砂子が驚いて振り向く、その間もなく、その女性<sup>ひと</sup>は傍らを通り過ぎた。その横顔に、真砂子のはっと息を呑んだ。

「伸一君。これ、ありがとう」

と彼女は借りていた本を差し出す、その細くしなやかな指先。まるでそれ自体がひとつ小さな生き物のように、秘められた感情をたたえていた。そして彼を少し傾<sup>かし</sup>げるように見上げる、その角度が美しかった。一点の曇りなく澄んだ瞳に愉悦な色をたたえ、心持ち開いた唇が、温かい言葉をかけてもらえるのを待っている。日の光りを弾いて輝く髪を風になびかせ、茶色のグラデーションがテンポ・ルバートに揺らめいている。

あまりのタイミングの良さ、間の悪さに、または気が高ぶっていたのか、伸一は返す言葉を見つけれず、この不意の来客を、ただ茫然と見つめるだけだった。そんな態度がおかしいのか、彼女が不

思議そうに小首を傾ける。すると細やかな茶色の髪が、肩からそつと揺れ落ちた。そのしなやかな髪の感触、肌触りを、真砂子はリアルに想像した。

黙ったままの彼に釈然しゃくぜんとしないながらも、彼女はちよつと含み笑いい。じゃあまた、と色つぼく目配せを送る、その刹那、

彼女がこちらを振り向いた。

すべてを知っているような、それでいて、何も気づいていないような、謎めいた笑みを浮かべ、軽く会釈する。

そうして彼女は歩き出したのだが、その歩く後ろ姿がまた素敵だった。背筋をぴんと伸ばす姿勢の良さが、すらつと均整のとれたプロポーションを引き立たせ、足音を立てるのを憚はばかるようなスライドは、身体の重みを感じさせないほどの軽やかな andante dance だ。細い足が大地そつとに触れ落ちる度に、よく梳とかされた長い髪が風に揺れてたなびき、スカートの裾すそがこんなにも美的に絡からまるのを、真砂子は見たことがない。それは夢にまで出てきそうな優美たおやさだった。

伸一には申し訳ないが、知り合つて間もない頃、真砂子はこの女性とにだけ、惹ひかれていた。

数日後、真砂子は図書館の片隅で、偶然に彼女を見つけた。あの女性ひとは人目を避けるような席で、静かに本を読んでいた。観覧の席には他に誰もいなかった。書架の陰に隠れるように立ち、そつと様子を窺うかがった。彼女の動作のひとつひとつに真砂子は目を奪われる。癖のように、ときどきそつと髪をかき上げる時。その指先が、しなやかに頁ページをめくる時、

そして真砂子は、彼女の左手首に、クリスタルのブレスレットを見つけた。お洒落しゃれな女性ひとだと思った。その優雅な煌きらめきが、ある種の風情そを添えいた。

近づいて、話しかけたかったけれど、勇気がない。第一まだ名前さえ知らない。まして彼女は、自分のことなんて覚えていてはくれ

ないだろう。でもこんな機会など滅多にない。自分から話しかけなければ、いつまでたっても知り合えはしない。

今の自分は、彼女にとって、あのページほどの価値もない。

一步を踏み出す勇気を与えたのは、そんな切なさだっただろうか。意を決し、歩き出す。ゆつくりと、忍ぶような足取りで。そして気づかれてもいような距離まで来たのだけれど、耽読しているのか、彼女は一向に気づいてくれなかった。そしてまた一枚、静かに頁がめくられた。その時、

彼女は自分に気づいた、と真砂子は思った。

視線は本に落としたまま、けれど視界の隅に写る人影をじっと注視してる。まるで野生動物ようだ、と思った。こんな反応をする人がいるなんて、それは真砂子の想像を遥かに超えていた。

とてつもない緊張感に襲われ、真砂子は足がすくんだ。

ややあつて、彼女がゆつくりと顔を上げる。そしていきなりに吹き出した。

ぱつと花の咲いたような笑顔だった。子供のようにあどけない。

真砂子はこの女性ひとがこんな風に笑えるのが意外だった。彼女は頭を本の中に埋め、必死になつて堪こえている。そうして時々見上げては顔色を伺うかがうのだが、まるで旧知の友人の前にいるような打ち解け方だった。そして、

「はははっ、真砂子さん。怒らないでね。わたしあなたを尊敬しているの」

とんでもないことを言った。

そうしてしばらくは笑い転げていたのだが、とうとう事の顛末てんまつを話してくれた。

あの日の夜、伸一から電話があつて、やっぱりいい女というのは最初から結婚するくらいに覚悟がないと相手にしてもらえないものなのか、と間の抜けた質問をされたそうだった。

「？好きだ？って言葉も、プロポーズと同等な価値があれば、そりゃ嬉しいわよね」

彼女は片目を瞑ると、眩しい笑顔を浴びせてくれた。真砂子は気恥ずかしさでいっぱいだった。けれど嬉しかった。好感を持たれていたのだ。

ほどなく気づくのだが、この女性はいたずら好きな一面があつて、事実を脚色する癖がある。真に受けやすい真砂子はよく騙される。だからあの日、伸一が自分のことをどのように語り、それに彼女がどう答えたのかは、未だにわからない。だがいずれにせよ、真砂子は望み通り、この女性と知り合えた。

#### 四

真砂子は電話が苦手だ。必要な用事でも、できることなら使わずに済ませたい。相手の表情が見られないというのは、とても嫌な気がする。大した要件ではないのに、今も受話器の前で躊躇っている。伸一のことなら問題はない。あの女性の言葉は信じていい。だが帰郷の理由を尋ねられたら、困るのだ。伝えたい思いは、まだ言葉になつてくれてない。

そしてもうひとつ、最初にでてくる人。それが問題だった。伸一の母は、まだこの突然の帰郷を、知らせてはいないだろう。何くわぬ顔でやり過ごせばいいのだけど、あいにく、演技力には自信がない。

真砂子は笹岡の家の間取りを思い浮かべた。不慣れな市街局番と、かけ慣れた電話番号をダイヤル。着信音の途絶える空白が、重みと感じられてしまうほどだった。

「はい。もしもし。笹岡です」

非常にゆつたりとしたテンポで義母<sup>はは</sup>は話す。そのテンポには、まったく合わせられない。

「もしもし、お義母<sup>かあ</sup>さん。こんばんは。あの、真砂子です」

「まあまあ、真砂子さん。お元気？」

「はい。あの、」

「はいはい、わかってますよ。伸一でしょ？ 居りますよ。ちょっと待つててくださいね」

真砂子は一つ大きく息を吐いた。こんな何気ない会話でも緊張してしまう。とても好かれてはいるのだけれど、真砂子はこの女性<sup>ひと</sup>が大の苦手だった。

義母<sup>はは</sup>は優し過ぎる。

自分にはもつたいたい、口うるさくない母親には慣れてない。大好きであり大切な人であるというのに、気が置けて仕方がない。そんなすっかり猫を被<sup>かぶ</sup>られてしまう自分は、ほんとうではないと思う。きつと実際より、いい人だと思われる。

「もしもし。真砂子さん？」

！

「・・・・はい」

「なに、帰っちゃったんだって？」

こちらもいつも通りの、いたって落ち着いた声だった。それも婚約以前に長く呼び親しまれた、？さん？づけだ。

「はい。あの、ごめんなさい」

「えっ？ ああ、いいよ。ごめんなさい、は。で、どう？ そっちは」

予想通りの、温かい笑い声。ものに動じないのはこの人の習慣<sup>くせ</sup>だけど、こういう場合のユーモアは、

むしろ逆効果じゃないかしら。

「あの、ほんとうにごめんなさい」

「はははっ。だから、ごめんなさいはいいよ。大したことじゃないじゃない」

「でも伸一さん、お義母<sup>かあ</sup>さんは、まだ知らないんでしょう？」

「うん、そうね。まだはつきりとは言ってないね。けど心配ないよ。うまくやつとくから。なにも正直だけが能じゃないと思って、さつきもね、キミが近頃しきりに故郷に帰りたがってるんだ、って言うたら、えらく同情してたよ」

そう。そんな時、あの人はここを開いてくれる。痛みを分かち合おうとしてくれる。この私のために、その愛情を注いでくれる。それも有り難過ぎるくらいに。

「で、どう？ そっちは。お母さん、かんかんに怒ってるんだって？」

「あの・・・母がそう言ってたんですか？」

「えっ？ 美莊殿から聞いたけど」

「どうして美禰子さんが知っているんでしょう？」

「どうしてって、あいつが知らないわけじゃない」

何の話かわからない。真砂子は言葉を失った。だが伸一は、ああ、なるほどねえ、と、ひとり納得したように呟いた。

「ようするにキミは、昨夜美莊殿が電話したの知らないわけね」

「はい？」

「あいつが言うには、例のメッセージ聞いた後すぐそっちへ電話をかけたんだって。けれど君はちょうどお母さんと派手にやりあった後だったらしく、ひどく取り乱していて、これ以上混乱させるのも可哀想だからって、代わりに連絡した、ということになっていたんだ。」

あんなメッセージもらったら誰だってすぐ連絡するだろうし、喧嘩した、っていうのも当てると思った。もっともあいつの言うことだから、話半分に聞いといたけど。でも昼間電話したときも、これは相当こっぴどく怒られたなあ、って思ったよ」

「伸一さん。あの、美禰子さんはいいたい、どんな風に説明してく



れたんでしょう?」

あんなメッセージ、というフレーズが胸に引っかかる。あの女性<sup>と</sup>が、留守電に残したメッセージをそのまま聞かせるなんて、無神経なことをするわけがないのだけれど、嫌な予感がした。けれどそんな混乱をよそに、彼は毅然と言い切った。

「真砂子。俺はこんなことぐらい、何とも思っていないからね。いくら結婚前の花嫁は精神が不安定になる、ったって、君の最近のふさぎようは、ちょっと普通じゃなかったからね。なんか力になれないかなあ、とは思ってた。それがこれくらいで済んでくれれば、おやすいもんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こっちの方は大丈夫。お袋には上手く言っとくから。早く戻ってきてくれ、なんて言わないから、今度会うときには、普段のままでいてほしい」

伸一は優しい。人の弱さを庇<sup>かば</sup>ってくれる。だがこの人の前で裸になることはできても、こころの在<sup>あ</sup>りようは見せようがない。

「でもキミもひどいよねえ。せつかく騙<sup>だま</sup>されてたんだから、ちゃんと口裏合わせてからかけてくれたらよかったのに」

申し訳ありません。

「あいつとは、俺よりも先に連絡して、ちゃんと打ち合わせしたはずなんじゃないの?」

伸一はきつと微笑んでいてくれたと思う。

その声は、あくまでもウェットな温りを感じさせてくれるのだけど、今は軽い冗句にも、こころはビターに反応してしまう。でも、

仲のいいふたりでよかった、と思った。

「伸一さん、あの・・・」

「ん?」

ほんとうにごめんなさい。

## 五

母は一昨日から機嫌が悪い。お早う、と声をかけるけど、気持のこもらない返答をもらうだけで、目を合わせることもない。テーブルのいつもの席へ座り、私の用意した朝食をとるが、食卓には会話がなない。食べ終われば食器をさっと洗い、仕事へと出かけていく。波風が立たないだけまだましなのかもしれない。毎度のこと、と高志は言うけど、毎度ながらに辛いものがある。

真砂子がひとつため息をつく、今度は無邪気な足音が階段を下りてきた。

そう、気分が重いのは、他にも理由がある。

「お早う」

弟は晴れやかな声で言う。何か言いたげにじっと見つめる姉の視線を、気づかない振りでやり過ごし、テーブルの席に座る。

この子の演技力は大したものだ。

そして、いただきます、と味噌汁を一口すすると、

「これ、姉貴がつくったんでしょ？」

「やっぱりわかる？」

「うん」

自分では母と同じ味を出しているつもりだったのだけど、高志にはちゃんとその違いが見分けられるらしい。初めて言われたのは一昨日だけど、この子にそんな芸当ができるなんて、真砂子は予想だにしていなかった。

「でもどう違うの？」

いつ頃から気づいていたのだろう？

「そうねえ、」

高志はちよつと真顔になって考えた。その表情に釣られていると、急に、にやっ、と笑い、

「姉貴の方が美味い」

噓つき！

以前の高志はこんな種類の冗句はけして言わなかった。真砂子はひどく違和を感じた。だがそんなことよりも、確かめたいことがある。

「高志。おとこの夜・・・美禰子さんから電話があつたでしょう？」

「あつたよ」

「どうして、教えてくれなかったの？」

「ううん。特別な意味はないよ。ただふたりで相談して、それが一番上手くまとまりそうだ、ってことになったんだけど。姉貴としては、やっぱり言っただけよかったよね」

少しも悪びれず、弟はあっさりと答えた。intrigue（秘やかな企み）の片棒を担いだのが気に入っているらしく、ご機嫌だ。確かに伸一との仲はその通りなのだけど、思わぬところで、あの女性との距離を感じてしまった。

「言い出したのは、美禰子さんの方ね？」

「んん。まあね」

「美禰子さん、怒ってた？」

「まさか。心配してたよ。いやあれば、同情してたのかなあ」

そう。昨日の声は温かった。でもそれなら何故、演出の意図を教えてくれなかったのだろう？ あ的女性が言いそびれてるなんて、ちよつと信じられない。

「美禰子さん、わたしが帰っちゃったこと、ほんとはどう思ってるのかなあ？」

高志はくくつと笑った。

「なにかおかしいの？」

「さつきから、美禰子さんのことばかり話してる」

それは真砂子の癖だった。

「少しは婚約者のことも、心配してあげればいいのに」

でも私には、ある種あの女性の方が大切なところがある。

「そうそう。ところで、姉貴は、いったい何しに帰ってきたの？」

真砂子は答えに詰まった。

「まさか、？散歩？するためだけじゃないでしょ？」

この子にこの質問をされるとは、真砂子は夢にも思っていなかった。

「オレ。美禰子さんに心当たりを聞かれて、困ったよ」

「高志は、わたしがどうして帰ってきたと思う？」

真砂子はじつと弟の眼を見た。高志はその思いをさりりとかわし、視線を箸先に落とした。

「さあねえ。でも姉貴は、妙にここに愛着があるじゃない？執着、  
つていうのか。でも普通の人は、たとえば誰か会いたいとか、何か  
理由があつて帰ってくるもんだよ。誰も姉貴みたいに、突然ふらりと  
戻ったりはしないよ」

と言つて、好物の野沢菜をつまむ。自分から尋ねていながら、深入りせず、このまま話題を打ち切りたいようだった。

「高志は、わたしが帰ってきて嬉しい？」

弟は、その口調トーンの変化に機敏に反応した。箸の動きを止め、姉の方を向いた。

「姉貴が帰ってくる度に思ったよ。もう離れて暮らすのが、普通になつたんだな、つて」

.....

「ごちそうさま」

弟は席を立つた。真砂子は継ぎ足す言葉もない。

「暇だったら、オレの部屋、掃除でもしといてよ」

高志はにこつと笑った。

食事の後片づけをして、家の中を見回した。特に深い愛着があるわけではない、オブジェが並ぶ、日常の何気ない風景。長崎にいると、よくこの映像を思い出す。

二階へ上がり、弟の部屋に入る。中学に上がった時、自分の部屋の掃除くらいは自分でやるよ、と高志は宣言し、世話好き（お節介<sup>せつかい</sup>？）な姉を閉め出した。自分の領域を荒らされるのがイヤな性分は共通してる。その気持ちはずっと尊重していたつもりだ。だが今日は？ビザ？がある。

部屋は男の子の割にはよく片づけられていた。押入れを開けると、思い出の品々が出てきた。覆<sup>おお</sup>いを被った将棋台。バットとグラブ。そして動かなくなった、柱時計。

幼い頃、弟はよく父とふたりでキャッチボールをして遊んでいた。『この子は将来プロ野球の選手になるぞ』

口癖のように、父は繰り返した。将棋を教えたのも父だった。弟はすぐに強くなり、駒を落とさなければ相手にならなかったが、何度負かされても、

『俺の教え方がいいんだ』

と得意気だった。

『野球でも将棋でも、名人級になってくれたらありがたいんだけどなあ』

結局高志は将棋よりも野球に惹<sup>ひ</sup>かれたようで、熱心に打ち込んでいた。けれどそれも高校まで。いつか一緒に食事した時、正直に話してくれた。

『本当はオレ、甲子園狙えるような高校行<sup>とこ</sup>きたかったんだよね。まあ、プロの選手までは無理だとしても、そのレギュラーになるくらいは、十分できると思ってたの。うぬぼれじゃなくてね』

あの子も、すっかり大人びてきた。昨日など、たまには俺がもとうか、と勘定を払おうとした。もうお小遣いをあげるような年ではないが、またひとつ、自分のしてあげられることが減った、と思った。これで恋人でもできて、結婚なんか頭にちらつくようになって、もはや相談を持ちかけられることは、ないのだろう。

子供の頃は、一緒に部屋で暮らしたルームメイトだった。それが、それぞれのプライバシーな部屋を与えられ、ひとつの屋根の下で

暮らしても、自分が中学校のときは小学校、高校のときは中学と、一日の多くを過ごす空間が違ってしまった。以後はスムーズな成り行きで、離れて暮らすのが普通になった。高志は時々手紙をくれた、真砂子は必ず返事を書いた。これからだつて、姉弟の絆は消えはしない。会えばまた、親しく笑いあえるだろう。

けれど真砂子は、この子との関係には悔いが残っている。確かに仲の良い姉弟だろう。ただこの子にもつと関心を持って接していたなら、もつと強い絆を結べたはずだつた、と思われてしかたがない。

掃除を終えて外へ出た。？真砂子の散歩？と家族はからかうが、本人にはいたつて真面目な逍遙だつた。実際真砂子はよく歩く。こんなに歩くようになったのは、長崎に行つてからだ。部屋にひとりでいるのが嫌で、いたたまれなくて、よくぶらついた。目新しい街並みは、こころの波風を、少しばかり和らげてくれた。初めて帰郷した折り、真砂子は喜与原の町を歩いてみた。見慣れた何の変哲もない町並みだつたが、埋もれていた記憶をいくつか思い返させてくれた。

この町の風景で一番の思い出は、子どもの頃の、大雪が降り積もつた朝の景色だ。あれは大感動だつた。目覚めると、まるで雪国に來たように、町並みは綺麗な雪化粧をしていた。初めて美しい雪の結晶というものを見た。弟と一緒に、大はしゃぎして遊び回つた。あんなにも雪が降り積もつたのは、後にも先にもあの一度きりだつた。

もう何年も通つていない、小学生の頃に遊んだ路地があるのに気づき、を歩いてみた。よく言われるように、久しぶりの風景は、小さな背丈の子供の目線に焼きついた記憶の映像よりも小さく、ミニチュア模型のように感じられた。

そして、いつの間にか、足を踏み入れなくなっていた道が、数多くあるのに気づき、歩いてみた。仕方ないといえば仕方ないのだが、高校時代は、用事のない所など、まったくと言っていいほど歩いた

ことがない。だから町自体に思い出がない。

ターニング・ポイントは、中学時代にあつたと思う。

中学に入つて、真砂子は母の干渉が急に激しさを増した、と思つた。ずっとバレー部に入りたいと思つていたのだが、

『ダメよ。あなたは帰宅部』

そう無理矢理に決めつけられた。あなたは料理の勉強をしなければならぬ、と言うのだ。けれど料理なら私はよく手伝つていたじゃないか、と少女は穏やかに、対話を試みようとした。だが母は乱暴にコミュニケーションを遮断し、

『あんた、オリンピックでも出たいの？』

ぞつとするような一瞥<sup>いちめつ</sup>を投げつけてきたのだ。けして大げさではなく、身の気がよだつ思いがした。

その夜はショックでなかなか眠つけなかった。悪いことなど何もしていいのに、なんでこんなにも叱り飛ばされなければならないのか？ 母はたまたま機嫌が悪かつただけなのだろうか？ まだ逆らい慣れていなかった真砂子は、反発心を抱く以前に恐怖感に圧倒されていた。とりあえず言うことを聞いていれば、いつかは許してくれるだろうか？ と精一杯楽観的な予想をして、こころをなだめてみた。けれどいつまでたつてもクラブ活動は禁止されたまま、そして毎日のように、母の理不尽さと向き合わされる日々が始まつた。

何をやっても母はケチをつけてくる。買い物に行けば選び方が悪いという。けれどイカは茶色い方が鮮度がいいとか、小松菜は細かい根がよく張つた方が栄養があるとか、けれどそんなことは先に言つてくれなきゃわからない。包丁を握れば不器用だ何だとなんだと小言の連続だ。けれど慣れていないものはしかたないじゃないか。

前はこんな風じゃなかった、と真砂子は思った。小学校の頃は、掃除でもお洗濯でも、むしろ進んでお手伝いをしてた。母だって、助かるわね、とにこにこしてくれた。それが手のひらを返したよう

に、何でもかんでも当たり散らす。

金食い虫、と揶揄され出したのもこの頃だ。給食費やPTAの会費など、何か入り用があると、さも満足そうに微笑んで、

『またお金？』

と皮肉られる。そんな意地の悪い言い方をされるくらいだったら、もらわない方がましだった。真砂子はお小遣いをもらっているということに屈辱を覚えた。早く高校に上がって、アルバイトがしたかった。またテストの成績とか、何でもすぐ金銭的なことと結びつけられた。

『こんな成績だったら、お小遣い下げなきゃね』

と、誰かを蔑むこと<sup>さげす</sup>で自分のパワーを確認しようとする、その目つきのいやらしさに、激しい怒りを覚えた。まったく大人しく<sup>おとな</sup>聞いているにも限度があった。

そして二言目には、

『まったく反抗期はしょうがないわねえ』

お決まりの文句を繰り返す。真砂子はそれがたまらない。

毎日のように当たり散らされた。それでも友好的にコミュニケーションをとろうと、努力はした。けれどどんなに穏やかに述べようと、母はいかなる反論にも我慢がならない。火がついたように怒り出すのだ。

こっちは努めて冷静に振る舞おうとしているのに、なんでそんなにもヒステリックなんだ！、真砂子の辛抱もついに破綻をきたした。娘の気持ちを散々に踏みにじつといて、何とも思わない。？いい子？でいるのはもう終わりだ。これ以上忍んだら、頭がおかしくなってしまう。家庭から憩い<sup>いこ</sup>が消えた。自分の部屋だけが、唯一こころを和めること<sup>なご</sup>できる場所だった。そこに閉じこもり、思った。

こんなとこ出てってやる。できるだけ早く、高校を出たらすぐ。



そんなことばかりを考えていた。

## 六

あの女性<sup>ひと</sup>には、聞きたいことがたくさんあった。あの夜、いくら動転してたとはいえ、私が話したがってたことぐらいわかっているはずなのに、どうして呼び出してくれなかったのだろう？ 高志は同情していると云った。それならば、何故あの i n t r i g u e (密やかな企<sup>たくら</sup>み)を教えてくれなかったのか？ それに、伸一にどう説明してくれたのか、とても気になっている。留守電に残したメッセージ そこには彼女にだから聞かせられる、奥底<sup>ひと</sup>からの心情を吹き込んだ をそのまま聞かせるなんて、あの女性<sup>ひと</sup>がそんな無神経なことをするわけがないのだけれど、彼の口吻は最悪の事態を連想させる。ただの思い過ごしであって欲しい。けれど今回の私の振る舞いを、本当はどう思っているのだろうか？

こんなにも親しい関係だというのに、あの女性<sup>ひと</sup>には？ 怖い？ ものを感じている。普通の人ではあるのだけど、あの女性<sup>ひと</sup>はときどき、個人の運命<sup>つかさ</sup>を司どるダイモン、モイラ達の声を聞き分ける巫女のような振る舞いをする。そして私の人生の決定的な瞬間に、あの女性<sup>ひと</sup>はいつでも一役買ってきた。それが無意識なのだから、怖いのだ。電話の前で長くためらっていた真砂子は、意を決して受話器を取る。そして一番かけ慣れた番号をダイヤル。在宅ならば、発信音はきまって四回目で切れる。

「はい。美荘です」

「もしもし、美禰子さん。真砂子です」

「はい、お電話ありがとうございます。美荘は只今出かけております。メッセージがございましたらピーという発信音の後に・・・」

「美禰子さん！」

「ははははは。真砂子ちゃん元気？」

昨日といい今日といい、この女性<sup>ひと</sup>はやけに陽気だ。ひょっとして、迷惑がつてはいても、今回のアクシデントを案外楽しんでいるのかもしれない。それならそれでいいのだけれど・

でもやっぱりいつものあの女性<sup>ひと</sup>とは違う。

「ええ、まあ、元気です」

「とは思えないけど。で、今日はなんのご用？」

！？・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの、お聞きしたいことがあるんですけど」

「どうぞ」

情感のない事務的な響き。この音色<sup>トーン</sup>は彼女のものではない。

「美禰子さん。あの、伸一さんには、どう説明してくれたんでしょうか？」

「わたしがもしあのメッセージをそっくりそのまま聞かせていたとしても、真砂子ちゃん<sup>ちゃん</sup>はほんとの答えを聞きたい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「真砂子ちゃん。わたしもあなたに聞きたいことがあるんだけど」

「はい？」

「ナーシャはいつ帰ってくるの？」（注）

「ええ、あの、できるだけ早く帰ります」

「それにしてもいったい全体、真砂子<sup>ちゃん</sup>はどうして帰っちゃったりしたわけ？」

私が答えられないのを知っていて、たたみかけてくる。でも何故こんなにも突き放されるのだろう？ まるでやりたいことがあるなら、ひとりでやれ、とでも言われているような。

真砂子は胸が詰まった。この女性<sup>ひと</sup>につれなくされるのはとても辛い。

彼女はその沈黙の意味を機敏に察した。

「真砂子ちゃん。あなたが誰にも告げられないほどの辛い体験をしたことがあるのは、気づいていたわ。」

わたし、あのメッセージ聞いた時、ほんとびっくりしたの。なんだか、あなたのこころの悲鳴を聞いたような気がして」

「・・・あの、」

「あなたの力になってあげたい。でも今のわたしには、祈ってあげることはできないみたい。いくら親友だからといって、あなたのこころの中でわだかまっているものを、解いてあげることにはできないわ。」

こつちのことだったら心配しなくてもいいよ。問題は何もなかったから」

「はい」

「ほんとはもつと早く、そういう真砂子ちゃんの気持ち、気づいてあげるべきだったのかもしれない。わたしじゃ役不足かなあ、あなたの親友には」

「いえ。そんなこと絶対にはないです。わたしこそ、迷惑ばかりかけて、あの・・・本当にごめんなさい」

「ははははっ。それ、真実味がある」

その笑顔の暖かい温もりがこころに響く時、真砂子<sup>ひと</sup>は思う。この女性が幸せなら、自分も幸せなのだ、と。

「まあ、明日はお父さんにでも相談しに行つてらっしゃい。きっと喜ぶわ」

「・・・はい」

(注) ドストエフスキー作、『白痴』のナスターシャ・フィリポヴナのこと。彼女は結婚式当日に、逃げ出した。

千駄木の駅を降りて花を買う。村田家の菩提寺は谷中にある。長い坂道をまっすぐに上がり、細い路地をひとつ折れると、人影がめつきり途絶える。墓町てらまちだな、と真砂子は思う。子どもの頃、彼岸の度に連れられて来たこの場所に、いつかその手を引いてくれた人の骨を納める日が来ようなんて、夢にも思い浮かべることができなかった。

帰郷して、初めて一人でお参りした時、真砂子は小学校に入学して間もない頃の瑣事さじを思い出した。

珍しく、父が愛嬌あいぎょうを出して頬ほずりをしてきた。自分のこと、好きでしてくれるのはわかるのだけど、剃り残した髭が当たって、痛くて、

『いやだお父さん、痛い。やめて。やめて』

いささかの気づかいもなく、思いきり顔を歪めて拒絶した。父は何の気遣いもなく、

『そうかい、おかしいなあ？ さっき剃ったばかりなのになあ』

と呑気に顎あごをなでる。けれども、少女は強迫的に、相手をひどく傷つけてしまったような錯覚にとらわれた。

十五の春に父は死んだ。真夜中に発作が起きて、それまでだった。

底冷えのする夜だった。寒さで何度か目が覚めた。その度に毛布にしっかりく

るまり直し、浅い眠りついた。おぼろな意識が、かすかな階下からの呻うめき声を聞きとった。

母が父の名を呼んだ。何度も呼んだ。短い間があり、鋭い悲鳴が響く。

『真砂子！ 真砂子！』

少女はベットから跳ね起き、階段を駆け下りる。

『救急車！ 救急車！』

言われるままに電話のダイヤルを回した。

119・・・

母はすっかり取り乱していた。閉じられた襖の向こうで、異常な事態が進行している。少女はその扉を開けることができなかった。

サイレンが聞こえた。表に出た。耳をつんざくほどのけたたましさ。ブレーキが軋<sup>き</sup>む。隊員達が降りてきた。目が合って、村田さんですね、と話しかけられた。少女は無言で玄関を指さした。隊員達が担架を運び込む。道路には赤い影絵が回っていた。

父が運び出された。まったく動かない。口元からは唾液が垂れている。付き添う母は一心に、夫だけを見つめていた。

救急車が走り出した。少女虚ろな空間に一人残され、呆然と、次第に間遠になるサイレンの、単調な響きを追っていた。

ふと背後に気配を感じた。振り返ると、弟が立っていた。はっと現実に取り戻された。お父さんが、と言葉をかけようとする、より先に、弟が問うた。

『お父さん死ぬの？』

ばかねえ、死ぬわけじゃない、そう言いたかった。けれど声が出ない。ショックでせき止められていた感情が、奔流のようにあふれ出してきた。

このまま眠られるわけもなく、母からの連絡を待った。ココアを入れて、ふたりで飲んだ。ココアがこんなにも温かく感じられたことはない。居間には、柱時計の音が響いていた。

突然電話が鳴った。

自分が取らなければならない。けれど立ち上がるには、かなりの努力が必要だった。

電話は病院からだった。至急いらしてください、と短いメッセージを受け取った。

厚めに着込んで家を出た。真砂子は弟の手を、しっかりと握りしめた。タクシーを拾いに、大通りまで駆けるように歩いた。病院へはすぐ着いた。夜間出入り口のドアを開けると、受付の若い看護婦さんが不安げな眼差しで見る。そして名前を告げた時の、

あの表情が忘れられない。

照明の落とされた病棟に、緑色の非常口サインが光っている。自動販売機の低くうなる声。ほの暗い廊下は足音をよく響かせた。突き当たりの角を曲がると、明かりのもれる一室があった。

母のすすり泣く声が聞こえる。

ドアを開くと、母は首を垂れて椅子に座り、しゃくりあげている。その背の向こうに、父が横たわっていた。それが当然とも言いたげに、

白い布をかけられて。

葬儀の準備がどのように行われたのかは覚えていない。よく知らない人達が入りしてたようだ。話しかけられるのが嫌で、避けるようにしていた。

通夜。姉弟は早く帰された。何もすることがなく、また何をする気にもなれず、ひとり部屋の中でぼんやりとしていた。

階下で小さな物音がした。最初は気に留めなかったけど、その木片の弾けるような音は、断続的に聞こえてきて、耳障りになった。

真砂子ははたとその正体に気づいた。階段を駆け下り、父母の部屋ふすまの襖を乱暴に開けた。

『やめてよ。そんな！』

弟がひとりで将棋を指していた。盤面には整然と駒が並べられ、その向かいには、父の愛用した座布団が置かれている。姉を見上げるその頬には、涙がこぼれ落ちている。

それがこの子なりの弔<sup>ひび</sup>いだった。

幼い頃、霊柩車を見たら両手の親指を隠しなさい、と教えられた。そうしないと両親が死んでしまう、というのだ。だから少女はいつだって、それを忠実に守ってきた。

子供の頃、友達の中でお父さんがいないという子はいなかった。中学生になって初めて、片親の欠けた子に出会った。そしてそれは自分の身にも起きた。間もなく通う高校で、それは決して珍しいことではないのに気づく。

葬式の朝、姉弟は真新しい制服に袖を通した。

出棺。

家族は斎場へと向かった。

車中、シートにもたれる。窓には見知らぬ風景が流れて行った。通り過ぎていく人々は、黙々と各々の日課をこなし、普段と変わらぬ日々の営みを行っていた。

誰が死のうと死ぬまいと、気にも止めずに。

黒い車は彼らの脳裏に何の痕跡も残さずに消えてゆく。にわかに悔しさがこみ上げてきた。真砂子はその風景を覚えていよう、と思った。とても記憶しきれるものではなかったが、淀みなく流れてゆく景色を、食い入るように見続けた。

手桶に花を差し、線香をもらった。彼岸にはまだ早い。境内は閑散としていた。本堂の脇を通り抜けると、墓石の海。その向こうは楓<sup>かえで</sup>の杜。覚えたくはなかった墓の位置も、今ではしっかりと記憶している。

御影の墓石。水で浄めた。

真砂子は作法をきちつと守る。残り水は隣の墓石にかけてあげ、線香は一本ずつ、三軒両隣に手向ける。そしてもう一本、土くれを盛って無縁仏の為に灯して祈る。

父がその一生に満足したかどうかは知らない。幸福ではあつたろう。ただ人よりも少し短く、娘の花嫁衣装を見ることもなく逝った。残念でしたでしょうね、と同情してくれる人もいる。だが真砂子はそうは思わない。

死んだら終わりだ。何も無い。

真砂子は死後の世界など信じちゃいない。あってもそんなもの欲しくない。永遠にこの？自分？が続くなんて、思っただけでもぞつとする。

この墓の下で父は眠る。東京には珍しい閑静な一角で。私もいつかか甲われ灰になり、ここではないどこかの土の下で眠りにつく。それでお仕舞い、それでよかった。

花を手向けた。

## 八

帰りの車内は制服姿の高校生であふれていた。それがいかにも高校生らしい雰囲気で、真砂子に長崎で暮らし始めてた頃の琐事を思い返させた。それは道行く女子高校生の一団を見た時に感じた、奇異な感覚で、つい数ヶ月前までは、自分もあの中にいて、誰からも女子高生だと思われていた。けれど今はそう思われることもない。自分自身は、大して変わってはいはずなのに、と。



電車を降り、駅ビルの中を歩く。長崎に行く少し前に完成したこのビルは、おしゃれな雰囲気で、評判はなかなかいいらしい。雑踏を好まぬ真砂子も、この人波は苦にならない。ときどき母娘連れを見かける。多くは特別楽しそう、という風ではないのだけれど、いいなあ、と思う。大抵娘の方が背が高く、すらっとしていてセンスがいい。

ビルを出れると駅前の商店街。この通りは加奈崎神社へと通じている。そこには樹齢六百年という銀杏が神木として崇められて<sup>あが</sup>いる。真砂子は銀杏の木が好きだ。秋の色づく頃もいいが、初夏の新葉が可愛くてたまらない。

この境内では月に一度、縁日が開かれる。それが子どもの頃の楽しみだった。真砂子は金魚すくいが得意だった。少々紙がやぶれても、すいすいすくい上げた。そんな遊びも中学生まで。その頃が一番賑やか<sup>にぎ</sup>だった。林立する出店は駅の手前まで伸び、雑踏はかき分けなければならぬほどだった。今は活気が失せてしまった。

子供が少なくなった。喜与原の小学校では、もう一学年に一学級しか作れなくなった。

小学校に上がって間もない頃のある縁日の夜、

『あら！？ 真砂子ちゃん、久しぶり』

と呼び止められた。振り向くと、見知らぬ女性<sup>ひと</sup>が親しげに笑っている。

『学校楽しい？』

その女性<sup>ひと</sup>は、自分とのエピソードを思い出しているかような、懐かしい笑顔を向けてくれた。きっと幼稚園の保育さんなのだろう。

けれど少女はまるで覚えがなく、身動きできないくらいに緊張したけれどそのひと女性<sup>ひと</sup>は何も気づかずに、

『じゃあ、またね』

と人混みの中にまぎれていった。その人と会うことは二度となかったが、一時期、少女は縁日に通ることが、まったく出来なくなった。

路地を折れると静かな住宅が並ぶ。人通りはあまりない。細い路をジグザグに歩いていくと、昔遊んだ公園へと抜ける。ここでは子供達が元気に遊んでいた。ブランコに乗り、砂場でトンネルを掘り、新緑色の歓声が響く。年端のいかない子が無邪気に鳩を追いかける姿を、ベンチの若いお母さんが見守っている。

喜与原町に向かつて歩く。法性院の銀杏も色づき始めている。この寺は町外れ、手前の道の中程で、町名が変わる。

もしもこの通りの反対側で生まれていたら、私は別の学校に行き、つき合う友達も、体験するエピソードも違っていた。

いつの頃だったか、よくそんなことを考えた。

寺の向かいは広い空き地になっている。ここは昔、製紙工場があった。今は取り壊され、跡形もない。道幅は次第に細くなる。車などめったに通らない。あの赤いポストを左へ折れると喜与原小へと続く。

此方へ向かつてくる人がひとり、

ポストの前を通り過ぎた。小道は緩やかに曲がっていて、小学校の塀は見えない。

行人は杖を突き、ゆっくりと歩を進めていた。

だが特別な感慨はない。真砂子には、あの頃はよかった、と懐かしく思える時代など、持っていなかった。その時、

真砂子は、その人が誰か、気がついた。

(・・・何故?)

彼女には、どんなに忘れたいと願っても、けして忘れることのできない記憶がある。

歳を取った。そして眼をそむけたいくらい、小さくなった。

（何故？・・・）

？わたし？の歴史の最初のページに焼きつけられた、刃物のような映像は、

腰がすっかり曲がってしまった。杖先を見つめる双の目の光は弱く、頼りない。

（何故あんなひどいことを・・・）

意識に浮かぶ度に、まだ癒されぬこころの傷口に、新たな痛みを引き起こす。

間近に来て、老婆は自分の体を動かすことに精一杯で、青ざめた顔で立ち竦む相手に気づかなかった。びつこを引くようにゆつくりと、その傍らを通り過ぎた。

通りには、他に誰もいなかった。ささめき揺れる銀杏の梢がまたひとつ、わくらば色の葉を落とした。真砂子はその後ろ姿を、じっと見送った。

## 九

久しぶりに家族全員が夕食にそろった。わずか三人といえども、一緒に食事することは稀となっていた。

「でもお父さんもびつくりしたでしょうね。こうも突然に訪ねられちゃ」

「いや、『やっぱり俺の思った通りだ。こいつがおとなしく収まるわけがねえ』、と思つてらしたことでしよう。父上はなかなか洞察力があつたから」

二人は大笑いした。出汁だしに使われるのはともかく、食卓じきが賑やかなのはいい。それに今日は、母の機嫌も直つてゐる。

昨晚伸一に電話をすると、お母さんに代わつて、と言われた。

『まだすねてるんでしょ？ 真砂子さんに任せておいたら、いつまでたつても埒らちがあかない』

真砂子はため息をついた。おつしやられることは確かにその通りなのですが、この？さんづけ？という新手のユーモアには抵抗したい。

こつこつ？いたずら？をはやらしたのは、美禰子さんだ。

伸一は母に気に入られてゐる。初対面時から、折り合ひはともいい。今年の春、一緒に上京して婚約を告げた。母はけして愛想ではない良い笑顔で、なかなか凜々しかったわよ、と印象を語つた。昨日も、電話口で話す母はにこやかだった。なんでそうなのかしら、と思う。けれどもめ事は、収まつてくれるにかぎる。

食事の後片づけは二人でした。洗い物といつてもわずかな量で、一人でやつても変わらないのだが、自然の成り行きだった。

弟は居間で野球の中継を見ていた。

「お母さん」

母の方を向かずに、娘は切り出した。

「わたし、今日、西山のおばあちゃんとすれちがつた」

母は訝いぶかしげな視線を投げかけたようだ。洗い物をする手が一瞬止まった。

「そう」

娘くせんが何でそんな縁もゆかりもない人の話題を切り出したのか、釈しゃ然

然としない様子だったが、深く詮索<sup>せんさく</sup>することなく、聞きたがつていた近況を聞かせてくれた。  
「あのおばあちゃん、すっかり惚<sup>ぼ</sup>けちゃってね。もうお小遣いももらないみたいで。近頃じゃ、自動販売機のお釣りをあさってる、って」

十

翌朝、母は自分よりも早く起き出して、朝食の準備をしていた。お早う、と挨拶<sup>あいさつ</sup>を交わすと、お豆腐を買ってきて、と頼まれた。玄関でサンダルに履き替えていると、  
「ちゃんと喜与原で買うのよ」  
と声をかけられた。

小学校に上がると、少女はお使いを頼まれるようになった。最初は言われた通りのことをした。けれど間もなく、道草をするようになった。母はちつとも気づかなかった。最初はその程度で済んでいた。

ある日、お豆腐のお使いを頼まれた。もちろんいつもの喜与原の豆腐屋で、ということなのだが、少女はそこを素通りし、喜久井町まで行って買った。手渡すと、母は何も気づかず、ありがとう、いつもの型通りな返事をした。けれど一口味見をするなり大声で、  
『何よこれ！ あんた何処で買ってきたの』  
『……喜久井町』

『誰がそんなところで買ってきて、って言ったのよ！』  
虫の居所が悪かったのか、母の癪<sup>さく</sup>は容易に収まらなかった。そしてしばらくたったある日、またお豆腐のお使いを頼まれた。家を出るなり、少女の足は反対方向へと駆け出した。真っ直ぐ三芳

町まで行き、その豆腐屋で買った。

なんであんなことをしたのだろう？

胸がときどきした。また叱られる、と思うと冷や汗が出た。けれど素知らぬ振りで豆腐を渡した。母はやはり味見をする時に気がついた。

『あんたまた違うところで買ったでしょう？』

『・・・うん』

少女は冷静に声色を判断していた。

母は怒っていない。

『まあ、これは悪くないけどね』

ちよつと困ったような表情で、母は娘を見ると、

『でもこれからは喜与原で買うのよ』

それから少女は道草もせず、言われた通りの買い物をするようになった。

初めて帰省した時、久しぶりに母の味噌汁を食べ、さすがに美味しいと思った。

『そりやそうよ』

母は相槌あいづちを打った。

『馴れ親しんだ味だもの、一番美味しいわよ』

その通りだった。長崎で暮らし始め、真砂子が最初に戸惑いを感じたのも、豆腐の味の違いだった。

心地よい朝の澄んだ空気が長閑のどかな気分<sup>のどか</sup>にさせてくれて、真砂子はちよつとだけ遠回りしてみた。空も快青。川沿いの土手にのぼれば、富士の山が見えそうだ。

十字路を右へ曲がれば法性院、通りの向こうは美咲町、その左の角には、数台の自動販売機が通路を作るように並んでいる。ここは昔牛乳屋さんだった。今は取り壊され、屋根に看板だけが残っている。

その薄暗がりの中に、真砂子は小さな人影を見つけた。その人はのっそりと、眠るような表情で、お釣り口に指先を伸ばしていた。

こういう姿を見て、人は小銭をあさってる、などというのだろうか？ この人がどんな気持ちで、何のために集めているかも知らないで。惚<sup>ほ</sup>けたという言葉は使って欲しくない。あの人は自分が何をしているのかちゃんと知っている。ただ年を取り、意識が霞<sup>かす</sup>み、自分が他人の目にどう写っているかなど、もはや気づくことができないのだ。

その時、能面のように無表情だった老婆の顔に、喜びの色がこぼれた。真砂子は胸が痛んだ。おばあちゃんは嬉しそうに銅貨をつまんだ。けれど不自由な指先はいうことをきかず、硬貨はちゃりんと地面に落ちて転がり、機械の下<sup>すきま</sup>の隙間を通り、真砂子の足下で半円を描いて止まった。老婆はゆっくりとしやがみ込み、指をそつと機械の下に伸ばした。

あんなに勢いよく転がったら、道路まで転がっていつてしまうことぐらい、わかりそうなはずなのに。

年を取るとは悲しいことだ。あの人は何も気づかずに、落としたお金を探している。ゆっくりと丹念に、指先が何かに触れるのを待っている。思うにまかせぬ自らの身体に苛<sup>いら</sup>立つこともなく、放っておいたら、このまま何時間でも探し続けてしまいそうで、真砂子はしやがみ込み、十円玉を拾った。

「おばあさん。落ちましたよ」

できるかぎり、温かい声を出した。そうしておばあちゃんの手を取り、十円玉を握らせた。

「ああ・・・どうもご親切に。ありがとうございます」

老婆はゆっくりと頭を下げた。

覚えていない。覚えているわけがない。覚えてなんて、いて欲し

くない。

彼女の動揺など露ほども気づかぬまま、おばあちゃんは元の無表情な顔に戻ると、ゆっくりと歩き出した。真砂子はその後ろ姿に話しかけた。

わたしは、あなたに十円をもらった少女ですよ。そして何度も何度も、あなたに、ありがとう、と叫んだ、あの少女ですよ。

n de la premiere partie

la fi

## Intermezzo

幼い頃、真砂子は犬が大好きだった。その頃は、どんなに大きい犬のそこへも、臆することなく近づいていき、すぐに友達になれることができた。犬を飼っている家の前を通る度に、ちょっかいを出しては構ってもらっていた。

とりわけ一頭のコリー犬を、少女は気に入っていた。コリーというのは、犬の中でも特別なような気がした。大きくて、利口そうでおとなしくて、そしてちょっと困ったような眼をしてるその犬は、いつもは高い塀の中にいるのだが、ときどき外に放してもらっていて、その路地を通る度に、少女は出逢えることを期待した。外に出ていなくても、下から二列目の穴開きブロックの隙間から呼ぶと、寄ってきてくれた。そしてあの長い鼻に触れられるなら、それだけで満足だったのだ。



初めてその犬に触れた時のことは、今も鮮明に覚えている。

幼稚園の保母さんに連れられ、散歩に出かけた。みんなおそろいの、桃色<sup>ピンク</sup>の帽子と濃緑色の園着。小さな空き地に、赤い実の生った木があった。あれは柘榴<sup>ざくろ</sup>の木よと、保母さんは教えてくれた。あれ、食べられるの、と誰かが聞いた。ええ、食べられるわよ、とお姉さんは答えた。その食べられるという熟<sup>う</sup>れた果実を、少女はじっと見つめていた。

その時、きゃあきゃあ、という大きな喚声<sup>かんせい</sup>が上がった。振り返ると、大きな犬が細長い鼻をこちらに向けて立っている。

こんなにも大きな犬を見たのは、生まれて初めてだった。色艶<sup>つや</sup>のよい長い毛先、すらっと均整の取れた立ち姿、そしてなんて穏やかで優しい目。子供達が喜んでいるのを知ってか、コリーはとことくと、子鴨のような群に近づいてきてくれた。歩む度に、よく梳<sup>と</sup>かされた毛並みはふわふわとリズムカルに揺れ、日の光を弾いて輝いた。その長い鼻は、ひとりひとりに向かってお辞儀をするように、小さな伸びを繰り返す。子供たちはみんながみんなその身体に触れてみたかったのだけど、そのくせコリーが寄ってきてくれると、きゃあ、とうれしそうに悲鳴を上げて逃げ出した。

その優しい目は、真砂子にも近づいてきてくれた。そして鼻先を伸ばしてくれたのだけど、少女も嬉しくなって逃げ出した。大きな犬は向きを変え、他の子供達の方へと歩き出した。

その時、少女は夢中になって後を追いかけ、尻尾の近くの腰の辺りに、ちよこつと触れた。その柔らかな肌触りは、少女を最高にしあわせな気分になさせてくれた。

月日が流れた。真砂子は小学校へ上がった。柘榴<sup>ざくろ</sup>の木は切り倒された。小さな後地はコンクリートが敷き詰められ、駐車場となった。そしていつの頃からか、少女はあの犬を見かけなくなった。コンクリートの隙間<sup>すきま</sup>から呼んでも、もう応えてはくれなかった。

ある日、近所の人達があの犬のことを話していた。

『もうよぼよぼなのよ、あのコリー。すぐ腰が抜けちゃって、ひとりじゃ立ってられないの。よく道の真ん中で、くうんくうん泣いてるわ』

『目もよく見えないんですってね』

『あんなんじゃ、もう生きてたつてしょうがないのに。早く保健所へやつちゃえばいいのよ』

『あの犬だつてもう死にたがつてるわよ』

うそだ！ あの犬はいい犬なのだ！

少女はこころの中で叫んだ。そして踵きびすを返して逃げ出した。憐れみのない言葉が、胸を深く突き刺した。涙が後から後からこぼれ落ちた。

なんてひどい言い方だろう。

犬に会えない日々が続いた。そしてある日、柘榴ざいろうの木があつたところへ来ると、くうんくうん悲鳴のような声が聞こえてきた。あの犬だった。

少女は自らの目を疑った。まばゆいばかりに美しかったあの毛並みが、すっかり艶つやを失い、汚れるままに汚れていた。もう洗つてもらうことも、ブラシをかけてもらうこともないのだろう。病んだように光を失った目、その縁には、多くの目脂が溜ためまつていた。自分が大きくなったのか、痩せ細からったその体軀は、哀れなくらいに小さかった。そんな犬が道の真ん中で、

腰を抜かして、もうひとりでは、立ち上がることもできないでいる。

放っておいたら、このまま何時間でも泣き続けているのだろうか。少女はその後ろに回り、そつと両腕で腰に手をかけ、起こしてあげた。

初めて触れた時、この毛並みは、お日さまの光を弾いて輝いていた。

コリーは立ち上がろうと四肢に力を入れた。萎<sup>な</sup>えてしまった細い両足は、まるで義足のようにかくかくと震え、わななき、少女はびつくりして両手を離れた。支えを失い、一瞬崩れそうになったけれど、コリーは懸命に耐え、起き上がった。口元にはよだれが垂<sup>め</sup>れ、落ちかかっている。助け起こされたのも気づかないらしく、盲<sup>め</sup>のよ<sup>い</sup>うな足取りで、よろよろ、よろよろ、歩き出した。  
少女は呆然とその後ろ姿を見送った。

それ以来、あの犬には会っていない。

## 第二部（前半）

—

柱時計が掛け換えられた。真砂子は父の死を、十分に悲しんでいる余裕がなかった。

葬儀の後、これからのことについて、母から簡単な報告があった。保険金がおりたこと、自分は勤めに出ること、生活が急に苦しくなることはなく、余裕はないが、あなたたちを大学までは行かせてあげたい、などと淡々と語り、

休暇が終わった。

そうして始まった新しい生活。毎日慌ただしく満員の地下鉄に乗り込み、帰りの電車の中で献立を考え、駅前の商店街で買い物をし、夕食の支度をする。はからずも、母に教わった料理の腕が役に立った。

テーブルには、けして座られることのない席がひとつあった。

学校には馴染めなかった。みんな晴れやかな笑顔で、何か素敵なことが起こるんじゃないかとわくわくしている。真砂子はアイデンティティの違いを痛感した。そしてその違和感は、日増しに強くなっていった。

けれど悩んでいる暇はなどなかった。

母の友人のお母さんが、家庭教師の話を持ちかけてきてくれた。以前の母なら、高校生のアルバイトなど認めなかっただろうが、事情が事情なだけに、あっさりと許してくれた。頼まれたのは英語と数学だったが、真砂子は自分なりの方法で教えてみよう、と思った。英語のテキストに選んだのは、神保町の本屋の、読めもしないくせに立ち寄った洋書コーナーで出会った”Peter Rabbit”の美しい絵本。子供向けでわかりやすく、フォントも洒落てい

る。異国の情緒に憧れる思春期の女の子の夢が、そのまま描かれているような気がした。はたして生徒の女の子は、目を輝かせて喜んでくれた。

まずは英語を好きになって欲しかった。

そしていちいち辞書を引かせるようなわずらわしいことは一切させず、直接その内容に目を向けさせた。英語に触れることの面白さ、楽しむ、ということを知って欲しかった。

こんなことをしたのは理由は<sup>わけ</sup>がある。中学に上がる前、真砂子は英語の授業に憧れていた。イングリッシュをマスターできたらどんなに素敵だろう、と思ってた。だが授業はまったく面白くなく、些末な文法の規則にうんざりした。そしていつまでたっても使えないまま、熱意も興味も、次第についていっていった。だから反抗してみたかったのだ。

効果はすぐに現れた。彼女は、英語を勉強するのが楽しくなった、と言ってくれた。こうなれば、成績が上がるのも時間の問題だ、と思った。

一方この子の苦手である数学は、というと、苦労させられた。去年勉強した中で、何か好きなものはあったか、と尋ねると、照れながら、ぜんぶ好きではない。計算問題は面倒くさいし、図形問題なんかはとっかかりがつかめなくて、考えるだけムダなんだもの、と言う。なるほど、と真砂子も納得してしまい、苦笑した。まずは彼女が興味を持てることを見つけなければならぬ。

「もし数学のテストで百点取ったら、どんな気分？」

「そりゃうれしいですよ。八十点でも取れたら最高ですよ」

「じゃあ、とりあえず七十五点を目指してみようか」

「！？・・・・・・」

半分はハツタリだが、彼女の反応を見て、いける、と思った。エネルギーがある子だから、適当な目標を与えて取り組ませるのが良い。取り置いてあったテストをすべて見返してみ、計算問題が得点源になると思った。問題を見て、感情が拒絶反応を起こす前に、

解けるかも、という気になつてくれさえすればいい。誰もが数学的思考に恵まれているわけではない。イヤだ、と感じた途端、思考回路が閉鎖されてしまう子もいる。そういうタイプの子は考えさすよりも、むしろ暗記させた方がよい。だから、これだけは覚えていて欲しい、という典型的なパターンを整理して、与えてみた。それは真砂子にとって負担のかかるやり方で、図形問題などは、ほんとパターンをしばらく込むのが大変だった。けれど教えるというのは責任あることだから、準備に多くの時間を費やした。

中学一年時の復習を通じて、自信をつけさせることに成功した。そして絞りこんだパターンに十分馴染ませてから、かつて受けたテストをもう一度解かせてみた。すると四十五点しか取れなかったのが、期待通りに七十五点をマークしてくれた。これには本人もびっくりで、大喜びしてくれた。これなら、面倒くさい、と思わずにはいられなかった計算問題も、解くぞ、という気持ちで立ち向かえるはずだ。その前向きな気持ちを、他の教科にも向けてくれたら十分だ。この子はきっと伸びる、真砂子はそう信じられた。

次第に、自分を迎えてくれる生徒の目に、信頼の色が増しているのが感じられた。よく勉強してくれる子で、また性格的にも合わせやすく、助かった。数学の授業が楽しくなってきた、と言われた時はほっとした。成績が上がって、お母さんに感謝された時は、しめた、と思った。

それから何人かの子を教えたが、真砂子は幸いにも生徒に苦勞したことはない。最初のケースこそ奇跡ともいえたが、どの子でも、教師としての合格点はクリアしていただろう。評判もなかなかよかった。彼等が勉強するのを好きになり、快活になっていく姿を見守るのは、本当に嬉しいことだった。高校時代に一番熱心にやったことといえば、家庭教師のバイトだったろう。人の役に立っていると実感できるのは、何にもまして嬉しいことだった。

けれど本人の内部では、疑問が日増しに堆<sup>つすたか</sup>くなっていった時期でもあった。

真砂子は勉強するのが嫌いになった。家庭教師のため、教科書や使っていた参考書などを読み返していた時、ふと思った。数学とは一体何なのか？ 因数分解や二次方程式を習得することが、一体何の役に立つのだろうか？ 円に内接したり外接したりしている三角形群の、どことこの角度が等しかろうと、等しくなろうと、そんなのどうだっていいじゃないか。

そして自分の方はというと、思うような良い成績が取れなくなってしまった。レヴェルが高くなったのだから仕方ないのだけれど、英語の六十一点、というのはさすがにこたえた。中学生時分はさして努力をしなくても、上位一桁にいられたけれど、高校となるとそうはいかない。勉強しても勉強しても、なかなか満足のいく点数が取れない。そうしてあがくとともに、いい点数を取ろうとする自分取れなくてがっかりしてる自分に、嫌気がさしてきた。

中学校に上がって間もない頃の、エピソードが思い返された。

漢字の書取テストを返却されたのだが、教師がうつかりと、最高得点者の名前をもらしてしまった。するとたちまちその子目がけて癩癩がぶつけられ、やかみ者が皮肉な嘲笑を浴びせかけた。真砂子はその有り様にぎよつとした。まるで集団ヒステリーだ、と思った。ややあつて教室内が落ち着くと、隣に座っていた彼女が真砂子にぼつりと言った。九十三点だからまだましなのだ、これで百点でも取ったりしたら、もっとひどい目にあわされる、と。

その時まで、みんながこんなにも点数に過敏に反応するなんて、真砂子は思ってもみなかった。観察すればするほど、彼らの行動はおかしかった。そしてパターン化されていた。例えば、テストが採点されれば、すぐに平均点を尋ね、誰彼ともなく他人の点数を聞きたがる。答案用紙の角を折って点数を隠しても、平気でのぞきこもうとする。

そんなにも、テストの点数に縛られなくなつていいのに。

真砂子は周囲と相容れない自分を感じ始めた。

高校に入ってから、状況は変わらなかった。というか、むしろ

悪化した。まず入学試験の点数を基準に人物査定し、？自分？の位置を確認する。

何かがいかにしている、と真砂子は思った。

だが今の自分は一体何なんだろう？ テストでいい点を取ることが人生で一番大切なことじゃない。それは確かにそう思える。けれど自分の中に、それにこだわっている？自分？がいる。

真砂子は、自分が矛盾していくのを感じた。

一方の家庭内はさしたるもめ事もなく、穏やかだった。

母は感じが変わった。家の中を切り盛りしているという自負心が薄れた。関係は、多分よかったのだろう。仕事を終えて家に着く頃にはもう疲れていて、軋轢が生じる余裕もなかった。

この頃の母について、忘れられないエピソードが三つある。

ひとつは、初めてアルバイト代をもらったとき、

「お小遣いもあげられなくて、ごめんなさいね」

と少し哀しげな表情で言われたこと。

ふたつ目は、ショックが大き過ぎて、前後の脈絡を忘れてしまったが、何かの用事で帰宅が遅くなり、母に軽く理由を尋ねられ、いつものようにあやふやな生返事をして、その脇を通り過ぎた時、  
「最近学校のこと、あまり話してくれなくなっただね」

と声をかけられたこと

私は学校の話なんかしたことはない！

真砂子は心底驚いた。ひどい思い違いだ、と思った。真砂子の記憶は正しい。確かに彼女は学校の話など、たえて母に聞かせたことがなかった。だがそれよりもずっと昔、まだ真新しい赤いランドセルと黄色い帽子が似合っていた頃、少女は学校から戻ると、今日一日の出来事を母聞かせたものだった。

最後のひとつは、三者面談の席でのこと。

真砂子は進学を希望していた。家には浪人する余裕も私立へ行く余裕もなく、国公立となると、どうしても地方の大学を選択しなけ



ればならない。家を出ることに抵抗はない。だが家の役割を放棄するのは、こころ苦しかった。

「わたし、大学はたぶん、地方へ行くとと思う」

「うん、いいよ。飯くらい、オレ自分で作るから」

頃合いをみて、弟に切り出してみた。とても言いにくいことだったのだけど、まるで予想通りです、と言いたげに、高志はあっさりとOKしてくれた。

「……ほんとにいいの？」

「嫌だと言ったら、姉貴は東大へでも入ってくれる？」  
気を使わせているなあ、と思った。

自分は面倒見のいい姉だったろう。一緒の部屋にいた頃は、よく勉強を見てあげた。高志自身も高校受験を控えていたが、もう姉に相談することはないらしい。もう何もかも、自分で切り開いてゆこうとする年頃になっていた。

そして進路指導の三者面談があった。結果は決まり切っていることなので、忙しい母をわざわざ出席させるのは気が引けた。面談の席で、国公立進学希望、とだけ書いた進路志望調査の紙を、担任の先生はしばし見つめていた。

「国立、ということになりますと、地方ということになりますが、」  
真砂子は下を向いていた。

「お母さんは、それでもよろしいんですか？」

「ええ」

母は事も無げに答えた。

「この子は家を出て行く子だと思っていましたから」

子を見るに親に如くはなし。認めたくはないが本当のことなのだろう。

母に娘の気持ちなどわかるはずがない。自分の思いを、いつでも一番無視してきた。けれど家を出たいという、本当に望んでいたことだけは、ちゃんと気づいていてくれた。

志望校の選択に妥協はなかった。安全で確実なところなど受けたくない。実力に応分の努力を足したところ、そうでなければ気合いが入らない。受験日が近づいても、真砂子は割と落ち着いていられた。だが冷静であると、周りが見え過ぎて困った。

私立を受ける子は棘々しく、国公立はいいわよねえ、私の受ける大学なんか倍率が二十倍だったり三十倍だったりするのよお、などと感情を害す相手を探していた。流されるだけの子は、とても自分が受験するという雰囲気ではなく、何かお祭りでも始まったような、ハイな気分でした。

みんな他人の顔をしていた。何処からともなく集まってきては、また何処へともなく去ってゆく。何のための三年間だったのだろう。真砂子は訳がわからない。

受験日を間近に控えても、アルバイトは続けていた。

大変なのは今に始まったことじゃない。

教え子も高校受験を控えていた。自分の勉強だけに集中したからといって、受かる保証はどこにもない。

落ちたら働けばいい。ただそれだけのことだ。

生まれて初めて、飛行機に乗った。綺麗な花文字の迎えられ、空港へ舞い降りる。冬の長崎の風を身体いっぱいに受けた、その時、

何故ここへ来たんだろう？

こころの奥にしまい込み、忘れていた疑問が顔を覗かせた。

私の過ごした高校時代、それは私の望んだものではなかった。合格通知をもらって、お屠蘇<sup>とと</sup>気分で薔薇色の生活を夢見ていのに、父が死んで、何もかも変わってしまった。

だが自分は、一体何を望んでいたというのだろうか

私は、私の人生の主人公であるはずだ。けれど何を演ずればいいのかだろう？ 脚本はない。することと言えば、変わり映えしない日常の些事ばかり。そして突然立ちふさがる悲喜劇に、不慣れなアドリブで対処しなければならぬ。

いつまでこんなことをしなければならぬのだろうか？

試験の当日は冷めていた。緊張するほどのものがなかった。もちろん真面目にはやるが、答案に感情を込められないような気がした。けれど試験開始の合図、問題用紙に目を通した途端、

こんなもんで、？わたし？という人間を計れるわけがない！

所定の空欄に所定の語句を記入するだけの単純作業に、何であるにもその労力を払ってきたのだろう？ やり場のない憤りが後から後から湧き上がってきた。

結果はどうでもよかった。どちらも同じようなものだった。

だが合格の通知は届いた。真砂子は複雑な思いで荷造りを始めた。

高校の卒業式に母は出席した。自分にとっては、単なるセレモニーに過ぎないのだが、しかし母としては、やはり嬉しいことなのだろう。三年間はあつと言う間に過ぎた。人が言う程美しいくも華やかなものでもなかった。だがそんな季節も、

もう遠い昔のような気がする。

## 二

十九回目の誕生日は長崎で迎えた。寮を引き払い、ひとり暮らしを始めていたのだが、ふとカレンダーに目を落とすと、その日はすでに過ぎていた。真砂子は、自分自身をすっかり見失っていたのに、気がついた。

大学には完全に失望した。なまじ期待していただけに、ほんとうっかりした。何もかも高校時代の繰り返しだった。キャンパスでは、

会う子会う子にまず共通テストの点数を聞かれる。それが人を計る？公認の基準？であり、疑問をはさむ者は誰もいない。そうして瞬く間にヒエラルキーが形成され、みんなは、？自分の位置？を見つけて安心する。

また彼らの使う？笑み？は怖いと思った。それは共感する能力の欠如を表していた。驕<sup>おご</sup>狎<sup>ひ</sup>に、人間関係に漣<sup>なみだ</sup>ぐ波風の緩衝剤の役割を果たしつつ、他人の粗<sup>あら</sup>を探しては敏感に反応するのだ。まるでヒエロニムス・ボスの描く、十字架を負うイエスを嘲笑う人々のように、誰もが自分の優位を確認したくて躍<sup>や</sup>起<sup>じ</sup>となっていた。そして彼らは自省することがなかった。やはりここは、パチンコで大金すったことでも自慢の種だと思いこめるような、方向性のない社会であった。

女の子は制服を脱いだ気安さで、ウィンドウ・ショッピングを楽しむように、カジュアルなボーイフレンドを探していた。そして誰もが口々に同じことを言った。家庭に縛られるだけが女の一生じゃない、ここで本当に自分の生きがいを見つけるのだ、と。そして男女格差のない実力本位の環境でキャリアを積みたい、と。自立した女性、キャリア・ウーマン、理解のあるパートナー。ファッションと同様に、生き方にも流行<sup>はやり</sup>がある。だが彼女たちが語る未来には、現実味<sup>リアリティ</sup>がなかった。

講義もまったく面白くない。出席しても、ベルトコンヴェアの前で流れ作業をしているような気分になってしまう。真砂子は朝を迎えるのが憂鬱になった。時計の針に従う生活が、つくづく嫌になってきた。そして次第に、自分が何をしているのか、何をしたいのか、わからなくなっていくた。

夏休みになると、逃げ出すように喜与原へ帰った。娘を大学へ通わせることができたのを誇りに思っているのか、母はニコニコ顔でまるで自分自身が大学に入学したように迎えてくれた。けれど弟は、顔を合わせるなり、

「姉貴、表情悪いよ」

端的に言い当てた。

この子に見抜かれるようじゃ、おしまいだ、と思っただけれど、もはや誤魔化す氣力もない。

真砂子は弟を食事に誘った。それは初めての試みだった。姉弟といっても、ゆっくり向き合って話す機会など、まるでなかった。弟は飲み始めたアルコールに話好きの舌が滑らかに回り、楽しませてくれた。けれど一息ついた後、

「ところで、大学の方はどうなの？ 楽しくないんじゃない？」

「うん・・・高志は、学校楽しい？」

案の定、デリケートな話題を切り出し、てきた。真砂子は視線を逸ら、苦しまぎれに質問を返してみる。年端のいかない子供を誤魔化すような手だったが、問題は思いも寄らぬ方向へ飛び火した。

「高校だよ。楽しいわけじゃないじゃない。姉貴だって、ちつとも楽しそうじゃなかったよ」

「わたし、そんなに嫌そうだった？」

「半年のことだよ。もう忘れちゃったの？」

虚を突かれた。自分が弟の目にどう写ってるかなんて、まったく考えたことがなかった。目の前にいるのは、冷静な観察眼を持ち、外連味の<sup>けれんみ</sup>ないアイロニーをあやつる、自分とは違う個性を持った、独立した一個人だ。

「高志は、学校イヤ？」

「イヤだね」

「どういうところが？」

「まあ、授業がくだらない、というのは大目に見るよ。教師なんてプライドばかり高くて、good for nothing（役立たず）、でも扱い方は慣れてるからね。でもなんだよ、あれは。よその偏差値の低い高校の制服を見てにたつくような奴らは。俺は奴らとまともに話ができない。なにせ二言目にはつつかかってくる。いかれてるよあれは」

「止めたい、とか思わない？」

その気持ちはよくわかる、だから、思わず本音がもれる。高志は真っ直ぐ姉の目を見つめ返した。ちよつと質問が過ぎたかもしれない、と真砂子は思った。

「止めたって、どうにかなるわけじゃないでしょ。環境が問題なのは確かだけど、要は自分自身がどうするか、ってことなんだから」  
そこまでは誰でも言える。肝心なのは、その後だ。

「じゃあ、高志はどうして学校へ通ってるの？」

「そうねえ。どうしてでしょうねえ。まあとりあえずは、野球をしに行ってるんだけどね」

そう。この子には、まだ全力で打ち込めるものがある。

「いいもんだよ、一生懸命でいられるというのも。充実感がある」  
たとえばわらでも、すぐれるだけでした。

長崎へ戻った。生活は何一つ変わらず、同じ事の繰り返しだった。ある朝、学校へと向かおうとしたのだけれど、両足が意思に反して立ち止まり、くるつと踵を返した。

学校というものを、生まれて初めてさぼった。

襟足から背筋にかけて、冷たい汗が流れ落ちた。胸の鼓動が大きく響き、足音が、耳に長くこだました。緊張はいつまでも解ない。けれど町並みは静かだった。道行く人もまばらで、みんなのんびりとしていた。すれ違う行人のことなど、誰も気に留めてはいなかった。

公園のベンチに腰掛け、空を見上げた。きれいな青空だった。風はもうすっかり秋色。細長い雲が高く遠く棚引いている。これでいいのだ、と思った。

何をせかせかとあせらなければならぬのだろうか？

真砂子は、自分が怠惰<sup>たいだ</sup>になっていくのを感じた。朝の目覚めが悪くなった。何とはなしに、ぼうつとやり過ごす時間が多くなった。気が向かなければ、講義も出席しなかった。バイトさえやっていれば生活はできたし、料理に手を抜ても、誰に迷惑をかけるわけでは

ない。

だが転機は突如として訪れる。

正月に帰省した折り、中学校の旧友に誘われ、初詣に繰り出した。帰り道、喫茶店に腰を下ろすと、たわいない噂話が始まり、同級生の中で最も早いウェディングの話題となり、盛り上がった。

もうそんなことも起こるんだ、そんな軽い驚きと新鮮な感動。真砂子の頬に、笑みがこぼれる。その子とは一度同じクラスになっただけで、ほとんど会話を交わしたことがない。もつと話しておけばよかった、と思った。はにかみ屋で目立つのがきらいなその子は、ちよつと口をとがらす癖があり、何かあるとさつと顔を赤らめて、泣き出しそうな表情になる。そんな彼女に、

もうじき赤ちゃんが生まれるそうだ。

式に招かれることもなく、深いつき合いにはならなかったけど、そのしあわせをこころから祝福してあげたかった。そして素敵な未来を創り出していつて欲しい、と願った。

一体どんな恋愛をしたのだろう？

恋愛に縁遠かった真砂子にとって、それは新鮮なファンタジーであつた。そんなことが起こつてもいいのだと思うと、胸がときめいた。こそばゆく温かい想いが全身にあふれてくる。そんな気分を味わったのは久しぶりだ。

だが幸せな思いは長続きしない。旧友のひとりが、ニタニタしながら言い放った。

「でもああいうのイヤよね。もうデキちゃってさあ」

するとみんな一斉にに吹き出して、ケタケタと笑い転げたのだ。

何で友達などと思い込んでいたんだろう？

こころをずたずたに切り裂かれた。煮えたぎる怒りは、夜半を過ぎても一向に収まらない。

愛し合うふたりの門出を、なぜ嘲り飛ばせる。

だがその憤怒の中核には、大きな悲しみがあつた。

どうして？ どうしてそんなにも人を思いやれない？

人と人を繋いでいる関係がこんなにも希薄だとは、前々から気づいていた。弱いものいじめが絶えない国だ。けれど認めたくはなかった。

正気じゃない。みんな自分のしていることがわかってない。？自分？が見えていない。人間として、何が一番大切なのか・・・そう思えずにはいられない。

アルバムを広げれば、遠足、林間学校、運動会と、みんな嘘のようにここにしている。楽しかった。楽しい思い出と思っていた。だがもう久闊きゅうかつを叙じょすこともない。あの頃は、仲のいいクラスメートだと思っていた。それが、ひとたび離れてしまえば、友との間をつないでいた情感など、霧のようにどこかへと消え失せてしまう。学校が、ただ数年共に過ごし、別れるだけのとこだったら悲しい。そんなことはない、会えばまた親交を温められる、そう思っていたかった。子どもの頃、真砂子は学校が大好きだった。けれど、いつの頃からか、何かが狂い始めていた。

暗い情念にさいなまれ、一睡もできない。夜が白む。鳥達の声が聞こえてきた。

アルバムの写真を、すべて破り捨てた。

真砂子は父の墓を参った。訪れずにはいられなかった。娘の悲しみを自分の痛みとして受け止めてくれる、そんな愛情を感じさせて欲しかった。父は私を愛してくれた。その誕生を祝福してくれた。今だって、きつとしあわせを祈っていてくれる。

すれ違つていった人達のことを思うと悲しかった。だが仕方ない。それにしても、なんでこんなにも嫌なことが続くのだろう？ 一体いつまで忍べばいいのだろう？

涙は後から後からこぼれ落ちた。



長崎に戻った。倦怠感など、木っ端微塵に吹き飛んでいた。自身の中で、新たなエネルギーが奔流ように沸き立っている。何かをせすにはいらなかった。

真砂子は父との一番美しい記憶をたどった。誕生日になると、父はきまって一冊の本をプレゼントしてくれた。『グリム童話集』に始まって、『ラモーナとお母さん』、『クロードディアの秘密』、『西遊記』、『ジヨコンダ夫人の肖像』、etc・・・そのどれにも娘の成長を祈る、直心な愛情が込められていた。

『まぼろしの小さい犬』は何度も読み返した。家庭の中で孤独しがちな少年が犬を欲しがる。けれど約束した誕生日のプレゼントに贈られてきたのは、犬ではなく、犬の絵だった。高望みなどしていないのに、少年の小さな願いはいつでも裏切られる。つかもとと伸ばした手をすり抜けていく夢の数々。思い通りにならない現実疲れ、少年は誰にも邪魔されることのない、空想の世界へと避難する。そこは何でも夢が叶うお伽の世界。だがそれはひとときの休憩所。少年は樂園を離れる。それは身を引き裂かれるほどの辛い決断だった。そして現実の世界へと再び舞い降りた時、夢に描いた通りではないが、現実が自分に与えてくれたプレゼントにこころを開き、自分を愛してくれる命をその腕にしっかりと抱きしめる、あのラストシーンが好きだった。

最後に手渡されたのは、『あのころはフリードリッヒがいた』、ドイツの片隅で起こった大戦下の悲劇。巨大な時代のうねりの中で、無慈悲に踏みにじられていく尊い命の数々。それは自分とはかけ離れた遠い世界での出来事だと思っていた。けれど程度の差こそあれ、それは誰の身にも起こっていることなのだ。

そしてもうひとつ、私のために用意され、贈られなかった本がある。それはいつものように、近所の本屋のブックカバーを掛けられ、ピンクのリボンでラッピングしており、私に読まれるのを待っていた。

イリーナ・コルシュノウの、『誰が君を殺したのか』。

ここから始めようと思った。

それからは文学史で聞きかじった名前を頼りに、手当たり次第に読みあさった。それが何のためになるかなどどうでもよかった。現実とあらがっている手応え、生きている実感が欲しかった。寸暇を惜しみ、憑かれたように読みまくった。

ある日、通い慣れた図書館を出ると、真っ赤な夕陽が輝いていた。あまりのまばゆさにめまいを感じ、思わず手をかざした。その痛いほどの刺激が、なぜか心地よかった。目を閉じて、ひとつ大きく深呼吸。心臓の鼓動が喜びを告げている。血潮が全身を駆け抜ける。からだ全体が、大きな光に共鳴している。

無限の慈しみを持つてすべての生命に分け隔てなく温もりを与え、育む。そんな太陽と同じ生命の光が、自分の中にもも輝いている、そう感じられた。今日一日を精一杯生きた、と実感できた。そんな万感の思いで見つめる春の日差しの中で、真砂子は、

巡り来る季節の胎動を感じた。

variations sur la th?mede  
elle”

（『彼女』の主題による変奏曲）

Var. ?

図書館の裏のベンチに腰掛け、また瞬く春の木漏れ日に心を和ませていた。そんな風に安心していられる時間を、真砂子は必要としていた。ここは人通りがまばらで、一息つくには丁度よい。目を閉じて、

風にそよぐ葉擦れに耳を傾ければ、せわしない感情がないでいく。

「真砂子ちゃん」

ぎよっとして振り返ると、真後ろに彼女が立っている。

真砂子は今の今まで、ずっとこの女性ひとを探していたのだ。彼女は伸一と同じ歳、学年は一つ下。近づきたいと願っていても、一緒に講座はなく、さりとて彼に頼むのは抵抗があり、半ば僥倖けうじやうを待ちわびながら、キャンパスに来ればいつでもこの女性の影を探していた。

三度目の出会いは、向こうから話しかけてきてくれた。

いつの間に近づいたのだろうか。反射的に立ち上がるが、頭の中はもう真っ白だ。目を大きく見開いたまま、返事をする事もあたわない。あまりの衝撃に呼吸が整わず、波打つ胸の鼓動が息苦しいけれども彼女はそんな動揺など、まるで気づいていないかのよう  
な、にこやかな笑みで、

「あなたのことはよく見かけるの。一昨日も、会計課に並んでるのを見つけたわ」

よく見かける、って？

「奨学金もらってるの？」

奨学金をもらっていることには、引け目を感じていた。家庭に生じた不幸の結果であって、個人としての価値を下げることはないのだけど、あまり人に知られたくはない。

「はい」

「じゃあ、わたしと同じ貧乏人なんだ」

彼女は一瞬歯を見せて、朗らかに笑った。再び閉じられた唇の浮かぶ優雅な曲線は、気にすることないよ、と言いたげに、人の弱みをかばってくれた。

そして彼女はじっと見つめてくる。長所も短所も、何もかも映し出されてしまうような瞳の輝き。そんな眼差しに見つめられると、真砂子は、

その視線を外せなくなる。

真砂子は伸一が苦手だ。嫌いではないのだけど、自分よりも？かくれんぼ？がお得意なのが、ちょっと癢にさわったりする。今日もまた彼女を探し出す前に、見つけられてしまった。気詰まりすることなく話せるし、むしろ楽しいのだけれど、この人は私を誤解していると思う。つき合ったらきつと、想像してたより退屈な子だと思うだろう。伸一は一目惚れだというが、真砂子はそのなものなど信じちゃいなかった。好きと言ってくれるなら、もっと知り合った後で言っただけだった。もう少し距離を置いていたい。でも、好きだと言ってくれた人に、あまりの不義理もできずにいた。

ただひとつ、とっても気になっていることがある。

この人がなんであの女性の友人なんだろう？

その謎は解きたくてたまらない。要するに、真砂子はこの人をどうしていいかわからなかった。その時だった。

「おじゃまかしら？」

不意に背後から彼女の声が響く。

「はい。お邪魔です」

「よかった。おじゃまじゃないなんて言われたら、どうしようかと思ってた」

無意識なのか狙っているのか、彼女はまたも真後ろから忍び寄ってきた。なんでこんなにも驚かされるのだろう。しかもこの女性は伸一が感情を交ぜぬフラットな口調で応戦してきたというのに、いたって上機嫌で、コーヒークップを置くとこちらを向いて、ニコツ、と笑う。

こういう会話が成り立つ自体、驚異である。

伸一は彼女の登場にはまったく関心がないらしく、途切れた話の

続きを始めるが、真砂子はとてもそれどころではない。だがまともに見つめるわけにもいかず、意識の端で、ちらと彼女の様子をうかがった。

休息を欲していたのか、彼女はプライヴェイトな空間にひとりきりでいるように、ゆったりとくつろいでいる。カップを大切そうに両手で捧げ持ち、香りをかく。口付ける時はちよつと目を細め、喉ごしに味わう。そうして思いの外、あどけない笑顔がぱつと花開く話に加わりたいた素振りはまるでなく、一杯のコーヒーを、たつぷりと時間をかけて楽しんでいる。

伸一は時計に目をやり、講義がある、と立ち上がった。あら？、と彼女は残念がったけど、彼はあっさりと背を向け、歩き出した。真砂子は肩の荷を降ろした。やっと二人きりになれた、と思った。彼女は、伸一の後ろ姿を目で追った。そしていつまでも、じつとその方角を見つめている。

真砂子は不穏な雰囲気を感じ知した。不興をかったのだ。

彼女がこちらを振り向く。ドキっとした。だが、目を合わさないわけには、いかなかった。

「真砂子ちゃん。今伸一君の話、聞いてなかったでしょう？」

鋭い怒りが突き刺さる。だがそれも一瞬だけ。彼女はさつと表情を和らげた。それは真砂子があまりにもおびえたからだ。

「女の子なのはわかるけど、それ、気をつけな。見てる人はちゃんと見てるんだから」

もはや彼女は責める気も論とす気もない。慈しむような柔らかい眼差しで、見つめてくれる。真砂子は胸に染みた。苦い教訓だった。彼女は謎めいた微笑みを浮かべ、意味深長な科白セリフを選んだ。

「まるでフラニーね」(注)

(注) J. D. Salinger, 『Franny and Zooey』の一シーン。恋人の話を聞いていなかったフラニーは、「マティーニのオリーブをもらってもいいかしら?」、と話の脈絡と

は関係ない失言をして、感づかれてしまう。

V a r . ?

今にもそよぎ出しそうな彼女の髪を、ガラス越しに見つめていた。その向かいには、知らない男が座<sup>ひと</sup>っている。後ろ姿から察するに、たぶん不覚を取ったのだろう。混雑が絶えないカフェでは、相席をしなければならぬことはしばしばだ。

後ろ姿から、苛立ちの感情が読みとれる。けれど向かいの人は、自分のことは話すけれど、相手のことは聞く耳がない、といった風で、まったくそれに気づいていない。

仲へ割って行って、お邪魔してあげてもいいのだけれど、決心がつかない。この前の出来事が気になっている。そんなこと、あの女性<sup>ひと</sup>は気にも留めていないだろうが、真砂子は、過去をずるずると引きずってしまいがちな性格なのだ。

きつかけがつかめず、真砂子はじれた。だがコーナーを曲がり、彼女の横顔をうかがい、はっとした。

足早にエンタランスをくぐる。機をうかがっていた彼女はめざとく気づき、あっ、真砂子ちゃん、待ち合わせてたの、じゃあね、と小気味よく逃げ出した。カフェを出ると、彼女はさもほっとしたように、

「助かった！　ありがとう。ほんといいタイミングだったわ」

「油断されてたんですか？」

「そ！　わたし、カフェイン依存症でね。ちょっと家までもちそうにないから、寄ったただけ、ほっと一息つけない場所ではっと一息入れようと思ったのが、そもその誤り。ここいいですか？　とか言われて、思わず、はい、って言っちゃった。さっと飲み干して、今終わりましたから、と立てばよかった」

「ああいう人ってイヤですよ。相手が迷惑しているのに、それに気づけない」

「んん、あなたの揚げ足をとるつもりはないけれど。人は嫌じゃない。というか、関心外。ただ、ああいう状況はイヤ！」

「罪を憎んで人を憎まず、ということですか」

「わたしそんな出来た人じゃないわ。ただなるべくなら、人のことは悪く言わない方がいい、って、そう思ってる」

「よく言われますよね、そういうこと。わたしはあんまり、納得していないですけど」

「うん。わたしもしよっちゅう悪く思ってるわ。言っただしょ。わたし出来た人じゃないって。むしろ？悪い？人だもん」

真砂子は言葉が継げない。彼女の話はとらえどころがない。このまま切り上げるのが、一番の上策のように思えた。

「あつ！？　ところで真砂子ちゃんは、あそこへ何しに来たの？」

「なんか飲みたかったんじゃないの？」

「いえ、あの。べつに……。何が飲みたかったわけじゃないんですけど、」

真砂子が必要以上に驚けば、じゃあ何をしたかったの？　と彼女はいぶかしげな顔を向ける。

本能は瞬間的に指示を出した。

（嘘をつけ！　後ろめたい感情などおもてに出すな）

ところが嘘をつき慣れていない真砂子には、それができなかった。「困っていらしたようでしたから、あの、声をかけたほうが、いいのかなあ、って、」

彼女の声のトーンが変わった。

「そう判断するまでに、どれくらい時間が必要だった？」

まさか、十分弱、とは答えられない。

「ああ！　なに？　真砂子ちゃんは、わたしがあんなのするっかわせるとも思ってたの？」

彼女はあきれた顔でひとつ大きなため息をつくと、

「わたし、そんな器用じゃないよ」

くるつと背を向け歩き出した。真砂子はその横顔を覗けば、

「はぁ〜ん。真砂子ちゃん、わたしが困ってるのに気づいてて、話しかけてくれなかったんだあ」

シヨックだった。またもや彼女の機嫌を損ねてしまった。彼女は正面を向いたまま足早に歩き、顔も向けてくれない。真砂子は言いつくろう術すべもなく、はらはらとその後をついて行った。

交差点にさしかかる度に、その足の進む先をうかがえば、彼女は自分と同じ帰り

道をたどっていく。歩くペースが普通になった。真砂子は仲直りのきっかけを探した。小さな橋の手前で、彼女は不意に歩みを止めて振り返る。

「今日はお買い物しないの？」

「！ ？ ……」

確かにここを折れれば、商店街へ抜ける。学校帰りに都合よく、夕食の支度には事欠かない。よく利用するのだが、

なんでこの女性ひとが知っているのだろうか？

謎をかけて、人を困らせては楽しんでる、あのいたずらっぽい瞳レスポンスが応答を待つ。そしてようやくに、あなたのことはよく見かけるの、と言った、あの科白セリフの意味を明かしてくれた。

「実は通り道なんだ。真砂子ちゃんのお屋敷」

V a r . ？

図書館という場所はとても気になっている。一度巡り会えたところなら、また会えそうな気がするのだけど、寄りにくい事情もあった。読書に凝ってた頃、切りつめてたからここで借りていたのだが、常連となると受付で顔を覚えられ、



『これいい本だよね』

とか、

『この小説ね、悪役なんだけど、すごい面白いキャラクターが出てくるんだ』

と声をかけられた。

そんな何気ない一言がとてもありがたく感じてしまうほど、ナーバスな時期だったから、自然と笑みを返していたのだったが、

どうもそれがいけなかったらしい。

真砂子はエントランスのカウンターに伸一を探した。打ち明けられる前から、挨拶だけは欠かしたことがなかった。数人の列の向こうで、彼は自分に気づくと、指を二本立て、館内の一角を指し示した。見透かされたような気がして嫌だったけど、それどころではない。急いで二階へと駆け上がった。

指さされた先はひと気のない、海外科学雑誌のリファレンス。案の定、その清閑な空間に、あの女性ひとがぼつりと座っていた。ひとつ深呼吸をして、真っ直ぐ彼女のもとへと歩んでいく。今日の真砂子は自信があつた。けれどすぐ側まで来たというのに、彼女は一向に気づいてくれない。真砂子は立ち止まり、そつと声をかける。

「美禰子さん」

一心に読みふけていた彼女が、ゆつくりと顔を上げた。それは驚くでも喜ぶでもなく、ぼんやりとした眼差しだった。

「あの、よろしいですか？　ここ」

彼女は物憂げに頷くと、本に目を落とし、また別の世界へと旅立つてしまった。

タイミングが悪過ぎた。仕方なく、向かいの席に腰かけ、真砂子は読みたいもないテキストを広げた。

ときどき上目づかいに様子をうかがうが、とても話のできる状態ではない。時間だけが静かに過ぎていく。それにしても、何をそんなに真剣なのか、と気になって、真砂子はそつとタイトルの文字をさぐった。けれど表装された厚い背表紙は、そのアイデンティ

テイを知られるのを拒むかのように、微妙な角度に傾けられていて、判読できない。少し頭を下げ、細かい文字に目を凝らした。

洋書？

と真砂子が気づくやいなや、ぱたん、と本が倒された。そして例のいたずらっぽい瞳が、無邪気な笑みをたたえている。肘立てて組んだ両手に顎あごを乗せ、彼女は真っ直ぐに見つめてくる。

「あっ、あの・・・ごめんなさい。ただ、どんな本を読んでいらっしゃるのかと、思つて、」

「ううん。そうじゃなくて。ただ、」

彼女は真砂子の戸惑いなど、まるで気づいていないようだった。

「わたしのどこが気に入られたのかなあ？　って」

Var. ?

休日の朝、軒先に洗濯物を干していると、下から、お早う、と声をかけられた。真砂子はその声の調子に、あまり上機嫌とは言えないものを感じた。

「お出かけですか？」

「真砂子ちゃんも来る？」

「はい。あの、どこへでしょう？」

「シネマ」

でも来ないでしょ。

そんな恨みがましいシグナが、淡く瞳に瞬またたいた。

「あっ！　行きます。ちよつと待つててください」

けれどまるで聞こえていない。彼女は早足に歩き去る。真砂子は急いで支度をして、後を追った。

追いついたのは、映画館のある通りのひとつ手前、

「美禰子さん！」

と大きな声で呼ぶのだけれど、彼女は振り向く素振りも見せず、そのまま角を曲がっていった。後に続けば、彼女は入り口で振り返り、二枚買ったよ、とチケットを指でかざし、そのまま中へ消えていった。

真砂子も後に続く。けれどホールに彼女の姿はなく、只今から上映いたします、というアナウンスが流れた。扉を開け、空席の多い、朝一番の館内に目を通す。性格的に、後ろの方に座っていそうな気がした。予告編の映写が始まった。彼女はすぐに見つかった。少し仰ぎ見るように、スクリーンを見つめる、横顔のシルエット。今日の瞳の色彩には、いつもと違う真剣さがある。真砂子はその隣へそつと腰掛けた。

映画は面白かった。あるワンシーンが強く印象に残った。

互いに惹かれ合いながらも、想いを打ち明けられずにいるふたり。恋い焦がれ、思いあぐね、女は恋する人に、差出人の名を伏せてコンサートチケットを送る。男は来た。彼はバルコニーのボックスにひとり、招待してくれた人を待つが、誰も現れない。演奏が始った。音楽は、伝えられぬ思いそのままの切ない憂いを奏でる。隣の空席に気をもんでいた彼も、次第に引き込まれていく。そして闇の中に射し込む一条の光のように、甘美な旋律が流れる時、深紅のイヴニングドレスを身にまとった彼女が、そつと歩み寄る。

映画ならではのシーンだと思った。ましてヨーロッパの古い映画だ。自分にはとても起こりそうもないシーンだけど、隣に座っている女性なら、結構様になったりして、と真砂子は思った。

映画が終わると、果たしてこのシーンが話題となった。

「美禰子さん。あれ、何の曲かわかります？」

「シヨパンのチェロ・ソナタ。彼女が現れるのは、第二楽章のトリオが始まる場所」

さすが。

「気に入った？」

「はい」

「あれいいわ。真砂子ちゃん、おやりなさいよ」

並んで歩いていた彼女は、真砂子の前に立ちふさがる。小首を傾けると、柔らかな髪が肩から滑り落ち、リズムカルに揺れる。

「いい？ 想像してみて。恋い焦がれている人が目の前にいるの。隠れた位置からあなたは見守っている。わたしの思いを乗せたメロデイが、どうか彼のところに届きますように、と祈りながら」

たわむれで言っているのではない。爽やかな笑顔を振りまきながら、本気で薦めている。その言葉は媚薬のように、胸をときめかせる。けれど、

「そんな、ダメです。わたし」

「ダメじゃないわよ。あなたが、あなたの人生のヒロインよ。素敵に演じなさいよ」

真砂子はときめくのが辛かった。

「わたしなんか似合いません」

「似合わないわけではないでしょう！」

激しい一喝だった。けれどその眼差しは、悲しみに満ちていた。そして訴えるように言う。

「愛を捧げる瞬間よ」

V a r . ?

それから彼女は、しばしアパートへも寄ってくれるようになった。というか、真砂子が？釣った？。エスプレッソで釣った。その情報は伸一から仕入れた。真砂子はそもそも、コーヒーを飲む習慣などなかったのだ。思い切って、彼女の好みを聞いてみると、伸一は、死んだ親父のエスプレッソが気に入っていた、ガキの頃から飲んで

いた、できあがる過程に興味があるみたいで、いつもじっと見つめていた、と教えてくれた。そして、近所の行きつけのモカ・ベースのオリジナル・ブレンドが好きだった、と付け足してくれた。

真砂子は彼の話複雑な思いで聞いた。

その情報はそっくり活用させていただいた。ついでに、ちょっとばかり値の張る上品なコーヒークップも買い揃えた。

彼女に初めて珈琲を立てた時、素敵なカップね、と彼女はにこやかに笑い、しげしげと見つめた。しかし香りをかぐと、表情が一変した。そしてカップを両手で捧げ持ち、もう一度香りをかぎ、目を閉じて、一口すする。彼女は動かない。その静寂には重みがあった。再び開かれた瞳に写るもの、真砂子はそれが何か、判別できなかった。ただその印象深い色合いを、深く胸に刻み込んだ。

珈琲を入れている間、彼女は大抵鏡の前にきちつと端座し、ずっと髪を梳かしている。それは彼女の習慣で、その姿はおしゃれな女の子がお母さんの留守に、内緒で鏡台と化粧品を拝借しているように、可愛かった。

支度が済んだ。彼女は尚もお洒落に余念がない。真砂子はそつとその後ろに廻り込み、言った。

「美禰子さんの髪つて、とっても綺麗」

頬にぱつと紅が差し、彼女は崩れるように両手で顔を覆い、何度も何度も首を振る。何が琴線に触れたのか。こんなにも動揺するなんて、言い出した方が狼狽うろたえてしまう。ややあつて、彼女は微かな声で呟いた。

「うれしい。そう言われたい一心で、ずっと梳かしてきたの」

V a r . ?

美禰子に出逢って真砂子は変わった。自身を惹きつけて止まない、

あの瞳、あの笑顔、そのすべてが好きになる。思春期の女の子のように、いつでも彼女の側にいたかった。

服を買い行くから、と言うのでついていった。行きつけらしいのブティックは小綺麗な店構えで、ショーウィンドウに特色があった。右上に『デザインいたします』の文字。そしてイヴニングやウエディング・ドレス、社交ダンスの衣装の写真が、さり気なく飾っている。

この店は前から知っていた。だが中へ入ったことはなかった。自分には、品が良過ぎる気がしてた。だがこの女性は何の躊躇もなく扉をくぐる。後に続けば、アロマのいい香りがただよってきた。

すらつと背の高いマヌカンが、涼しげな笑顔で迎えてくれた。少し甘えるような声で、沢木さん、と呼ぶその人に、真砂子は紹介されたのだが、あら、珍しい、と腕を組まれ、さも不思議そうな顔をされてしまった。

似合いそうな新作があるわ、と請われるままに試着すれば、ファッション・ショーの始まりだ。表情を作りポーズを決め、繚乱百花たる風情で舞う。鏡の中の姿を楽しむ彼女はあくまで無邪気で、一方の沢木さんかというと、十二分に大人の雰囲気をただよわせている女性だった。

「惜しいわね。子供っぽさが残ってる」

「まだまだ幼いんです、わたし」

「髪の毛のせいもあるわよね。あなた、思い切って髪を切ってみたら」  
その案には真砂子も賛成だ。だがこんな素敵な髪が切られちゃう、というのももったいない。

「イヤです」

「手間かけたくないのはわかるけど、いいと思うわ。いつまでも、可愛い女の子じゃいけないわ」

「絶対にイヤです」

彼女はきっぱりと拒絶し、ぷいっとそっぽを向く。けれど沢木さんはそんなことなどまったく気にかけず、あくまで優しい音色で、

「イヤ？」

まるで誘惑するように、後ろからそつと肩を抱きしめ、髪を束ねて上げてみせた。それはドキッ、とするような表現だった。あの女性<sup>と</sup>の髪の触感を、真砂子の肌はリアルに想像した。

「ねえ。色香がでるでしょう？」

かたくなさは半ば和らいだ。けれどとても同意しそうにはない。

沢木さんもそれ以上、無理には勧めなかった。

結局あれこれと試したお上品な服はただの試着に過ぎず、購入したのはとてもカジュアルな一着で、そのまま着ていくらしい。自ら貧乏人だなどと言っていたのだから、当然といえば当然なのだけど、真砂子はちよつとかがっかりだ。

沢木さんは感慨深気に呟いた。

「この子も、あなたみたいな人にもらわれてゆくのなら、しあわせでしょうね」

「イヤだ。そんなこと言われたら、選ばなかった子達に申し訳なくなっちゃう」

「年がら年中お洋服に囲まれていると、情が移るのよ。なんだかみんな、なかなか現れない恋人を、待ちわびているように思えてね」

それからとあるデパートに寄った。お目当ての化粧品フロアーに近づくと、彼女の瞳に諧謔<sup>かいぎやく</sup>的な輝きが増す。ひとりの売り子さんがめざとく気づき、それと同じようなニユアンスの視線を返してきた。ねえ、これ買ったの、と彼女は踊るような仕草で見せびらかす。

初夏の新作ね、と、この女性<sup>ひと</sup>性もそんな彼女の心性は心得ているようで、君はほんといいセンスしてるよね、と飾り気のない素直な感心を寄せてくれた。彼女は、うん、とひとつうなずくと、ほのかに照れた表情を見せ、ホント言うつと、選んでもらってるんだ、とタネを明かす。ああ、どおりで、と明るく微笑む水野さんに、真砂子は紹介されたのだが、

「あらっ！？ めずらしい」

と、ここでも感嘆されてしまった。

それからメイクアップの実習となった。鏡の前でレッスンを待つ彼女は、いつになく淑やかで、その胸のときめきがこちらにまで伝わってきそうだった。

「口紅は、手持ちのでいいか」

「淡い方？」

「まさか！」

彼女のポーチから、スティックを取り出すのだが、

「なによ！ ぜんぜん減ってないじゃない」

「うん、機会がないから」

「それくらい自分で作りなさい」

あははっ、と彼女は品なく大笑いする。水野さんは、そんな笑い方するんじゃないの、と、仔犬か何かをしつけるように、頭をぴしやりとひっぱたく。

「まったく売りつけがないんだから」

水野さんは無遠慮に彼女の顎をくいつと引き寄せ、ルージュをひく。彼女はさつと目元を引き締める。一途な眼差しは雕琢されて更に映える。この仕上がりには水野さんもいたく満足したようで、うん、さすが、としきりに唸っていた。

ほめられるのに弱いのか、彼女がはにかめば、張りつめた表情が崩れる。水野さんはそこを惜しんだ。

「ところで美禰子ちゃん、思い切ってカットする気ない？ そんなら深紅でびしっとキマルわよ」

「イヤです」

ここでも彼女はきっぱりと断る。そうかしら？、と水野さんはその長い髪を束ね、指の缺ではさばさと切り落としかかる。彼女は恐怖に、ぞぞつ、と顔をひきつらせた。



あれ以来、化粧ということが気にかかっていた。あの日の彼女の印象は強烈だった。鏡を見る度に、綺麗になりたいという思いがみるみるとふくらんでいく。シャイで引つ込み思案な正確にも関わらず、今回の行動は素早かった。

真砂子は水野さんを訪れた。嬉しいことに、自分のことを覚えていてくれた。接客中だったが、ちよつと待っててね、とにこやかに目で合図を送ってくれた。

自分の番が来た。周囲の視線が気にかかり、たどたどしく椅子に腰掛ける。

「ダメよ。そんな風にで自分を見ちゃ」

水野さんはそつと指先で顎<sup>あご</sup>を上げ、姿勢を正してくれた。優しいタッチだが、強い意志があった。

「ねえ、綺麗になりたいんでしょ？ だからここへ来たんでしょ？」

「・・・はい」

「だったらその思いを大切にしてください。いい？」

「はい」

「キミは、ひよつとしたら、コンプレックスが強いのかなあ？」

「・・・はい」

「それなら、一昔前の美禰子ちゃんと同じじゃない」

えっ！？ と真砂子が驚くと、そんなにも反応しちゃうわけ？

と水野さんはさもおかしそうに笑う。彼女のことなら何でも知りた。水野さんはそんな真砂子の関心を、？闘牛士？のように扇いで逸らして、華やぐ姿を楽しんでる。

真砂子もレッスンを楽しんだ。基礎の基礎から教わった。水野さんは何が自分に似合うのか、似合わないのか、具体的に説明してくれた。その仕上がりには、

真砂子には確かに自信を持った。

それから沢木さんの店へ寄った。気後れする感もあったけど、迷わず中へ入った。予想通り、沢木さんも自分のことを覚えてくれた。穏やかな笑顔で歓迎してくれて、嬉しかったけど、瞳には、手加減しないわよ、という意志表示もほのめかせてもいて、真砂子は思わず顔がひきつった。

どれでもお好きなのをどうぞ、と案内されたコーナーには、どう見ても、値の張るものが並んでいる。真砂子が戸惑うと、あなたはこれくらいやらないきゃダメよ、服は脇役、価値のあるのはあなた、と沢木さんは一着を選び、強く推す。それもレッスンだった。断れずに試着をすれば、

あながち満更でもない。

そうして数をこなしていけば、どんどん楽しくなってくる。その思いは沢木さんにも伝わって、とても満足そうだった。

結局、お手頃な価格を一着購入した。それは十分に満足のいく選択だった。これを渡してくれる時、沢木さんはいたずらっぽく目を輝かせて、

「これでデートが楽しみね」

「そんな。わたし、彼氏なんていません」

「あら！？ 素敵な？ 彼女？ がいるじゃない？」

V a r . ?

真砂子は脱皮のきっかけをつかんだ。何をするも楽しく、自然に笑みがこぼれ落ちる。人も街も、以前よりいい印象を受ける。神経過敏になっていたんだ、と思った。そして自分自身を、より好きでいられるようになった。

もう伸一に対しても、意識過剰にならなくていい、肩肘張らずに、友だちとして付きあっていける、と思えた。この人とまったく関係

を持たずにいることなど、不可能なのだし、少なからず、興味も持っている。それに・・・どんな形であるにしろ、思われているのは嬉しいことなのだから。

ただ不意を打つような、あの女性に似たまねだけは感心できない。  
「そうそう。美莊殿と映画行っただって？」

「・・・はい？」

「あいつの趣味につき合えるなんて、大したもんだね。真砂子さんも、ヨーロッパの古い映画なんかに興味があるわけ？」

「いえ、あの、私はただついていっただけです」

「俺も誘われてただけで、都合がつかなかった」

「・・・美禰子さんとは、よく一緒にされるんですか？」

「んん・・・そうでもないけどねえ」

なんで口ごもるんだろう？

「そうだ。なんかもうひとつ見たいのがある、って言ってたけど、真砂子さんも一緒に行く？ 土曜の夜なんだけど」

「ああ、でもそれは・・・伸一さんとだけ、一緒にいたいんじゃないですか？」

「それはない。あいつは最近、キミの話ばかりする。あの美莊殿に気に入られるなんて、真砂子さんも大した人だねえ」

真砂子は返答ができない。すると彼は、ここぞとばかりにたたみにかけてきて、じゃあ、決まり、ということと、と押し切ろうとする。その結果自体は嬉しいのだけど、こつも一方的なのは、受け入れられない。

その時、ふと真砂子に妙案がひらめいた。笑顔を作って、彼女の声色をしっかりと真似たて、言った。

「こういう時は、？お邪魔かしら？、って答えればいいんですか？」

「・・・はい、お邪魔です。とってもお邪魔ですから、ぜひ一緒にしてくださいませ」

ふたりを待たせるつもりはなく、予定より二十分も早く着いたのだが、彼らはすでにそこにいた。この午後を、ずっと一緒に行動してきたような雰囲気で、話をしている。彼女はジーンズでラフな格好をしていた。真砂子は？フル装備？してきた自分が恥ずかしくなかった。

伸一が先に気づき、話しかけてきた。けれど真砂子はその言葉が聞き取れない。つま先から頭の天辺まで見つめてくる彼女の眼差しに、あまりの緊張で、意識がとろけそうだったのだ。

彼女にはその動揺がわからないようだった。そして真砂子の手を取ると、誘惑するのが最上の楽しみであるかのような、艶やかな笑みを浮かべ、その甲にそつと接吻した。

それからEric Rohmerの”Pauline？”

la plage”（『浜辺のポリーヌ』）を見たのだが、見終わってからが大変だった。

### 【あらすじ】

十四歳になったポリーヌは、従姉妹のマリオンとともにバカンスで海辺の別荘を訪れる。ポリーヌが憧れを抱く美しい年上の女性は、浜辺で旧友のピエールと再会し、また、新しくアンリとも知り合う。その夜、彼女は自身の恋愛観 出逢った瞬間にお互いが、この人だ、と直感し、激しく燃え上がる を語り、それを実践するかのようになり、アンリに身をゆだねる。だがポリーヌはやがて、彼がマリオンのことなど何とも思っていないのを、苦い教訓とともに知ってしまう。

「女をひどい目に合わせ過ぎる！」

伸一はかんかんだった。よほど腹にすえかえたのか、映画館を出てからというものの、半ば独り言のように非難し続けている。それは真砂子も同意見で、はつきり言って、ひどい映画だと思った。一方の彼女は、まるで一人きりでいるように、周囲にはまったくの無関心でいる。そしてとあるバーの円卓テーブルに落ち着いたのだが、彼の怒りは収まらず、むっとしたまま、彼女は物思いにふけたまま、誰も目も合わさず、一言もしゃべらない。

カクテルが届けられると、彼女は表情が緩ませ、にこやかにマルガリータの香りを味わう。そしてグラスを傾け、そっと口つけた。お酒好きなのだろう。目を閉じて、酔い心地を楽しむ様子は、いかにも幸せそうだった。

その左手首には、今日もクリスタルのブレスレットが輝いている。透明なピンクと鮮やかな桃色、そして透明な水色と鮮やかな水色の球が連なっていて、髪をかきあげる時や、カップを持つ時に、面ゆかしい色彩を添えている。真砂子はその輝きに惹かれ、ずっと気になっていた。

彼女は早々と飲み干すと、目は合わさぬが、意識を伸一の方へと向けている。彼は壁の一点をにらんだまま、周りのことなど、まったくも気にもかけていない。そして突然、

彼女は、カタン、とグラスをテーブルに置き、言った。

「でもマリオンもよくないと思う」

伸一は一瞬険しい視線を返した。彼女は相変わらず目を合わさずにいる。彼は一呼吸置くと、冷静な声で探りを入れた。

「なぜ？」

「変な男に熱をあげるところ」

「ごあいさつだなあ」

伸一は笑みをこぼし、一気にマティーニを飲み干した。そしてグラスを、カタン、と置き、言った。

「美荘殿は同性に対して、ほとほとご同情を持たれぬお方ですから」  
「あらっ！？」 その件に関しては、笹岡様もご同罪じゃございませ

んか？」

ふたりは顔を見合わして笑う。それで和やかになつてくれればよかったのだけど、彼女は再び鋭い一瞥<sup>いちへつ</sup>を投げかけると、ぷいっと横を向いた。それはほとんど？宣戦布告？の態度だった。

「おまえが彼女を好きになれない理由つてなんだい？」

「Elle est très pr?tentieuse.（彼女はとてもうぬづれが強い）」

「Et d'autre?（他には?）」

「Elle ne peut pas se refr?ter.（彼女は内省することができない）自分の欠点や弱点、いたらなさを見る事ができず。あやまちを何度も繰り返す。それは物語の最後でも変わらない。」

彼女は夢を見てるのよ。出会った瞬間にふたりが同時に燃え上がり、永遠を感じられる。いつかそんな理想の恋人に出会える、と信じていたいの」

「そんな夢を持ってどこが悪い？ とがめられる性質のものじゃないだろう」

「もちろんよ。星に見とれて井戸に落ちてしまうのは、彼女の自由だわ」

「お言葉だな」

伸一はすっかり、手にあまる、といった表情を見せた。けれども火種に油を注ぐ気はなく、なんとか着地点<sup>グランディング・ポイント</sup>を探っているようだった。

「じゃあ、アンのことはどう思った？」

「Rein（何とも）」

「Quoi? Rein!?（何とも思っていない、ですか）」  
「Exactement, rein.（正にその通り）」

フランス語のよくわからない真砂子も、その単語は聞き取れた。彼女は尚もフランス語で話し始めたが、真砂子と眼が合うと、さっと言語を切り替えた。

「彼は罨を仕掛けなかった。彼女が勝手に転んで落ちた」

そのとつさの変化は、彼に内省の機先を与えた。今にも爆発しそうな腹立たしさを、横に逸らし、緊迫感がにわかに薄れた。一息ついた彼は、ふたり分のカクテルを注文し、そうして充分に間を置いて、言った。

「じゃあ、ピエールのことは、どう思った？」

「あのウィンドサーフィンの教え方見ればわかるでしょう？」

「ははっ。あれじゃダメだ。振り向かれるわけがない」

穏やかな微笑みが交わされ、やっと和やかな雰囲気になった。彼女は続ける。

「第一印象が、悪かったと思う。マリオンに、『従姉妹いとこと一緒に来たの』、とポーリーヌを紹介されたのに、”Tu est seule？”（『ひとりかい？』）、だって。人の話聞いてないの」「そこへアンリが現れると、露骨に嫌な顔を見せる」

「そう。あの人は、ある種の男らしさに欠けると思う。とういか、子どもっぽい、と言うか」

カクテルが届く。彼女は直ぐに味わう。そうして柄を放さぬまま、右手で頬杖、瞳を閉じ、ひとり酔い心地にひたる。伸一も、今度はじっくりと味わった。そうしてふたりとも、存分に二杯目を楽しむと、当然の如く、伸一がまたも追加を頼んだ。

その時、彼女は急にこちらを向き、

「Eh bien, c'est vrai que ? Paullinne ? n'a rien dis.”（ところで、？ポーリーヌ？がまだ何も話していないわねえ）」

「Oui. C'est vrai. Nous sommes ceux《qui trop parole...et se mesfait》（うん。ほんとうだ。私達はどうやら例の、『言葉多きはおのれを傷つける者』らしいですね）」

「Oui, c'est vrai.（まったくその通り）真砂子ちゃんは、マリオンのことどう思った？ 嫌な女でしょ？」

「アンリのことはどう思った？ すっげー嫌なヤツでしょ？」

ふたりの関心が一挙にこちらへ向かう。でも、

答えられるわけがない。

一応の和解を見たというものの、あまりに張りつめた空気だったから、真砂子は背中にはびつしりと冷や汗をかいていた。それに、ふたりのフランス語は、まったく理解不能だ。会話のレヴェルも高過ぎで、とても仲間には加われない。目の前のグラスにも、まだルージュの後をとどめていない。

「わかりません」

できるかぎりの穏やかな声でこたえた。真砂子はグラスを手に取り、カクテルを飲んだ。そうして一気に飲み干し、カタン、と置いて、穏やかに不快感を表明する予定だったのだが、以外にも、

「おいしいですね、これ」

マルガリータが美味しいなんて、素質があるわ、と美禰子が言えば、そういう素質はなくてもいい、と伸一が切り返す。ふたりの会話を聞き流す素振りで、真砂子もグラスを空けた。酔ってないと、とてもこの場には止まっていられない。そして伸一の気遣いを待つまでもなく、追加を注文した。

じゃあピエールのことをどう思った？ と美禰子が聞く。はつきり言つて、真砂子は話したくない。けれど、じゃあ第一印象は？ と重ねて問われれば、答えないわけにもいかなくなる。

「きれいな顔立ちしてるなあ、って」

すると彼女は見事にこけた。ぱんつとテーブルの端を叩き、吹き出した。

「Tu comprends ? C'est une ? tudiante d'aujourd'hui. Les gens sont impressionnés ? tellément personnel appearance. (これが当世風の学生よ！ すぐ外見に惑わされちゃうんだから)」

「Malheureusement. (残念ながら)」

「Pourtant, elle est belle ces



oir . Pour qu'elle apprend ? faire la belle ? (でも今夜の彼女は美しいわね。いったい誰のために美しくなることを学んだのかしら)「

Pour personne . Simple ment , la saison vient , la fleur s' ? pan out . (誰のためでもありませんよ。ただ季節が来れば花は咲くのです)「

« Quelle belle saison . Mais . . . Tros belle pour toi . (なんて美しい季節でしょう。でも、あなたには美しすぎるわね)「

« Pour vous aussi (あなた様にもね)「

第一印象は、と聞かれたから素直に答えたまでだ。真砂子は自分の感情をコントロールするのが、難しくなってきた。気をつかうのが、次第にばかばかしくなってきた。

「ピエールがマリオンを好きなのは、最初っからわかっていました。だからアンリに見せた嫉妬も、わかるような気がしたんです。自分の好きな人に、ずっと振り向いてもらえないばかりか、その人がひどい目に合わされるのを、手をこまねいたまま、何もすることができずにいるのですから。とても辛いんだなあ、て思いました。」

ピエールの性格の、？幼さ？というのは気づきませんでした。私自身がまだ子供だからかもしれません。おふたりが彼にかなり批判的なのは、正直おどろいています。

でもわたしは、セリフとかシーンとか、あまり覚えていません。正直言つて、この映画はよくわからないんです。だから感想を求められても、困ります」

言いたい気持ちの半分も言えてない。腹立たしのだけけれど、本音を言えば、ほんのちよつとでいいから、自分の惨めな気分も察して欲しい、と思った。

ところがこれは、思いの外、ふたりには効果のあるセリフだったらしい。

「Elle est sympathique. (彼女は優しい、とっても共感的だわ)」

「これは、これは。人の気持ちを考えないで批判に熱中するなんて反省ものですね」

「Tout ? fait, d'accord. (まったくもって同感ね)」

マルガリータが利いてきた。けれどまだ酔い足らず、真砂子はまた一口飲む。飲み干したかったのだが、それは流石にできそうにない。映画の話題は早く終わらせたかった。けれどふたりは、尚も小競り合いを続けている。ついでお酒のピッチも競っているようだ。真砂子は質問されるのも、同意を求められるのも、ほんとイヤになってきた。

三杯目を飲み干し、真砂子ははつきりと意志表示した。

「もうよろしいじゃないですか。映画のお話は」

伸一はふと我に返った。どう考えてみても、ふたりとも、過度にエキサイトしている。ふっと一息を吐き、はつきりと、眼で同意を示してくれた。真砂子もほっと一息ついた。だが、

「真砂子ちゃん。ところで、マリオンのことは、どう思ったあ？」

目を合わせれば、彼女は悪意のない、けれど大いに含みのある笑みを浮かべている。伸一は首をほんの少し左右に振り、相手にするな、と合図を送ってきた。けれど真砂子はまたカクテルを注文する。打ってみたい？ シュート？ があったのだ。

「『人の話を聞いていない』、と、ピエールを非難されたのは、美瀬子さんじゃないですか？」

「そのピエールに、模範的なくらいの共感的な態度を示されたのは、真砂子ちゃんじゃないかしら？」

この女性は、ほんと一筋縄じゃいかない。

なんでこんなにもからんでくるのだろう？ けれど真砂子自身もかなり酔いが回っていた。そんなにお望みなら、お相手してあげましょうか、とも思えてくるのだった。

でもどうやって？

考えている間に、カクテルが届く。とりあえず一口飲む。伸一はテーブルの下で足を軽く突つつき、構うな、というサインを送ってきた。真砂子はどうしても、ありがたい、と思ったのだけど、既に退くに退けなくなっている自分を感じていた。そうして、飲み干したグラスを両手でささげ持ち、言った。

「マリオンは・・・どうしてこんなにもピエールにつれないのかなあ、って思いました」

「！　¥？　？！　£？　！！・・・」

美禰子は完全にこけた。テーブルに倒れ込み、脱力しきったまま動けない。伸一は腹を抱えて笑い転げ、勝利を祝して、カクテルを注文してくれた。

とんちんかん  
頓珍漢な質問には、頓珍漢な解答にかぎる。

たつぷり一ヶ月分の思考力を使い尽くしてたように、ふらふらとなったが、真砂子は、我ながらよくできた、と思った。

彼女はダウンしたまま、共感<sup>シンパシイ</sup>、共感<sup>シンパシイ</sup>がどうの、と口ごもっている。真砂子はもちろん一種の冗句を言ったのだが、この女性<sup>ひと</sup>は、どうもともに取ってしまったらしい。もう十二分に酔っているのだろう。伸一は、これ飲んだらおひらきにしよう、と耳打ちしてきた。真砂子はさっさと片をつけたから、無理に最後の一杯を流し込んだ。

彼女が起き上がる。うつむきかげんのまま、誰とも目を合わさず、グラスを取り、言った。

「真砂子ちゃんは、とっても愛情深いのね」

優しい声色だが、ヤバイと思った。彼女は目を閉じて、カクテルを味わいながら、vous ? tez ? tez tr ? s gentille . (あなたはどうしても思いやりがある)と繰り返す。真砂子は、その肝心の単語がどうしても聞き取れない。そしてtros gentille (あり過ぎる)、と表現を変えると、グラスを置き、鋭い口調で、

「真砂子ちゃん。共感することがどうしても不可能な人と相対したときは、どうしたらよろしいのかしら？」

顔はにこやかではあったけど、眼が笑っていない。もう誤魔化しも逃避も通用しない真剣勝負を挑んできた。

「Arrr?tez-vous, mademoiselle, s'il vous pl?t. (どうかお止めくださいますか)」

伸一はすかさず助け船を出してくれた。穏やかな声だった。だが彼女は何も答えず、視線をいささかもずらさない。

「Arrr?tez-vous, s'il vous pl?t.」  
伸一は繰り返した。芯のある声だった。だが彼女はやはり応じない。けれど、

「Arrr?tez-vous, s'il vous pl?t.」  
最終通告に込められた闇色の音色<sup>トーン</sup>。それは瞬時に彼女の心胆寒からしめ、振り向かせるのに十分な？尊厳？のある響きだった。

「Si vous voulez savoir ce que nous faisons? quelqu'un pour qui nous ne pouvons pas avoir de la sympathie, demandez? notrehistoire. (共感できない相手をどうするの知りたいのなら、私達の歴史にお尋ね下さい)」

それは刀で斬りかかるのではなく、そつと針を刺すようなさやさだだった。けれどそれは正に急所を刺した。まるで心臓が凍りついてしまったかのように、彼女はまったく動けない。瞬きもできなければ、息もできない程だ。

なんとかしなきゃ、と真砂子は思った。この無慈悲な沈黙を、一秒たりとも長引かせてはいけない。でもなんと?・・・

その時、グラスの中のオブジェが言葉をくれた。

「伸一さん。あの・・・そのオリーブ、もらってもよろしいですか?」

?憑きもの?がふつと落ちたように、怒りが抜け落ちた彼がきよ

とんとした顔で振り向く。場にもはや緊迫感はない。

もうちょっと、気の利いた科白セリフを言いたかったけど、間抜けなフリースでもないよりはましだ。

伸一がグラスを見やる。マティーニには、当然オリーブがついている。

「はい。どうぞ」

彼は円卓テーブルの中央へ、グラスを置いた。

「Les femmes aiment l'olive de martinini. (女の子はマティーニのオリーブが好き) おまえもいるかい? 好きだろ」

彼女は肩でひとつ息をつく。うつむいたままの視線には、もはやなにも写っていないだろう。真砂子は救いの手を差し伸べてくれたオブジェに目をやった。けれどグラスの中に、

オリーブはひとつきりだった。

Var.?

真砂子の人生の中で、最悪のひとつ、と言っていいこの夜も、ようやく終わろうとしていた。彼女を先に送り、伸一と二人で歩いていた。道すがら、彼はまったく話しかけてこない。このままでは、とてもエンディングを迎えられない真砂子は、目の端でその様子をずっとうかがっていたのだが、思い切って、尋ねてみた。

「伸一さん。あの、何を考えていらっしゃるんです?」

「映画のこと」

真砂子は本題に入るタイミングを探った。

「わたし、美禰子さんがあんなにもマリオンのことを悪く言うのは、意外でした」

「そうでしょ？ アンリのこと、ひどいと思ったでしょ？」

「ひど過ぎると思います」

「そうでしょ。でもねえ、真砂子さん。あいつはオレらなんかより、ずっつと深く理解してんだ。だからあんな変な意見になるんだ。だからせ精一杯、冷静になつて思い返してはみるんだけど、さっぱりわからない」

この人は、あの方のことを、こんなにも高く買っているのか・・・

「わたしもわかりません」

「『もうよろしいじゃないですか。映画のお話は』」

彼が上手に自身の声色を真似る。真砂子は思わず、ははっ、と笑った。これならいける、と思った。

「伸一さん。美禰子さんのこと、怒ってます？」

「怒こつてない」

拍子抜けた。真砂子にとっては一大事だったのだが、彼は事も無げに言う。

「怒ってませんか？」

「この程度で、怒れるわけがない。オレたちが本気でやり合ったら、ほんと凄まじいことになる。もっとも真砂子さんには、少々刺激が強過ぎたかもしれないけれど」

「強過ぎました。おふたりが争うことって、よくあるんですか？」

「『もうよろしいじゃないですか。喧嘩のお話は』」

二人して、ははは、と笑いながら、真砂子は、上手だな、と思った。それならば、もう一步踏み込んで頂きたい、気分になる。

「美禰子さん、とても傷ついていたと思います」

「そうねえ」

彼は何の情感も込めずに言った。真砂子は語調を強め、はつきりと感情を露わにして言った。

「かなり傷ついていたと思います」

「『オレは罌を仕掛けなかった。あいつが勝手に転んで落ちた』」

それに俺は、何度も衝突を避けようとしたでしょ」

残念ながら、その経緯<sup>いきさつ</sup>は覚えてる。でも、

「そういう論法はよくないと思います」

「そう。それこそ俺があの時腹を立てた点だ」

「・・・そういう論法も、よくないと思います」

「うん。俺もそう思うよ」

かなわない。ふたりとも、ほんと一筋縄ではいかない。

ただこのまま引き下がるわけにはいかない。

「人を裁くのはよくないですけど、今夜の美禰子さんは、かなりおかしかったです。正直、わたしも腹立たしく思いました。伸一さんが、一番立派な態度を取られたと思います。ですから、わたしがこんなこと言うのはおこがましいのですが、不可抗力とはいえ、今夜一番傷ついてしまったのはあの女性<sup>ひと</sup>だと思っんです。

ですから、少しでいいですから、その痛みを感じてあげて欲しいのです。お友だちじゃないですか」

「お友だち！？ いえ、あの方は単なる知り合いです」

真砂子は問題の核心を、はたと悟った。ふたりの間に何があったのかは知らない。けれどそれでは困るのだ。真砂子は腹を決めた。だがその思いを言葉にするのには、数分の時間が必要だった。翻訳作業に追われていたのだ。

彼の前に立ちふさがり、その歩みを止めて言った。

「Devenons amies. Nous trois. Je  
veux devenir ton amie! Et, je  
comprends que c'est difficile  
'?tre sympathique? elle de tem  
ps en temps. Mais... essayez d'  
'?tre plus sympathique? elle, u  
n peu. Oui, un peu plus. Bien  
s?r que, j'essaie d'?tre plus  
sympathique? vous deux. Je pro

me ts . (私達三人、友だちになりましょう。あなたの友だちでいたいんです。ときどきあの女性に共感的であるのが難しいこともあるでしょう。けれど、もう少し共感的であるように試みていたきたいのです。ちよつとだけでいいのです。わたしもあなた方にもつと共感的であるように努めます。約束します)「

このセリフは、ふたつの意味で彼を驚かせた。

「真砂子さん。フランス語、できるんだ」

「いえ、ちよつとかじつただけです」

「ひよつとして、さっきの会話、全部聞き取れてた?」

「とんでもない。まったくわかりませんでした。ふたりとも、すごい早口だったじゃないですか。ただ伸一さんが、美禰子さんに氣を使って、わたしのわからない言葉でキツイこと言つたのはわかりました」

「はははっ。それだけわかつていただけたら、けっこうです」

「美禰子さんは、わたしがわからないと思つて、それでいて、使つてたんですよ」

「そつ。あいつはそういうところある。Pouvez-vous ? tre sympathique ? elle , quand me . (それでも共感的でいられるの?)」

「Je . . . J'essaye . (努力します)」

「あいつに興味を持つのはいい、好きになるのもいい。でも、あいつと付きあつてくのは、ほんと大変だよ」

「でしようね」

「止めとく?」

「Je deviens son amie ! Si . . . elle me permet d'être son ami . (わたしはあの女性<sup>かた</sup>の友だちになります! もし、許して下さるのでしたら)」

「Je suis ? r quelle veut auss i devenir ton ami . (あいつだつてそう望んで



るよ)「

「Et toi ? (で、あなたは?)」

彼は黙り込んだ。決心がつかぬらしい。それほどまでに深い、何かがあるのだろうか?

S'il t u p l a i s ! (お願いします)と真砂子が言う。彼は答えない。S'il t u p l a i s ! と重ねて言う。でもまだ彼は、わだかまりを捨てきれない。

「J'ai beso i n d e t o n a m i t i ? . J e t e p r i e d ' ? t r e n ? t r e a m i . (わたしはあなたの友情が必要です。どうかお友だちでいてください)」

「Tu g a g n e s . (キミの勝ち)」

「D e t o u t d e m o n c ? u r , J e t ' o f f r e s l e m e i l l e u r a m i t i ? . (こころの底から、私の最良の友情を捧げます)」

「M e r c i . E t m o i a u s s i , d e t o u t d e m o n c ? u r . (わたくしも、こころの底から、そう望みます)」

伸一が手を差し出す。それは握手ではない。真砂子も躊躇わず、その手に自身の右手を預けた。

何をしているのかしら、わたしは?

そう思う間もなく、手の甲に感じた l e s i g n e d ' a m i t i ? . (友情の証) 思わず笑みがこぼれ落ちた。

その唇は街灯に照らされ、光を弾く。ついには身につけえない、その煌めきの与える印象を慮るさか賢しさに染まらぬまま、

微笑は揺れた。

V a r . ? ?

「この間はごめんなさいね」

この女性に謝られることなどないのだけれど、彼女はいかにもすまなさそう。よそしてつぽどこたえているのか、目を合わせることもはばかられるらしく、視線があちらこちらを泳いでいる。いいんです、気にしてませんから、と何度も言うのだけれど、とらわれ事があると、耳に入ったセリフの意味さえ判別できなくなってしまうのか、謝辞やら言い訳やらをくどくど繰り返す。そんな彼女の姿が真砂子には新鮮で、おかしくもあり、可愛らしくもあつた。

「美禰子さん。Je veux devenir ton amie  
e！（あなたのお友達になりたいんです）」

彼女の視線が定まる。

「Je veux devenir ton amie！」

真砂子の思いが彼女に届く。そのところに伝わり、染み込んでゆく。

「Moi aussi.（わたしも）」

「Soyons amies, toujours！（ずっと友達  
でいましょうね）」

彼女のところが満たされる。幸せな思いが笑みとなって面に表れる。

「S'il te plait！（Please!）」

「Oui. S'il te plait.」

真砂子が右手を差し出す。あの夜は、からかい混じりの冗句に過ぎなかったけど、今、ここからの誠実な思いを込めて、彼女はその甲に接吻けた。

## 第二部（後半）

### 四

真砂子は相変わらず、彼女よりは伸一と顔を合わせる機会が多い。そしてとても申し訳なく思っているのだけれど、どうしても、真砂子は彼女の話題を口にしてしまう。

あの女性ひとのことをたずねれば、彼は大抵答えてくれる。けれども何か核心的なことを話さないでいる、ような印象を受ける。

例えば、よく一緒に飲みに行かれるんですか、と聞けば、そうでもない、今でも十分カフェイン中毒だつていうのに、わざわざアルコール中毒にまでしてあげることはないでしょ、と切り返す。それにしては慣れたエスコートだったと思います、と、真砂子は狙いを澄ましてみるのだが、彼は柳に風と受け流すだけ。何の返答もしてくれない。

また、どうしてフランス語がお上手なんですか？ とたずねると、伸一はお茶をにごすような返事をした。不審に思い、重ねて問うと、彼が白状する。ふたりの間に衝突があると、あの女性ひとは去り際に、彼のわからぬフランス語で皮肉なセリフを言うそうだ。それが腹立たしくて、彼は勉強したらしい。

確かにあの女性ひとは、人の気持ちを逆なでするところがある。けれどそれだけで、ああも上達するものか、真砂子は疑問で仕方ない。

ただ今の真砂子は、彼との会話を楽しんでいる。また彼のことを相当見直している。それ程に、あの夜のふたりの機知ウィットに富んだ科白セリフの応酬は、見事だった。真砂子はそれが羨ましくてたまらない。

このふたりの友だちでいられるのは嬉しい。けれどまだまだ距離がある。真砂子はぼんやりとした不安を感じている。だが彼らの関

係というのは、次へから次へと展開していく運命にあった。ある時、キャンパスで美禰子と顔を合わすと、今日、帰りに寄っていただけませんか？ と頼まずにいらなかった。相談したいことがあったのだ。

伸一に家へ招かれ、困っていた。

「Ah... Il pousse son pion.（ああ、彼はひとつ歩を進めた、というわけね）」

Pardon?（なんておっしゃいました?）、と聞き返しても、教えてはくれない。その笑みは、どう鼻<sup>ひいきめ</sup>屑目に見ても、自分がフランス語を解<sup>げ</sup>せないのを楽しんでいるようなのだ。そして、誘われたんだから行けば、と、いともあっさり答えてくれた。

「彼のお母さんって、人を呼ぶのが好きなの。私もよく招かれる。とってもいい人。一度会ってごらんさないな」

母親も会いたがっている、と言われた時にはさすがにぎくつとした。けれどそんなに気に留めることではないらしい。

鏡の前に座り、無邪気に髪を梳<sup>と</sup>かすこの女性<sup>ひて</sup>は、自分を磨くのに余念がなく、私の悩みなど、てんで関心事の外のことらしい。

「わたし、ほんとに困ってるんです。でも美禰子さんは、ご自身の髪の方が、よっぽど大事なんですね」

「真砂子ちゃん、わたしの髪なんかより、ご自身のことの方が、よっぽど大事みたいねえ」

これだ。

珈琲が入ると、彼女はいつもの仕草で、しあわせそうに味わった。「そうそう。彼の家っておもしろい造りで、素敵な庭があるの。あれは一見の価値があるわ」

「美禰子さんも、ご一緒しませんか?」

「わたし? わたしはいいわ。というか、その日は都合が悪いの」「いつならご一緒できますか?」

「ん、真砂子ちゃんが伸一君<sup>ち</sup>家に行く日は、都合が悪いの」

なんなんだそれは。

無邪気なのはわかるけど、この女性<sup>ひと</sup>は、子猫のように無分別にじやれついできて、その爪をこらえるのが、少々難しく感じることもある。

真砂子が浮かない顔をしていると、彼女は声の音色<sup>トーン</sup>を変えた。

「たまには誘われてあげなさいな。それが自然の流れだと思っわ」  
「自然の流れ、ですか？」

「誰に強請されたわけでもないのに、伸一君はあなたに惹<sup>ひ</sup>かれたんだから、それはとても自然なことだと思うの。あなたにしてみれば、よく知りもしない人から、いきなり好きだ、と言われ、気持ち悪かったかもしれないけれど、せつかく招かれたんだから、行ってみるのもいいんじゃないかしら」

「わたしは、本音を言わせていただければ、三人で、楽しいひとときを過ごしたいんです」

「伸一君のおばさんがいるから、三人きりではないわ。それはまた別の機会で、ということにいたしましょうよ。あなたはとっても気を使う人ようだし、わたしはあの家には常連だし、こんな性格だから、慣れないあなたはきつと居心地の悪い思いをするわ。だから私は気が進まないの」

そうかもしれない。

「T u e s s o n a m i e , n ' e s t - c e p a s ?  
(お友だちでしょ?)」

「・・・O u i . (はい)」

「いつてらっしゃいな。楽しんでくればいいじゃない」

住所を頼りに訪ねて行くと、瓦と土を交互に重ねた古い壁が見えた。ところどころ損傷している。開かれている質素な門があり、中<sup>の</sup>を覗けば奥ゆかしい旧い家。玄関まで、短い石畳がある。

呼び鈴を押す。伸一の母親は温かい笑顔で迎えてくれた。その何の先入観もない眼差しは、コートを脱がせるように、真砂子の構え

た心の緊張を取り払ってくれた。

廊下の角を曲がると縁側で、風情な庭が見える。障子開け放たれた畳の間にある大きな仏壇が目に残まり、真砂子は足を止めた。

そんなものに興味がありますの、という声に振り向けば、母は笑顔をほころばしている。リビングは隣なんですけど、よろしかったらこちらでお話ししませんか、お庭が見られることですし、と勧められ、腰を下ろした。母は珈琲を入れてくれた。

「ずいぶん立派なお仏壇ですね。格調が高いというか」

「これは随分と古いものなんですよ」

「きれいに磨かれてますね。見てるところが落ち着いてくる」

「まあ、嬉しいですねえ。そう言ってもらえると」

「真砂子さんは、そういう趣味があったわけ？」

「いえ。興味はないです。ただ、目を引かれたんで、」

よかつたらお線香をあげていただけますか、と母が言う。伸一は、そんなこと言うもんじゃないよ、と口を挟むが、真砂子は承知した。「とっても綺麗なお庭ですね。手入れが行き届いていて、とっても風流で」

「はいはい。そうなんですよ。花の咲く木が一本つつ植えられていて、寒椿、梅、桃、と順番に、一年を通して何かしらの花が咲いているんです」

「すごい」

「紅葉も綺麗だよ」

「でも、桜はないみたいです」

伸一と母はさもおかしげに笑った。

「真砂子さん。ウチは土族の家系で、笹岡家というのは代々藩の指南役を務めてきたんだ。ところが土族の商法とやらで、母屋は人の手に渡り、この離れだけが残った。そのお屋敷には、花見でにぎわうくらいの桜が植えられてたそう」

「さぞかし綺麗だったでしょうね」

「お見せしたかったね。もっとも、オレも見ることがないんだけど」

「真砂子さんは、桜がお好きなんですか」

「あの、ソメイヨシノはそうでもないんですけど。わたし、しだれ桜が好きなんです。あの慎ましやかな佇まいが、何とも言えず、好きなんです」

「風流だね」

「こんな素敵な庭のある家に住んでいる人にそんなこと言われたら、言われた方は皮肉だと思いますよ」

「ウチにはしだれもヨシノもないんで、隣の桜は良く見えるんだ」

「真砂子さんの住んでらっしゃったところには、しだれ桜が咲くんですか？」

「自転車で十五分くらいの所に、原っぱがあつて、しだれ桜が植えられているんです。花見の名所でないんですけど、わたしはこの桜が一番好きです。葉桜も好きです。なんか、そこに行くと、木々達がいつでも歓迎してくれているような気がするんです」

「自然がお好きなんですね」

「木よりもビルの数の方が多いところに住んでいましたから、ちょっとした自然が、とっても新鮮に感じられるんです」

真砂子はこの空間をとても気に入った。時間の流れが穏やかで、居心地がいい。なんか遠い昔の平和な時代に帰ったような気がする。会話も和やかだった。そして話題はあの女性の<sup>ひと</sup>ことに及んだ。

「あらっ。真砂子さんは美禰子ちゃんをご存じなの？」

「はい。知り合ったのはごく最近ですけど、親しくさせていただいてます」

「困ったことに、あいつの大ファンなんだよ」

「まあ！ そうなの。素敵な人ですものねえ。ならあの子も誘ってあげればよかったのに」

「いや。声かけたんだけど、都合がつかないみたいで。でも真砂子さんが誘ってたら、来たかもね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「この子はねえ。美禰子ちゃんと喧嘩ばかりしているんですよ」

「喧嘩は、両成敗なんじゃないでしょうか」

「きつと仲がよすぎるんでしょうね」

伸一はこけて苦笑する。そして、何とか言ってやってよ、というような視線を送ってくるから、言ってやった。

「伸一さんと美禰子さんは、ほんと仲がよろしいですからね」

「あの子がいると、家の中が明るくなつていいんです」

「わかります。ぱつと華やぐ感じで」

「そういえば、あの娘も最近<sup>こ</sup>は来てくれなくなったのねえ。前はしよつちゅう寄ってくれたのに」

「あいつもいろいろ忙しいみたいだよ。もう暢気に遊んでもいられないだろう」

「そう。あの娘も気苦労が絶えないねえ」

母は眉を落とした。その悲しみの表情は、真砂子を不安にさせた。その変化を、伸一がそつとうかがっている。語るか語るまいか、その判断する基準を探そうとしているようだった。

「あいつ、両親いないんだ」

「・・・わたしも、お父さんいない」

打ち明けるつもりはなかった。そんなこと、初対面の相手に告げることではない。無意識が、真砂子にそつと<sup>つぶや</sup>呟かせた。

母と眼が合った。まるで互いのところをひとつに溶け合わすような共感、その痛みに寄せる限らない慈しみ、そんな眼差しに触れた時、真砂子のこころの中で、二十年近く忘れ去られていた、あの日の？記憶？が甦った。

何故？ どうして？

最悪の体験だった。あれこそ正に最悪だった。

あの日、私は？血まみれのわたし？を棺の中に押し込め、七重の封印をして忘却の海へと沈めた。まともに向き合えば、私自身が破



滅していた。

けれど呪文は解かれた。もう隠すことも、誤魔化ごまかすこともできない。

真砂子はこの巡り合わせに、運命の意匠を感じた。

## 五

成人式なんだから戻ってらっしゃい、と念を押されていた。真砂子自身は、着物が人を着て歩いているような式には興味が無いのだけれど、こういう行事にきっちりしていないと、母の気が済まないのだ。

一年振りの帰郷だ。家に着くと弟が迎えてくれた。その挨拶がよかった。

「なかなか帰ってこないから、恋人でもできたのかと思ってたよ」だから奮発して焼き肉でもおごってあげようと思ったたら、

「姉貴、オレは常々、女と女の財布だけは泣かしたくない、と思ってるんだ」

と切り返された。

下町で育ったから、真砂子ももんじゃは好きだけど、食べずにいても、恋しくなることはない。それでも久しぶりに食べてみると、ほんと美味しい、と思う。不思議な食べ物だった。

弟もおいしそうに食べている、と思ったら、さっきから人の顔を見ては、なにやらほくそ笑んでいる。どうしたの？ と聞くと、

「いや。季節が一巡すると、いろんなことが起こるもんだなあ、と」  
「なにかいいことありましたか？」

「んん。君には話していなかったけど、実は俺には姉が一匹いるんだ。そいつは器量が悪い、ってことはないんだけど、いかんせん表

情がぶすだ。性格はいいが、社交的ではなく、いつも自分の殻<sup>から</sup>に閉じこもりがちだ。世の中にはそんなネクラな姉を持った弟ほど不幸なものはないんだけど、俺は殊勝<sup>じゆつ</sup>にも、この不運をじっと耐えたよ。えらいよねえ。人生苦あれば楽ありだって。そしたらどうだい。しばらくご無沙汰してやがる、と思っただら、やけに綺麗になつて帰ってきたじゃない」

「なに言つてんのよ。ばか！」

「弟なんて、笑顔の素敵なお姉さまを持ちたいものなんだよ。姉貴は弟思いだねえ。俺はほんとしあわせ者だよ」

「高志は口がとつても達者だ、というのはよくわかったわ」

「俺も、姉貴はとつてもお世辞に弱い、というのがよくわかったよ。俺みたいな優秀な人間にはわからない心理だね。それじゃあ変な男に引つかかつちやうよ」

「そういえば喜<sup>こ</sup>与<sup>い</sup>原<sup>げん</sup>にも、自分をやり込める名手がいたんだ、と真砂子は改めて思い出す。

「わたし、そんなに変わった？」

「一年前の鏡でも見てごらん」

「そんなもの、あつても見たくない。

「去年と違つて、今はずいぶん楽しそうだね」

「うん。楽しいもん」

「なんかあつたの？」

「うん。高志、わたしね、amisができた」

「はっ!? ? 網<sup>あみ</sup>? ?」

「あつ、ごめん。Amis, en fran?ais. 普通に言つたら、? お友だち? だけど、もうちよつと、仲のいい関係」

「ふゝゝん。女の人?」

「女の人と男の人」

「あら珍しい。どんな人?」

「んん、すつごく説明しづらい。とってもユニークな人達。会つて話してみれば、すぐわかるんだけど。あつ、女の人の方はね、美禰

子さんっていうんだけど、すっごい綺麗なひとよ」

「へえ、そりゃ、ぜひお目にかかりたいもんだねえ。で、ということとは、姉貴は卒業したら、むこうに住みつくのかい？」

「・・・そんなこと、まったく考えてもみなかった」

「相変わらず抜けてるなあ」

「うっ。彼らはね、二歳年上で、いろんな意味で、レヴェルが高いのよ。だから、私はついていくのに精一杯だったの。美禰子さんなんか、ヨーロッパの古い映画とか文学とか造詣があつて、これ観ろあれ読めつて、すっごいしごいてくれるんだからあ」

「そういうのは、？ 丁稚<sup>でうち</sup>？ っていうんじゃないか？」

「そのかわり、すごい感動する。この人と巡り会えて良かった、つて、わたし思ってる」

「それは一生ものの値打ちがある、つてことじゃない？」

「うん。そうね。ということは、長崎に、住みつくことになるのかしら」

「ヨーロッパの古い映画と言えば、この前TVでやってただけで、こんなセリフがあつた。『わたしと彼は木曜日の夜にチェスをするのが習慣になつている。それがもう二十五年も続いている』チェスはともかく、こういう関係つていいな、と思つたよ」

「私の先生が話してくれたんだけど、昔フランスに留学した時、ホームステイしてお世話になつた夫妻が、とある夫妻と週に一度、必ず夕食を共にするの。レストランに行ったり、互いの家に招いたり。その習慣がずっと続いてて。子どもも独立して、みんなの髪も銀髪になつたというのに、みんながみんなのいい友人でいるの。こういう関係つて、素晴らしいな、つて思つた」

「てことは、早く丁稚奉公を終えて、出島に移民申請して、もうひとりの男の人を連れ込んで、二組のウェディングを挙げたい、つていうのが、俺の間抜けなお姉さまの夢なんだ、ということか？」

なに言つてんのよ、馬鹿、つと真砂子は吹き出し、笑い転げた。それはいかにも楽しくてたまらない、といった風で、本当にしあわ

せそうだった。そんな姉の美しい姿を、こんなにも早く目撃しようとは、高志は夢にも思っていなかった。

翌日、夕食の後片づけを終え、二階へ上がろうとすると、真砂子は母に呼び止められた。部屋に入ると、母は桐箆笥を開け、着物をひろげている。

「これ着てごらんさい」

差し出されたのは、母の晴れ着だった。

「貸してくれるの？」

「あげるわよ」

「・・・何言ってるの。いいわよそんな、もったいない」

「これはあなたにあげよう、と思ってたから」

「でも、」

母は娘の方など目もくれず、両手に持った着物の柄を見つめながら、淡々と言う。その表情に、惜しむような跡などはなかった。

「こんな派手なの、もう着れないわよ」

子供の頃、母がこの着物を身につける度に、少女は羨望の眼差しで見上げていた。白を基調に黄や淡紅、薄紫、色とりどりの花模様が舞い、鳥が飛ぶ。その同じ着物に、今袖を通す。

馬子にも衣装だね。からかう口調ではなく、弟が言う。だが真砂子の耳には届かない。

「そんな直すところはないと思うけど」

母は神経質そうに、袖や丈や裾を一つ一つチェックし、そうして薄い眼鏡をかけ、難しそうに針に糸を通した。

母の針仕事を見るのは久しぶりだ。

母の背丈を追い越したのは、いつのことだったろう。間近に並ぶと、年を取ったのがわかる。洗面台の上には、白髪染めが置かれているのは知っている。だが、そういう事実は、まだ隠しておいて欲しかった。

年が明けた。家族揃って初詣に行く。すっかり覚えておきたくて、着付けのおさらいに時間をかけた。けれどなかなか着物姿が板につかなくて、真砂子は鏡の前で右往左往する。そうしてあまり気にするもんだから、母に笑われた。

母は自分の着物を取り出そうとした時、引き出しの奥に、何かを見つけ、歓声をあげた。真砂子が振り向くと、子供のような晴れやかな笑顔で、よろこびを満面に輝かせている。母は誇らしげに、右手に高くそれを掲げた。<sup>かか</sup>

娘は部屋を飛び出した。慣れなてない着物が、身体にまとわりついた。長い間忘れていた、思い出したくはなかった記憶がまたひとつ、脳裏に鮮かに甦った。

むかしむかし。真砂子がまだ手を引かれていなければ迷子になってしまいそうな頃のこと。初詣の縁道には出店がずらつと並んでいて、少女はお参りよりも、そちら方が気になって仕方ありません。するとお父さんが、帰りに羽子板を買ってくれました。少女は小躍りして喜びました。

正月の晴れやかな気分も手伝ってか、お父さんはことのほか上機嫌で、しばらくは、そんな娘の喜びようを眺めておりましたが、妻の方を振り向くと、お茶目な調子で、

『お前にも買ってやろうか』

と申し出ました。

『いいわよ』

お母さんは、気のない返事で断りました。けれども一杯引っかけてきたようにご機嫌なお父さんは、飾り板の中でも一番大きな一群を指さして、

『どれでも好きなの選べ』

と催促します。

『なに言ってるのよ。いいわよそんな、』

そしてまるで少年のように、買え買えと囃し立てるのです。はに

かんだお母さんは、なかなか首を縦に振りません。けれどうつむく笑顔には、柔らかなよろこびにあふれておりました。そしてしつこくねだられた末、とうとうひとつ買ってもらいました。それは勧められたものよりも一回り小さいものでしたけど、少女のよりも大きくて、立派な飾りがついていて、

『お母さん、ずるい！』

私はただをこねた。

『わたしもほしい！ それほしい！』

その頃の私は、口答えも碌ろくにできないくらい、おとなしい子どもだったのに。父の羽織の裾すそをつかんで揺すって、

『ずるい！ ずるい！』

何度も何度も叫んだ。

照れたように先を歩く母の耳に、娘の声は届いていなかっただろう。笑顔を絶やさない父は、根気よくあやしてくれた。けれど、

私はまったく聞きわけがなかった。

そしてとうとう困り果て、父は言った。

『じゃあ、大きくなったらもらうちまえ。着物と一緒にもらうちまえ』

## 六

「いかがでしたあ？ 久しぶりの故郷は」

寒さが苦手なのか、彼女は炬燵こたつの中へすっぽりと両腕を包ませ、猫のように丸くなっている。そうして台の上に頬を寄せ、すっかり安心しきったように目を閉じる。そんな幸せそうな笑顔と再会でき、長崎ながさきに戻ってきたのだな、と真砂子は実感できる。

「成人式だからって、着物を着せられました」

「えっ、そうか。真砂子ちゃんも二十歳はたちか。へえ」

もうすっかり二十代に馴染んでいるこの女性ひとは、居住まいを正し、真っ直ぐに向き合った。

「見たいなあ。写真ある？」

記念の一葉を手渡すと、熱心に見入る。明るい声で、素敵だわ綺麗だわ、と何度も褒めそやしてくれた。

「自慢の娘だわね。お父さまもさぞかし喜んでらしたでしょう」

Nous sommes amies . Mais . . . (わたしたちはお友だち。そう、友人同士。けれど、)二人の間には、まだ距離がある。彼女は自身の l'histoire personnelle (個人史) に関する一切語らない。そして相手にも、一切質問をしなかった。

「でもどこか悲しそう」

楽しげに見入っていた彼女は、けれど友の変化を察し、顔を上げた。

「どうしたの？」

真砂子の頬には、ひと筋の涙が伝っている。人前で涙を流すことなど、絶えてなかったはずなのに。だがその曇りない眼差しの前で、涙を堪こらえる必要はなかった。瞼まぶたの裏にはつきりと焼きついている、母のあの笑顔。

真砂子はこの思いを語らずにはいられなかった。この女性ひとに、受けとめて欲しかった。言葉は自然にあふれ出た。自分の部屋を得るために生じた父母の争い。中学生になって激化した母娘の争い。イヤでイヤでたまらなかった料理の稽古。父の死と葬儀。母に対する

愛と憎しみが入り交じった感情。抱きとめられたかったのに抱きとめられなかった、思い。そのすべてを、この女性<sup>ひと</sup>は受けとめてくれた。共感的な思いで包んでくれた。

そして真砂子がようやくに落ち着きを取り戻すと、

「真砂子ちゃん、ありがとう。打ち明けてくれて。わたし、うれしかった」

自分より遙かに辛い過去を忍ばざるおえなかった彼女が、いや、だからこそ、こんなにも慈しめるのか。真砂子はこの女性<sup>ひと</sup>が忍ばなければならなかった痛みに思い至り、泣き止んだ。

「ねえ、真砂子ちゃん。これちょうだい」

彼女は記念の一葉を指にかざす。真砂子が頷くと、大切に本の間に挟み、呟いた。

「女は愛に生きるべきよ。そう思わない？」

「わたしは、？愛？ってよくわかりません」

「愛はわかるわからないの範疇でとらえられるものじゃないわ。愛する。ただそれだけのことよ」

「わたしは、？愛？って言葉が好きじゃないんです。あまりに人に誤用されているじゃないですか。例えば、誰か・・・」

「この際人の話は止めましょう。そうねえ、こう言ったらいいのかしら。」

わたしは今、確かに愛を感じている。あなたの喜びがわたしの喜びであるように感じられる。そしてあなたが悲しんだり苦しんだりしている時は、また笑顔を取り戻せるよう、祈っている」

「美禰子さんは、どうしてそんなにも、わたしのことを思ってくださるんですか？」

「Mon amie, toi aussi. Tu me donnes le meilleur de toi. L'amour inconditionnel. (友よ、あなただって、わたしに最良のことをしてくれてるじゃない？ 無条件の愛を、与えてくれるじゃない。)」



真砂子は返す言葉を見つけれない。彼女は続けた。

「わたしは今あなたに愛情を抱いている。あなたはそれが感じられるかしら？」

「・・・はい」

「あなたは今私に愛情を抱いている、とわたしは感じている。それは確かかしら？」

「はい」

「L'amour est tellement simple .

（愛はとってもシンプルだわ）」

私はこの女性<sup>ひと</sup>を愛してる、そして、この女性<sup>ひと</sup>は私を愛してくれている。真砂子は、自分の存在のすべてが受け入れられている、と感じられた。その感覚を、十分に味わった。

「母との間にも、感情的な争いばかりじゃなくて、しっかりと愛情を感じられる、そんな体験があっただなって、思っんです。なんであるにも辛くあたってくるんだろう、って」

「あなたのお母様も、自分の母親に、そういう辛い目に遭<sup>あ</sup>わされてきたんでしょうね」

「・・・そんなこと、考えてもみませんでした」

それは決定的なセリフだった。

「真砂子ちゃん。人は完璧じゃない。生きていれば、悲しいことや辛いことに出逢う。愛するのが難しい時もあるでしょう。ただ、あなたには、どんな時でも、愛することを選んで欲しい、と願っている。そしてあなたが、いつでも自分に寄せられている愛を感じられるよう、祈っている。ずっと、いつまでも。永遠に」

deau femmes （ふたりの女性）

l'une （ひとりの）

「へえ」。君は『L・Irr? gullir? re』を読んだんだ」

(注1)

と沢木さんは軽く驚く。真砂子は初めてこの女性の部屋ひとに招かれていた。

「美禰子ちゃんに薦められたの?」

「はい。でも、なんでわかるんですか?」

「あの子はここにある本はすべて読んでいるから」  
「すごい」

真砂子が感嘆するのも無理はない。沢木さんのリビングは、ほぼ壁一面が本で埋まっている。その棚を背にソファひとに座るこの女性も、一種独特の雰囲気をかもし出している。

「でもあなたもさすがだね。真っ直ぐ本棚に目がいつて、チェックするんだから。それはお友だちからの感化かしら」

真砂子は返す言葉に困ってしまう。

「シャネル、っていえば、沢木さん黒のデザインって、どこことなく感じが似ていますよね」

ん、そうかもね、とこの女性ひとはとぼけてみせる。懂れていらっしやるんですか?、と聞くと、大好きだし尊敬しているけど、懂れているわけじゃない。生き方にしろデザインにしろ、いいお手本、と思うけど、やっぱり個性が違う。わたしならこうしたいああしたい、っていうのがやっぱりあるの、と答えた。

「乗馬の衣装なんか、とってもクラシックで、わたしは気に入っているんですけど」

「あら、ありがとう」

その写真はお店のショーウィンドウに飾ってあった。モデルは沢木さんだ。

「シャネルも乗馬が好きでしたね」

「そう。感化されたの。あなたもやってみる?」

「いいですね。一緒にしたいです」

「山間のコースで、海が一望できるところがあるんだけど、とっても景色が<sup>いい</sup>の。長崎<sup>なづき</sup>が好きになるわ」

「素敵ですね」

「・・・美禰子ちゃんも、来ればいいんだけどね」

「美禰子さんは、乗馬が好きじゃないんですか？」

「とっても興味ある。自分も乗りたい、って顔してるんだけど、何かひつかかるものがあるみたいで、なかなか首を立てに振らないの」

「美禰子さんのこと、ずっと前からご存知なんですか？」

「中学生の頃から。初めて会った時のことは、よく覚えてる。雨の日<sup>ひ</sup>にね、ショーウィンドウをじっと見つめてたの。とっても悲しそうな顔で、捨てられた子猫みたいだった。私は一目で好きになった。なんか、愛しいなあ、って思えた。ただあの頃は、まったく口がきけなかったの・・・」

沢木さんは言葉を継がず、視線を落とした。沈黙は、<sup>ほか</sup>思いの外長かった。

「真砂子ちゃん、あの娘<sup>こ</sup>のこと大切にしてあげてね」

「はい」

すると、更に訴えるような眼で、

「ほんと、大切にしてあげてね」

(注1) シャルル＝ルーによるココ・シャネルの伝記。

e t l' a u t r e (もう一人の)

あゝ、すごいかわいいですねえ、と真砂子は感嘆した。エンジェ<sup>ル</sup>・フィッシュの赤ちゃんが産まれたから、見に来なさいよ、と水野さんに誘われ、郊外にある、彼女の伯父さんの家を訪れたのだが、

おっしやられた通り、成魚と同じ縞模様のベビー・フィッシュが、群を成して舞い踊っていたのだ。

水野さんの伯父さん農家で、ハーブなどを栽培している。都会っ子の真砂子には、少々刺激が強いくらい、豊かな自然に囲まれていた。飼っている犬や猫も、実にのんびりとしている。それはとても新鮮な喜びだった。

「それにしても、水槽がたくさんありますね」

「これでも随分減らしたのよ。この部屋に収まらなくなつて、さすがに伯母さんが怒つたらしいの」

八畳ほどの部屋に水槽が八つもあり、ほとんど水族館状態だ。真砂子は海老が泳ぐ姿を初めて見た。それがとっても面白くて、凝つてしまう人の気持ちが分かるような気がした。そのことを漏らすと、水野さんは、

「そつえば、美禰子ちゃんも同じようなこと言つてたなあ。『あつ、魚つて泳ぐんですね』」

真砂子はウケた。水野さんはさも楽しそつに笑っている。

「自然つていいでしょ？」

「はい。とくに最近は、そう思います。長閑な気分になれますよね。自然から切り離されていると、せかせかして、こころが貧しくなつてしまひそう」

「あなたは、美禰子ちゃんと、親しくしているんでしょ？」

「はい。お陰様で、ありがたいことに。でも、いつも一緒にいるわけじゃないんですけど」

「わたしときどき、あの娘こを連れ出すことがあるの。向日葵とか秋桜が一面に咲いているお花畑とかに。そうすると、あの娘こよく固まっちゃうの。ほんと、自然と接したことがないのね。というか、あの娘こいつでも緊張しているでしょ。リラックスできないというか」

「そつなんですか」

「そついうとこ、ちよつと心配してるんだ」

彼女と一緒に伸一を空港まで見送りに行った。卒業旅行だといって、ヨーロッパへ行くのだ。真砂子が、おひとりなんですね？と聞くと、伸一は、

「連れが貧乏暇なしでね」

と言った。

「あらっ！？ 誘ってくれるのなら行ってたわよ」

「安心しろ。誘う気なんてないから」

彼は学内ではちょっとした顔だ。名前を出すと、大抵の人は知っている。そしてどこことなく、一目置かれているようなところがある。

一方の彼女は超有名人だ。けれど人づき合いを徹底して避けているようで、真砂子は彼女の知り合いという人に、会ったことがない。伸一はゲートをくぐると、じゃあ、と手を上げ、乗り込んでいった。この人の別れ際はいつもこうで、実にあっさりとしている。一方の彼女は、よくそんな後ろ姿を目で追いかけることがある。

彼女は喫茶室に立ち寄り、窓際の席に腰掛けた。そうして窓の外を見つめている。

真砂子はすぐにその？異変？に気づいた。彼女は何もしやべらず、珈琲を、一口も啜らない。

伸一を乗せた飛行機が飛んで行く。機体が空に吸い込まれ、完全に消えた。彼女は尚も見つめていた。

彼女の？こころ？はここにはいなかった。誰と一緒にいるのかなど、意識の上から消え落ちてしまっているのだ。

彼女が立ち上がる。真砂子は席を立つことが出来ない。振り返り、まるで魂が抜け落ちてしまったような彼女の後ろ姿を、

消え去るまで見つめていた。

九

新学期が始まると、故郷から二通の手紙が届いた。母は、高志がまだ野球を止めてくれないと嘆き、弟は、『姉上様、母は近頃めつきり小言が多くなりました。援護射撃をお願いします』、と書いてきた。

いくら受験だからといって、あの子が野球を止めるわけがなく、こうなることは予測ができた。母の気持ちもわからないではないけれど、どちらかというと、弟の肩を持ってやりたい。リスクを犯すだけの値打ちを感じられるものに巡り会い、それに純粋に打ち込めるというのは素晴らしい体験だと思う。それが単なる青春のよい思い出で終わらずに、あの子なら、きっと未来へとつながられるだろう、と信じられるのだ。

だからトラブルを大きくしないよう、母の心配をなだめてたかったのだけど、高志はあれでなかなかの策士だし、母の小言も柳に風で受け流す風情があるのだから、下手な手助けなしでも、結構上手くやりくるめてしまいそうで、真砂子は返信の内容を考えるけれど、あまり親身になれないでいる自分を感じ、文章はなかなかまとまってくれなかった。

高志が野球を止めてくれないそうですね。ご心配のことと思いますが、野球といっても一日中やっているわけじゃないし、あそこの高校のレベルじゃ、どう考えても全国大会へは出場できませんから、大した遅れにはならないでしょう。あの子は出来もいいし、す

ぐに取り返す計算があるのだと思います。（なにせ要領がいいですからね）

無理に止めさせようとしても、はいそうですね、とすんなり受験に打ち込んでくれるわけではないし、今は思う存分野球をやらせてあげた方が、かえってすつきりとして、後で存分打ち込めるんじゃないでしょうか。結果に責任が問われるのは、本人なのでから。当人が一番わかってるのだと思います。でも高志には、私からも勉強するよう、重々言い聞かせておきます。

そして弟には、

本意ではありませんが、残念ながら、母を宥めるような手紙を書いてしまいました。好きなことに好きなだけ打ち込める時もわずかなのだから、おもいきりやりなさい、と言ってみたい気もしますが、なにこともほどほどに・・・家の中が穏やかでないというのは気持ちのいいものではないでしょう？ 振りだけでもかまいませんから、勉強しているところも見せてあげてください。野球が終わっても、アルバイトなんかに精を出しちゃダメよ。余計な心配はかけさせないで。

と、そんなことを書いた。

だが悩んでいるのは母だけではない。彼女と行き遭うことがなくなり、真砂子は一人で過ごさなければならぬ時間が、急に増えてしまったのだ。就職活動とか、忙しいのはわかるけど、部屋にまったく立ち寄ってくれない、というのはこた堪えた。伸一も卒業し、まるで二年前の、ここを開ける相手が誰もいない状態に後戻りしてしまったようだった。ところで、

あの女性ひとは一体、何をしたいというのだろう？

大切に思われている、とはいふものの、彼女のことは何も知らないに等しい。最後に残るのは大学の友達だ、というけれど、このま

までは心もなかった。

そんなある日、真砂子は図書館の中、ようやくに彼女を見つけた。やはりひと気のない、ちょっと入り組んだ書架の影になった席で、むずかしい顔をして本を読んでいた。目が合った時、彼女がとても不機嫌なのに気がついた。拒否されているわけではなかったため、静かに斜め向かいの席へ腰かけ、テキストを広げた。けれど彼女との関係が結べる余地はなかった。それでもやはり、真砂子はこの女性を側を、離れたくはなかった。

突然、ばたんと本が投げ出された。

振り向けば、彼女はいらだたしげに唇を噛みめている。美禰子さん、何か悩み事でもあるんですか、と問えば、きつい眼で、らしくもない *sarcastic* (皮肉のきつい) な笑みを浮かべ、彼女は言った。

「悩み事ならいつだってあるよ」

真砂子は伸一に電話をかけた。彼女の方から誘うのは珍しい。けれどどうしても、会わずにいられなかった。会うと彼は予想以上に機嫌がいい。仕事が充実しているのだろう。なんと彼は、鍼灸師になっていたのだ。

真砂子は彼の話を聞いてみたくなった。

きっかけを尋ねると、わからない、ある時ふと思いついた、と答える。もともと中二の時、部活で腰を痛め、整形外科に通ったけど痛みが取れず、鍼を打ったら一発で治ったことがあって、凄いな、とは感じてた。その時お世話になった先生に相談しに行ったら、実はこの人がすごい名医で、これだ！ と思ったそうだ。

「何気に、ガンを治癒されたことってありますか？ て聞いたら、ありますよ、って答えるの。末期のガンは？ て聞くとやはり、ありますよ、って答えるの。ぶっ飛んだんだね」

これには真砂子も驚いた。

「ガンって、どうやったら治るんですか？」



「そんなこと、新入りに聞かないでくれ」

「ははは」

「結局独自の方法を編み出すしかない、らしい。俺の先生の先生っていうのが、中国人で北京で活躍されてるんだけど、彼はガンを治療するのに？鬼門十三穴？、て日本には伝わっていないツボを刺すらしい。それは物理的なものではないんだ。だから刺す角度、早さ、深さ、すべて真似てみせても、同じ効果は得られない。俺の先生は先生で、また独自の方法で治療している」

「物理的じゃなければ、何なんですか？」

「どうも？次元？がひとつかふたつ上、ってことらしい。最新の理論物理学によれば、次元は十一あるらしいから」

そこまでいくと、真砂子の理解力を遙かに越している。

彼はまたこんなことも話してくれた。多くの病気が炎症に始まって、例えば場所が肝臓なら、肝炎、肝硬変、肝臓癌の順に進行していく。胆石なんかでも、最初はやはり炎症がある。大病なんて、いきなりなるものじゃない。だから炎症が確実に治せれば、十分名医じゃない、と彼の先生は言っている、という。

それから、骨髓バンクで適応するドナーを待っているうちに亡くなっちゃう、なんて悲劇が無くなる可能性がある。骨髓炎が治せるんだから、とか。拒食症の治癒例とか。彼の話に興味が尽きなかった。

「伸一さんってすごい人なんですね」

「いや、オレの先生がスゴイの。オレはまだまだ修行中の身だ」

彼はいかにも楽しそうだった。いかにもノっているのがよくわかる。そして時計をちらつと見ると、

「あれ、珍しいね。キミがこんなにも長い間美荘殿の話題を切り出さないなんて」

真砂子はその言い草がおもしろかった。

「美禰子さん。最近忙しいようで、全然会ってないんです」

「右に同じ」

そうなのか、と真砂子は思った。すると伸一がなにやらおかしげに笑い出す。

「それにしても、キミのあいっつに対する態度つていったら、まるで、恋心を打ち明けられない思春期の女の子が、片思いの初恋の相手に振り向いてもらえないかとやきもきしているような感じだよね」

「そう見えますか？」

「わたくしの眼には、そう映りますが」

似てるのかもしれないが、違う感情だ。？愛？を表現するために九十もの言葉を発明したサンスクリット語には、この思いをずはりと言い当てる言葉があるのかもしれない。

「伸一さんの初恋の人って、どんな方だったんですか？」

「どうしてそんなことを、キミに答えなくてはならないのでしょうか？」

それはそうだ、真砂子は思った。けれど伸一は視線を逸らすと、考え事をするような表情を見せ、くすくす笑い出した。人の思い出し笑いなんて気持ち悪いものだ、と聞いていたけれど、なかなか悪くない姿だった。

「そうかあ、もう十年前になっちゃうんだよね」

「ずいぶん楽しそうですね」

「今となってはね。真砂子さんも、そうじゃない？」

ドキッ、とした。伸一はその反応を、ニコッ、と笑って楽しんだ。一本取られた、と真砂子は思った。

「村田殿の初恋のお相手は、どういうお方だったのでしょうか？」

「なんでそんなことを笹岡様にお話ししなければならいんですし、う？」

「美荘殿には話せるわけね」

「美瀬子さんの初恋の相手の方って、どういう人だったんですか？」

「キミはなんで人の初恋のことばかり聞きたがるんでしょう？ そんなに知りたかったら、まず自分のことから先に話さないな。それがフェア、ってもんじゃない？」

確かに褒められたことではないだろう。けれど pardonable（許容範囲）ならば、時にはちよっぴり improper（反則すれすれ）なこともしてみたくなるのだ。

「で、どういう方だったんですか？」

「さあ。知らないねえ」

「話しては、くだらないんですね」

「いや。ほんとに知らない」

「・・・そうなんですか？」

「たとえ知ってたとしても、話さない。人のプライバシーにはなるべく近づかない方がいい。特にこういうデリケートなことに關してはね」

「いいです。直接ご本人に聞きますから。ついでに伸一さんのお相手のことも聞いちゃいます」

「フフフフ。アレがそんなこと話すようなタマかよ」

ちがいない。

「それにわたくしのお相手に関するものでしたら、あいつはほんとうに知らないよ」

「そうなんですか？」

そんなことはない、と真砂子は思うのだけど、もうこれ以上、この人からは何も聞き出せそうになかったから、矛先を変えてみた。

「伸一さんは、その方に再会してみたい、と思いますか？」

虚を衝かれたのか急所に入ったのか、伸一は何のリアクションもとれず、固まってしまった。いつも泰然としているはずの人が、こんな表情を見せるのは珍しい。真砂子はなんだか楽しくなった。

伸一は斜めに視線を落とし、真面目な顔で、考え込んだ。言葉を紡ぐには、しばしの時間が必要だった。

「いつか、たとえば十年後、道ばたで、偶然すれ違ってみたい、とは思う。願わくば、旦那さんとしあわせそうに歩いている姿を、目撃してみたい。俺はすぐに気づくんだけど、あっちは気づかない。旦那さんとの会話に夢中だから。子どもはいてもいいし、いなくて

もいい。とにかく、そんなしあわせそうな笑顔を見て、安心してみたい、と思う」

「ロマンティストですね」

「リアリストだよ。とても起こりそうなことじゃない」

真砂子の口元に笑みがこぼれる。

「とっても、ロマンティストだと思います」

彼女との関係には何の進展もない。真砂子は気の抜けた時間を過ごしていた。先行きの見えない状況だけど、真砂子はもう少し、事態の推移を静観していただけるだけの辛抱ができた。

梅雨が終わろうとしていた。久しぶりに、雲の切れ間から夕日が眺められた。学校の帰りは遠回りして、小さな公園へ寄った。そこは静かで落ち着ける。二艘のブランコがあつて、子供の頃の風景を思い出させてくれた。

片方の席には先客があつた。暮れてゆく夕闇にまぎれ、すっかり放心しきつた体で、あの女性ひとが座っていた。茶色の長い髪が、鎖を握る指先に、絡からみつくように舞っていた。歩み寄ると、背景に埋うれるように黄昏かられていた彼女が、ゆつくりと顔を上げた。

真砂子はようやくこの女性ひとをまじまじと見つめることができた。少し痩せた。その眼差しには力がない。けれど憑つきものが取れたような顔立ちに、ほっと笑みがこぼれる。彼女はひとつ息をつくと、「ふらふら歩いてたら、ここに来たの。ブランコがあつたから、乗ってみたの。むかし・・・このブランコに乗った記憶がある。こいでたら、とっても気持ちいいの。何か、すごい悩んでいたことがあつたんだけど、何だったか、もう覚えてない」

彼女はゆつくりとブランコをこぎ出した。まだ醒めやらぬ意識を揺り起こすように、スピードを上げていった。足先が軽やかに伸び、長い髪が弧を描いてたなびいた。夕日が街並みに沈んだ。気が晴れたのか、彼女をブランコを下りると、微笑んで、

「おなか空いたなあ。真砂子ちゃん、何か作って」

部屋へ戻り、冷蔵庫にある材料をチェックした。残念ながら、あり合わせでは大したメニューが思いつけない。どうせなら、腕によりをかけてお持てなしをしたいのだけど、買い物に行くのは、ちょっと時間がかかってしまう。どうしよう？ と真砂子が振り返ると、彼女は窓枠にもたれ、すでにうたた寝していた。

猫が毛繕いもせず、眠っている。何をこんなにも、無理をしななければならぬのだろう。とにかく栄養のあるものを、と腕を振るった。起こすのは少し気が引けた。けれど彼女は卓袱台に用意された手料理に、目を丸くして喜んでくれた。そうして残さず食べ、食後のコーヒーを用意する頃には、すっかりくつろいでいた。

いつものように、頼杖ついてカップを持ち、目を瞑るとゆっくりと香りを楽しむ。そして両手で捧げ持ち、そつと口つけ、丹念に味わう。そして、とてもしあわせそうな顔をする。

「美禰子さんは、卒業されたら、どうなさるおつもりなんですか？」

「それが問題なのよ」

「長崎を、離れられるんですか？」

「それが問題なのよ」

いずれにせよ、自分が関われる問題ではなかった。この女性の未来は、この女性自身が選ぶことなのだから。

「それにしても久しぶりだなあ。真砂子ちゃんの手料理。とっても美味しかった」

それが今こ女性にしてあげられる、唯一のことだった。

「ねえ真砂子ちゃん。流れに乗れていない時って、どうしたらいいのかしら？ 何をやってもしっくりこない、っていうか。向かうべき方向に向かっているのか、確信が持てない時は、どうしたらいいのかしら？」

「今の美禰子さんは、そんな感じなんですか？」

「んー。じゃあ質問を変えるわね。自分はもつと素敵な人でありたい。もうちょっと、思いやりがあったり、寛容であつたり……。でもそういう？ わたし？ でいられないの。なんか、今の自分がいけ

てない。そんな時は、どうすればいいのかしら？」

「とつてもお疲れのようですから、ゆつくり休まれた方がいいと思います」

「あなたはどうしてわたしの質問に答えてくれないのかしら？」

「この手の質問にはまともに答えなくてもいい、って教えてくださったのは、美禰子さんじゃないですか？」

「わたしがいつそんないけないことをお教えしましたかしら？」

「素敵な女性ひとというのは、結構いけないことを教えて下さるものですから」

彼女は力なく卓袱台の上に倒れ、うずくまる。こんなにも簡単にやり込められるなんて、よっぽど疲れているんだな、と真砂子は思った。

「水野さんの伯父さんの家に招待されたんです。庭に一脚あつた椅子の上に、猫が丸くなつて寝ていたんです。自然の豊かなところで、ストレスなく生活しているからか、安心して寝ていらんです。そんな風に、もうちょっと、生活のテンポを落とされてもいいんじゃないでしょうか？」

「わたし猫じゃないもん」

いつもながらに手の焼けるお人だ。真砂子は次の一手を思案した。「美禰子さん。もしよろしかったら、もっと頻繁にここへ寄っていただけませんか。ご飯食べたり、いろいろお話ししたり・・・そうしたら、わたしはとってもうれしいんですけど」

彼女は身体を起こすが、うつむいたつきり、顔を合わそうとしない。

「真砂子ちゃん。そう言っていただけるのはほんとにありがたいんだけど、受け取るだけ、っていうのは結構辛いんだなあ」

「わたしは、与えているだけ、なんて意識、まったくありませんから。ただ美禰子さんと一緒にいるのが嬉しいから、そんな機会がもっと増えたらいいなあって、思っているんです」

「わたしはね、今いろんな意味で、？できない？の。できないこと

がたくさんあって、あり過ぎて、どうしたらいいかわからないの」  
「やっと根本的なところに触れた。具体的には、なんのことだかさっぱりわからないが、問題の核心が？今ここ？に現れていた。この瞬間に、自身の深く真実な思いを適切に表現できれば、何かが変わるのだろう。けれど真砂子は？言葉？が見つからない。だから音楽をかけた。ラフマニノフ、ヴォカリーズ。奏者の名は知らない。例によって、彼女が録音してくれたものの一曲だが、何故かピアノストの名前は教えてくれなかった。素晴らしい演奏ではあったが、自身の思いそのままではない。けれど、

Un peu est plus mieux que rien . (？ちよつと？はゼロよりはるかにまし)

彼女は眼を閉じて、静かに聞き入ってくれた。曲が終わると、彼女は上目遣いに甘く、感謝の意を表す。そして、そろそろおいとましようか、という素振りをみせるものだから、

「美禰子さん。今日何の日だか、覚えてますか？」

「・・・・・・初めて逢った日、じゃないよね？」

「ははは、あの時のことを覚えていてくれるのか。」

真砂子にはわかに嬉しくなった。見つめ合えば、あの時の体感が、リアルに甦ってくる。そして彼女は、

「まったく、あなたはいったいどんな眼でわたしを見つめてくれたのよ」

自分の思いに気づいてくれたのか。

C'est trop doux pour moi . . . (それはあまりに甘過ぎる) 真砂子は視線を落とした。

「わたし、あの時のことは一生忘れないと思う」

自分だって一生忘れない。胸に熱い思いが込み上がってくる。そして真砂子が顔を上げるのをためらっていると、

「あつ、ところで、今日は何の日なの？」

「・・・・・・三人で、映画を見に行った日なんですよ」

「ああゝ！ はいはい。そうなの。へえゝ、もう一年たったんだ。」

あの節は大変失礼いたしました」

「いえいえこちらこそ、何のお力添えもできませんで」

彼女は深々と頭を下げる、そして二人で大笑いする。

「でも真砂子ちゃん、よく日付なんて覚えてるわね」

「だって？人生最悪の一夜？でしたから」

美禰子は畳に倒れ込み、腹を抱えて笑っている。真砂子も釣られて笑い転げる。

「最悪の夜も一年たてば笑い飛ばせるわけ？　ならば正直に言わせていただきますけど、わたし、あの夜。あなた方ふたりが、腹立たしくて腹立たしくて仕方なかったの」

「わかります。わかります。きつとそうだったんだろうなって、後から思いました」

「わかるって、ほんとにわかってるの？」

「はい。たぶん」

彼女は、ほんとかしら？　とかなりいぶかしげな目で見つめてきた。

「あの、わたし、あの映画……見直したんですよ。実家の近くのレンタルで見つけて、」

「で？」

「美禰子さんは、凄過ぎるんです。他の人が見抜けないところまで見抜けるんです。だから、意見が合わなくなってしまうんです」

「わたし、真砂子ちゃんの言っている意味がわからない」

「あの、マリオンって……イヤなひとですよね」

「でしょ？　そうでしょ？　そう思うでしょ？」

「問題のシーンで、すごい婉曲的な表現使ってますけど、要するにマリオンはピエールに、これからアンリと寝たいんだけどポリーヌを連れ出してくれる？　って頼んでるわけですよね。

でも普通の人にはそれがわからないんです。

そのシーンは、四回くらい繰り返し見ました。信じられないんですよ。実際世の中にこんな人がいるのかしらって。だから、マリオ



ンを腹立たしく思う以前に、理解することができないんです。

それにピエールもおかしいですね。そんなことに手を貸すなんて」

「……アルトゥール・ルービンシュタイン。名前は知ってるわよね」

「はい」

「自伝にあるんだけど、彼はそんな女の人に恋しちゃったの。そして同じこと露骨に言われたの。本能的な反応は、その頬をひっぱたいてやれ！　だったんだけど、彼はまだ若かったから、それができないどころか、言うことをきいちゃって。」

ヨーロッパンって、挨拶で頬にキスするでしょ？　後日、彼女はアルトゥールの耳元で笑うのよね、悪魔のように。彼は言うわ、生涯において、自分の性格にこれほどの打撃を受けたことはない」

「いるんですね、そういう女の人って。わたし、それに気づいてからも、どこか信じられない思いがしてたんですけど」

「わたし、馬鹿みたい」

彼女の瞳から涙がこぼれ落ちる。

「ほんと馬鹿だわ」

そして部屋を飛び出した。あまりに突然の出来事に、真砂子はまったく反応することができなかった。

m a n u i t c h e z u n e c h a t t e i  
v r o g n e

（酔いどれ猫との一夜）

夜の十時を回っていた。外から、真砂子ちゃん、いる？、と大きな声がする。窓を開けると、彼女がワインの瓶の入ったビン

ル袋を掲げ、飲もうよ、と叫んでいる。もうすっかり出来上がっているようだ。部屋の中へ入れると、飲むわ騒ぐわ、手がつけられない。伸一君も呼ぼう、と言い出し、思い留めさせたかったのだけど、できなかつた。迷惑がる様子も見せず、彼は来た。そうして相手をしてくれたのだが、目が醒め切っている。真砂子はヤバイと思つた。二人とも、大層酒を強いられた。そうして当のご本人は、ひとり陽気に騒ぎ喚いたあげく、酔いつぶれ、うずくまると嘔吐えずいてしまい、さらに悪いことに、その上に倒れ込み、反転し、真砂子が天使の翼とも思っていたその髪が、反吐にまみれてしまったのだ。

天人五衰・・・それは非常にショッキングな映像だつた。真砂子は、自分まで戻してしまいそうになり、気持ち悪くて気持ち悪くて、とても世話をすることができない。後始末は全部伸一がしてくれた。真砂子はその様子を見ることもはばかられた。正体なく寝り込んだ彼女に毛布をかけてあげると、彼はお茶を入れてくれた。水分を補給すると、真砂子は少し楽になつた。その間、伸一は彼女の枕元に座り、不機嫌そうに睨にらみつけていたのだが、なんでこんな目に遭わなきゃならないんだ、と激しい怒りを込め、その足で彼女の頭を踏みつけた。

酔いも気持ち悪さも一瞬で吹き飛んだ。怒りを越えた怒り。体験したことのないほどの激情が、全身を覆おおつた。真砂子は湯飲みを置いて居住まいを正した。

彼が振り向く。その目に宿る瞋しん恚いは、真砂子のそれを遙かに越えていた。？殺気？と言っても言い足りない、冷酷な感情がそこにあった。

だが、負けるわけにはいかない。

真砂子は覚悟を決めた。

「伸一さん。その足を、どけていただけますか？」

「イヤだと言つたら？」

何もかも破壊し尽くしてやまない激情。正面切って立ち向かっても勝ち目はない。けれど真砂子の頭脳は、不思議なくらい冷静でいられた。

「伸一さん。わたしのおふたりに対する率直な思いを語らせていただいてもよろしいでしょうか？」

「・・・・・・どうぞ」

「この方が過去において、伸一さんに大層腹の立つ言動を繰り返された、というの容易に察しがつきます。そして伸一さんが、やり場の憤りを多く抱えていらつしゃることも。そんな情念に苛まれていらつしゃるのでしたら、そういう形ではなく、わたしに、語っていただけないでしょうか？ 微力ですが、a m i eとして精一杯のことをさせていたきたいのです」

伸一は答えなかった。ただ緊迫度はかなり収まっている。真砂子は続けた。

「この方が、ツバも吐けばヘドも吐く、普通の女性だというのはわかっています。時として、こんな風に滅茶苦茶もされることも。それでもこの方は、わたしにとって、かけがえのない人なんです。初めて会った時、もし世の中に本当の女性というものが存在するのなら、この人だ、と思いました。何か、？ 神的なもの？ を感じさせてくれたんです。あの瞬間はわたしにとって、大切な宝物なんです。

わたしも、この方のa m i eをさせていたでていますけれど、つき合いは？ 浅い？。少なくともわたしはそう感じてしまえます。だから、こんなことを言ったら、とっても不愉快に思われるでしょうが、この方と深い関係がある伸一さんが、正直、羨ましいんです。ほんと、羨ましいんです」

「代われるものなら代わってあげたいね。いや、ぜひとも代わっていただきたいもんだね」

「伸一さん。？ 前世？ って、信じられますか？」

「はっ。ワイズ博士か。半信半疑だね。で、キミは信じてる、っていうの？。そしてオレはコイツとは、前世からの因縁があるって、

思ってるわけ？」

「わたしも半信半疑です。でもわたしがおふたりの関係をどれくらい緊密なものと感じているか、表現しようとする、ある歴史上の人物を思い浮かべます。ご想像していただけますか？」

「いや、わからないね」

伸一は考える気などないらしい。片足は彼女の頭を踏みつけたまま、？戦闘態勢？をいささかも崩さない。真砂子は？計った？わけではない。ただすべてが上手くいつているを実感していた。時間が経過するにつれ、彼の怒りのヴォルテジは、変容可能なくらいに収まってきている。真砂子は？射抜く？タイミングをじつと見計らった。

「もし過去生というものがあるのなら、私は伸一さんと美禰子さんが、細川忠興とガラシャの生まれ変わりだと思っています。それくらい深い繋がり、絆があると、確信しているんです」

彼はさつと正座をし、参りました！、と頭を畳にこすりつけ、？恭順？の意を示した。

真砂子はどつと疲れが出た。こんな激しい緊張状態に置かれ、短時間でこんなにもエネルギーを消費したのは、記憶にない。安堵の思いに包まれたが、すぐに、なんでこんなにまでしなくちゃいけないの、と怒りもこみ上げてきた。目の前の彼は、それだけはお止め下さい、とかなんとか、訳の分からないことを繰り返している。だから、大きな声で怒鳴ってやった。

「忠興！　　酒を酌め！　　」

騒ぎの張本人は、ワインを三本も持ってきていたので、お酒には事欠かない。二人で飲み直した。身体は酔いを感じたが、頭にはまったく利いてこない。だがようやく、情動をリセットすることができた。

「しかしながら、今夜の村田殿には、ほんとと敬服いたします」

「もういいじゃないですか、そんなことは」

「あなたは素晴らしい人です。この件に関しましては、美莊殿も同意見です」

「それは買いかぶりというものです。真面目な話、そんなこと言われても、わたしはまったく嬉しくないし、むしろ、こころ苦しくなる。失礼ですけど、わたしは本当にあなたがたの関係が羨ましいんです。それに自分が、おふたりと釣り合わないような気がしてならないんです」

「真砂子さんはもう少し自分に自信を持った方がいい。キミと出逢ってコイツは変わったよ。オレにはそれがよくわかる。」

わかるでしょ？ オレとコイツじゃ、喧嘩通り越して、それこそ殺し合いになっちゃうんだ。大げさではなしにね。ところがキミがいてくれると、俺達は正気に戻れるんだ」

「それにしても、美禰子さん。ほんとうによく眠っていますね」

彼女はやはり正体なく眠っていた。

「この女性<sup>ひと</sup>は、寝てる間に伸一さんが頭を踏みつけましたよ、と言っても、きつと大笑いして、気にもとめないんです。自分はまだ知り合って一年ほどですから、仕方ないんですけど、やっぱり、おふたりの関係の深さには、まったく太刀打ちできない。どうしても、距離を感じてしまいます。それが辛いんです」

「その件に関しては、オレはどうすることもできません」

「わたしが強要することはできませんが、ただ、もし何かお話しして下さるのなら、うれしいんですけど」

「美莊さんの、何が聞きたい？」

そう下駄を預けられても、何を聞いていいものか？ とりあえず、目についたオブジェのことから尋ねてみることにした。

「あのブレスレット、お気に入りみたいで、美禰子さん、いつもつけてますけど、」

「あれはね、透明な水色のがアクアマリン、濃い水色がラリマー。透明なピンクのがクンツァイトで、濃いピンクがピンクペタライト」  
「なんで知ってるんですか？」

「というより、これくらいのこと、なんで聞かなかったの？」

「……それくらいのこと聞けないくらい、私は遠慮してしま  
うんです」

「それともうひとつ、美荘さんは素敵なネックレスを持っているよ  
ね。七色の天使が舞ってるやつ。あれは凄いと思う。真砂子さん、  
見たことない？」

「見たことないです」

「そう？ よくつけてるんだけど」

と言われても、知らないものは知らない。真砂子は質問を変えて  
みた。

「美禰子さんって、すごい頭いいですね」

「IQ171」

「はっ？」

「文部省だかなんかの調査のサンプリングに、ウチの高校がたまた  
ま選ばれた。結果は非通知、ということだったんだけど、あまりに  
値が高いんで、当人の希望があれば再テストいたします、という通  
知が担任のところに来た。俺はたまたまその場に居合わせた。『美  
荘君って、そんな頭良かったっけ？』、担任は不思議がってた。あ  
の頃のあいつは、まったく勉強しなかったから、成績自体は悪かつ  
たんだよね」

ふーん、そうなのか、と真砂子は感心する。

「美禰子さんは、芸術関係に造詣が深いですね。文学、音楽、映  
画。それと深層心理学も。昔から、そうだったんですか？」

今回は彼は即答を避け、言葉を選んでいる。

「美荘さんは、ずっと長崎に居たわけじゃない。離れている時のこ  
とは知らない。あいつは一切話さないからね。ただ、ある天才ピア  
ニストとお知り合いになった。フランス人なんだけど、静養で日本  
に来ていたらしい。俺は会ったことないけど、ずいぶん可愛がられ  
たみたいだ。例のクリスタルも、その人からのプレゼント。あいつ  
がフランス語をペラペラに話せて、音楽に精通しているのは、そう

いう理由。真砂子さんも、これ聴けあれ聴けって、よくMD渡されるでしょ？ あのライヴ録音のピアノは、彼女が弾いているんだ」  
「はい。よく頂いています。で、その方は今どうなされているんですか？」

「亡くなりました」

「……はい？」

「長崎で、美荘さんの目の前で、お亡くなりになりました。すごい悲惨な死に方をしたんだ。観光用の馬車があるでしょ？ それにトラックが突っ込んで、吹っ飛ばしたんだ。その車輪に巻き込まれて、両腕が切断された。」

ピアノの腕がだよ」

「この女性<sup>かた</sup>は、ほんと凄惨な目に遭ってこられたんですね」

「そう。今生きているのが、奇跡であるくらいにね」

伸一はそこで口をつぐんだ。真砂子が思いついた次の質問は、正に核心に迫るものだった。

「伸一さん。この女性<sup>かた</sup>は、伸一さんに対して、なにかひどいことをされたのだと思いますけれど、そのことについて、話していただけますか？」

彼はじつと見るが、答えようとはしない。

「わたしは出来る限り、伸一さんの立場になって、共感的に、耳を傾けさせていただきます。話していただけますでしょうか？」

彼は尚も見つめている。真砂子は彼が口を開いてくれるのを、辛抱強く待っていた。

「真砂子さんは、お父さんを亡くしたんだよね」

「はい」

「辛かったですよ？」

「はい」

「それがもし、誰かに殺されたとしたら、どんな気持ちになる？  
俺が体験したのはそれくらいの痛みかなあ」

この人はけして大げさな表現を使っているのではない、と真砂子

には感じられた。

「この方は、伸一さんに、家族を殺されたくらいの痛みを、感じさせたのですね」

真砂子は彼が信じられた。信ずるに足る人だと、確信が持てた。

そして、その思いが今彼にも伝わっているのが、実感できた。だから、話して欲しかった。

「美荘さんはねえ、子どもの頃に両親を亡くした。その後は親戚の間をたらい回しにされた、らしい。だから長崎を離れていた時のことは知らない。なぜか俺の両親が可愛がっていて、よくウチに来てたけど、中学の頃までは、まったく印象がない。あいつはまったくしゃべらなかつたからね。」

高校生になって、再会した時、あいつは、ほんと手のつけられない状態になっていた。誰にでも噛みついてくる、っていうか、噛み殺しにかかる、そんな感じだった」

そこまで言うと、彼は再び彼女の頭を足で踏みつける。けれど今回のタッチは軽く、真砂子是不快とさえ感じなかった。彼女は相変わらずよく寝入っていた。それを確かめると、彼は足を離し、話を続けた。

「はつきり言えば、美荘さんは精神のバランスを崩していたんだ」

「精神病を患っていた、ということですか？」

「このことに関しては、より正確な表現を使いたい。十代半ば以下のクライエントは、明らかな精神病の症状を発現していても、『みなし患者』、として手当される。というのも、成人患者では不可能な回復をはたすことが珍しくないからだ。美荘さんがいい例。」

でも、あいつ今でも後遺症、というか……ときどきおかしいリアクションするでしょ？」

「はい。なんか、あつちの世界に入っちゃって……何も見えなくなっちゃうような、」

「そう。そんな感じ。」

俺は今、自分の責任で話したけれど、実はそのことは口止めされ



てた。珍しく、真剣に頼み込まれてね」

「そうだったんですか」

「君は精神病を患った人に対して偏見を持っていないだろうけど、患った当人にとっては、一生のこのころの傷だからね」

「そうだったんですか。すみません。話すのが辛いことなのに、無理に話させてしまつて」

「いや、話せるもんなら話してみたい、とは思っていた。でもまだ、結末を話してない。ある時、とうとう我慢の限界を越えたんだ。真砂子さん。俺はねえ、この手でこいつの首を絞めて殺そうとしたんだ」

真砂子は不思議なくらい落ち着いていられた。その思いを冷静に受け止められた。共感的な思いが自然と湧き起こってきて、こころが満たされていった。

「この方は、伸一さんの耐えられる限界を超えるほどの、酷い<sup>ひど</sup>仕打ちをしたのだと思います」

優しい思いで彼を見つめた。いつもなら、じつと見つめ返してくる彼が、視線を合わせられない。うつむいたまま、肩を震わせている。

「この方が狂気に落ちていく様を見て、伸一さんが、何も感じずに手をこまねいていたなんて信じられません。真実な思いやりをもつて、できるかぎりのことをしたのだと思います。それをこの方は、愛情もつて差し伸べられた手を、言うならば……噛みちぎったんだと思います」

膝を抱えうずくまり、彼がむせび泣く。

「もしこいつと巡り会わなかったら……って、そんなことをよく考えた。よくも悪くも、俺は？普通？でいたんだろうな、って。スポーツ好きで、愛読書は三国志とブルターク英雄伝で。最も尊敬する歴史上の人物は上杉謙信。そして自分の家系に、特別な誇りを持つて。」

俺は戦国という時代を思い浮かべると、いつも畏敬の念に打たれ

てた。殺さなければ殺される。そんな極限下で、愛する者達のために命を懸けて戦った無名の魂達に思いを馳せれば、いつだって胸が熱くなった。

だがそんなのは事実の一面にしか過ぎない。

真砂子さん。経済的には寄生階級に過ぎなかった土族が、どんな残虐な行いをしてきたか。中世の異端尋問で、どんな拷問器具が考案されたのか。今世界の？暗黒？と呼ばれる地域で、どんな拷問が行われているか。もし知りたいのなら、この美莊殿に尋ねればいい。精神のたがが外れそうになるほどの残虐行為の数々を教えてくれるから。

こいつに言わせれば、笹岡家はそんな？人殺し？の系統なんだって。そりゃそうだよね。オレもその末裔に相応しく、女の首に手をかけて、平気で絞め殺せるんだから」

膝を崩さぬまま、両腕で畳の上をこぐように進み、嗚咽する彼の少し斜め前に端座した。真砂子は彼の手を取り、両手でしっかりと握りしめた。大切だ、という思いを込めた。その思いが彼に伝わる。真砂子は時間をかけて、充分に、否定的な感情を放出する力添えをした。

落ち着きを取り戻した彼が、ありがとう、と彼女の手を離れたそうとした時、真砂子はその手を強く握りしめ、キスをした。

座布団を取り、彼の横、少し離れた位置に座った。

「この女性の友だちになつて下さい、なんて。わたし、伸一さんに、相当無理なお願いをしてたんですね」

「もういいよ。そんなことは」

「もし知ってたら、とても言えませんでした」

「『どんな木も、地獄までその根を伸ばさなければ、天国までたどりつくことはできない』苦いセリフだ。確かに地獄までは行っただけ、果たして、天国まで届く花を、俺達は咲かせることができるの

かなあ」

「わたしは、おふたりほどの、地獄を経験してきたわけではありま  
せん」

「別に地獄に落ちたからって、なんの自慢にもならないよ。天国ま  
で行かなくなつて花は咲く。コンクリートのわずかな隙間からだっ  
て」

「わたしは、両親にまったくかわれずに育ちました。姉だったせ  
いもあるんですけど、手のかからない、音無しい子でした。中学に  
入って、母の干渉が始まりました。部活動を許してもらえず、料理  
を習うことを強要されたんです。

わたしは、別に児童虐待とか、そんなひどい目にあつたわけでは  
ありません。

けれど、母はまるで敵の<sup>かたき</sup>ように辛くあたつてきて、わたしはイヤで  
イヤでしかたなかった。母は、なにかというと包丁でまな板を叩く  
んです！ 危害を加えられないのはわかっていますけど、まるでこ  
ころを切り刻まれるようで、わたしはひどく傷つけられた。ほんと  
耐えられなかったんです」

「真砂子さんも俺達同様、こころに癒やされない傷を抱えていたん  
だ。だから俺達は a m i s でいられるだろうね」

あの女性<sup>ひと</sup>の前でも、さんざん泣いたはずのに……

こころの底にはまだ泣き足らぬ嘆きがある。思いをかけられる  
ということは、こんなにも心身にしみ渡るものなのか。

その嵐のような激情が<sup>な</sup>風<sup>な</sup>いでいくには、しばしの時間が必要だっ  
たつた。

「今年の正月、美禰子さんに言われました。『あなたのお母さんも、  
自分の母親に、きつと同じことをされたんでしょうね』、と。はつ  
としました。決定的な科白だと思いました。その時、自身の中で何  
かが変わったんです。これでも、今は……以前より平静に受け  
入れることができるようになりました」

「それなら、お母さんのことは、許せられる？ 悪感情を持たずに

いられるの？」

「・・・許すのは簡単です。ただ、悪感情を持たずにいるのは・・・難しいです」

「もし君のお母さんが謝ってきたら、そのわだかまりが取り除かれるのかなあ」

「謝るなんて、そんなことしていただかなくて結構です。それに、母が謝ってくるなんて状況は、ありえそうには思えません。母は、自分が娘の感情を傷つけたことなんて、絶対認めようとは思いませんでしょうから」

「君はもつと自分の感情に気づいて欲しかったんだね。温かい思いやりを持って、接して欲しかったんだね」

「わたしは、母に愛されている、と実感した経験がありません。愛しているのなら、もつとその思いを感じさせて欲しかった」

「君は、愛されている、つてことを実感したいんだね。じゃあ、もしこう言われたら？ 『あなたが、愛されている、と実感できるかたちで、愛してあげることができなくて、ごめんなさいね。ほんとうは、誰よりもあなたを愛しているのよ。わたしの子どもとして生まれてきてくれて、ありがとう』」

la deuxi re partie

la fin de

Intermezzo

秋が来た。美禰子からの連絡はない。真砂子は、自分が生きていく、という実感がつかめない。何をやってても、心しんからの喜びが湧

いてこない。大好きだったフランス語の勉強も、まったく身が入らない。

ひとりの休日、真砂子は町をぶらついた。気分を変えなきゃ、と思った。部屋にこもっているよりはよっぽどいい。公園のベンチに座って聞く、小鳥のさえずり、葉擦れに瞬く木漏れ日、教会の鐘の音、以前は新鮮な感動を覚えた何気ない日常の瑣事<sup>さじ</sup>。けれども今は、こころの中に共鳴する琴線がない。

結局私の関心は、あの女性<sup>ひと</sup>を中心に回っている。

真砂子は彼女のアパートの前まで来た。立ち寄るつもりはなかった。というか、彼女の部屋に上がったことがないのだ。

何事もなく通り過ぎ、角を曲がった。

不意打ちだった。

そこに彼女がいた。伸一と向かい合わせに、立ち話をしていた。友だちだし、長いつき合いなのだから、自分のいないところで会って話していたとしても、何の不思議はないのだけれど、ふたりの距離は近かった。眼差しに、特別な輝きをきら煌めかせながら、心持ち、仰ぎ見るように見上げる、その角度が良かった。そして彼女が全身から放つ雰囂<sup>オーラ</sup>気が、普段のそれとは全く異なっていた。この女性<sup>ひと</sup>がこんなにも華やかな喜びに満ちあふれている姿を、真砂子は見たことがない。それは立ちくら眩んでしまいそうなほど、艶<sup>あで</sup>やかな姿だった。

首筋には、七色の天使が舞っていた。そして唇に、ついぞ目にしたことのない情熱の色が光っている。Le rouge... coummement? affirmative, je suis inquant? affirmative, les femmes avouent ses amours.”（その紅は、<sup>くれない</sup>私は女性が愛を打ち明けるために発明されたのです」と語っているかのよう）間近に来たというのに、彼女は全く気がつかない。先に気づいたのは伸一の方だった。

「真砂子ちゃん」

彼女は、さつと振り向き、明るく声をかけてくれた。けれど、

上手の手から水がこぼれた。

即興で笑みを返した。けれど振り向く直前の、目の端で自分を見つけた時の一瞬の動揺を、真砂子は見逃すことができなかった。

真砂子には、彼女のこころの動きが、手に取るようにわかってしまふ。そして今、彼女にも同じことができた。まるで、

何一つ隠し事ができない世界へ、ふたりして足を踏み入れてしまったかのように。

Elle espère que je la réponds.  
Mais, je ne peux rien dire.

（彼女は返答を期待したのだらう。けれど何も言い出せなかった）  
声を出していたら、きつと震えていた。それならまず、二人の間に広がるこの中途半端な距離を、うめるべきではなかったか？ けれど足は根を張ってしまったように、動かそうにも動かせない。

彼女はみるみる青ざめていった。

一体何をそんなにも、怖れなければならない？

お互いに、即興を奏するには突然過ぎた。そして動揺を隠すには、

あまりに衝撃が強過ぎた。

### 第三部

—

あの衝撃から、真砂子は立ち直ることができなかった。四六時中、こころが小刻みに震えている。活力のほとんどを奪われ、日常生活に支障が出るほどだった。

原因ははつきりしている。だがその核心は、皆目見当がつかない。一瞬だけ垣間見た、あの女性ひとの真の美しさ・・・あれが？愛？でなくて何であろう。ただそれは普通の恋愛感情とは違う、？何か？だった。

ただの恋愛なら問題はない。別にふたりが結ばれたって、何とも思わない。もともと、伸一が彼女を受け入れるなんて、ありえそうにないことだった。

一番の衝撃は、あの女性ひとが怯おびえたことだ。踏み込んではいけな領域に、踏み込んでしまったような気がしてならない。

ふたりには依然？謎？が多過ぎる。

彼が彼女にとって、？特別な人？だというのは知っている。でもそれは一体ひとどういうことなのだろう。そして伸一にとっても、あの女性とは、一体ひとどういう存在なのだろう。

出逢った頃は、とにかくあの女性ひとに近づきたかった。だが今初めて、？怖い？という感情を知った。だが離れることなど、できはしない。

真砂子が一生つきたいと思っていたのはあの女性ひとだけだ。ただ今のままでは、いけない。

今の自分には、選択肢が一つしかない。だがその手段は、ある種の問題をはらんでいる。彼女に近づこうとすれば、彼との関係も近くなる。一生つきあえていける人だが、無条件ではない。

真砂子は伸一を誘った。先週の今週じゃ、こころの動揺を吐露しているようなものだが、今回ばかりは致し方ない。

とはいえ、近頃の彼とは、いい間柄でいる。困ったことに、彼の話はなかなか面白く、一緒にいて楽しいと思う。なにせ彼は生き生きとしている。自分の道を見つけて、真っ直ぐに歩いている感がある。真砂子はそれが羨ましい。

「伸一さんは、なんか、波に乗っている、って感じですね」

「そりやどうも」

「自分の本当にやりたいことを見つけて、一心に邁進されているからでしょうか」

「それは褒め過ぎ。そう言う真砂子さんは、何か自分の生き方が見つけられたのかなあ」

ただこういうところがまだ真砂子の手に余る。そんな風に切り返されたら、何かを答ええないわけにはいかない。仕方なく、ほんのるところを白状した。

今は家庭教師をやっていて、自分でも優秀だと思っし、評価もされている。けれど、とてもこの道は進めない。第一好きじゃないし、受験勉強なんて意味がないと思ってる。だから教えることに、ストレスを感じ始めている。

何をやっても大変なんだし、どうせ苦勞をするのなら、苦勞のしがいのあるものがいい。そう思うと、自分が一番本気になるのは、やはり料理だと思う。ただ調理師免許は取るのに二年かかる。それと肝心な、仕事としての具体的な形が思い浮かばない。

イメージがわくのは、むしろ家庭の中の料理の形だ。イタリア人のシェフに、今まで食べた中で一番美味しかった料理は？ と聞くと、その多くが、もちろんママの料理さ、と答える。そんな楽しい食卓が家庭の中心にあつたら、素晴らしいと思う。

そして自分の子どもには、普通に家事を教えたい。掃除でも洗濯でも、小さいときからお手伝いするのが自然であるような、そういう家庭だったらいいと思う。



またあるイタリア人シェフが言っていたのだけど、彼の故郷では、一年間いい子でいると、クリスマスに白のチョコレートケーキを、いたずらばかりしてたら、黒のチョコレートケーキをプレゼントする習慣があつて、だから、

『お兄さんは毎年白いケーキを、僕は毎年黒いケーキを、喜んで食べておりました』

そんなユーモアのある家庭がいい。

立派じゃない、と伸一は感心してくれたが、真砂子は素直に頷けなかった。探しているのは仕事の具体的な形だ。すると彼は、で、今日はオレに進路相談をしに来たわけ？ とつつこんでくる。返せずにいると、更にたたみかけてくる。

「そつえば真砂子さんには？ 本職？ があるじゃない。美莊美禰子の諜報活動」

以前、自分があまりに彼女のことを訊ねるから、君はCAIの諜報部員か？ とからかわれたことがあるのだ。

「で、今日は何をお望み？」

と彼は試すように言う。やられてばかりいるのは癢にさわるから、真砂子は頭をひねった。

「海へ連れてってください」

一緒に遊覧船に乗るのは二度目だった。長崎県は小さな島がたくさんあつて、その数は日本一だそうだ。真砂子はその景色が気に入っていた。ところが地元の人には見慣れていて、この感動は通じないらしい。

真砂子はこの海を見ると、ショパンのバルカローレを思い出す。あの女性はこれを、恋の歌だと言った。小舟に乗ったカップルが海に行く。女はプロポーズの言葉を待っている。そしてクライマックスで、永遠の愛を誓い合う・・・そんな情景だと。

「伸一さん。美禰子さんと出逢って一番良かったこと、って何ですか？」

軽い質問だった。ところが彼は、どうしたものか、長考に沈んでしまった。

「……思い浮かべられない」

「まさか、まったくないわけではないですよね？」

「そんなこと、考えたこともなかった」

「いいですよ。別に無理して答えてくださらなくても。ただ思いついたから、聞いてみただけです」

「……とてもひとつにまとめられない」

何かがひっかかっていることがあるのか、彼の苦吟は止みそうにない。珍しいこともあるものだ、と思った。

「話は変わるけど……キミは先週、なんであんなにも驚いたの？」

ははは、と真砂子は晴れやかに笑った。今は気分がいい。そんなこと、もうどうでもよくなった。

「わからんねえ、キミたちは」

「どこがどうわからないんですか？」

「どこがどうわからないかさえも、わからない」

二人は顔を見合わせて笑った。

「真砂子さん。今日は、徹底的に美莊殿のこと話そうか」

「それはありがたいですけど、一体どういう風の吹き回しでしょうか」

「『王様の耳はロバの耳』の床屋状態。まあいつかは話さなきゃな、とは思ってた」

「今日は、わたしも、ほんとうにお聞きしたい気分ですね」

「だろうね。じゃあ始めましょうか」

「はい」

「Nous sont amis, n'est pas ?」

「（僕は友人だよな）」

「Oui.」（はい）」

「でも最近の美莊さんの態度は、まったく？友人？つぼくないよね」

「はい」

「まったく連絡してこないのはともかく、全然ここを開く様子がないでしょ」

「そうですね」

「先週もそう。会いたい、っていうから、なんか相談でもあるのか、と思ったら、そうじゃない。あまりにフツーな会話だったんで、拍子抜けした」

「そうだったんですか」

「で、なんだけったつけ、キミのさっきの質問」

「美禰子さんと出逢って、一番良かったこと、ですけど」

「一番驚いたこと、というのなら答えられる。大学に入って、約二年振りに再会した時の、あの変容振りには本当に驚かされた。君はあいつの最悪の姿を知らないから、あのコントラストは想像できないだろうね。君のよく知っている美荘さんは、スゴイよね。あの機知とユーモアとアイロニー・・・何を言っても、返歌を詠むように返し技を仕掛けてくる。俺はあの眼が一番きらいだ。ふくんだ笑みをつかべながら、いつでも人の心理の動きにぴったりとチューニングするような、」

「そんなに嫌わないうでください。伸一さんも、互角にやりあっているじゃないですか」

「ああ、真砂子さんの目にはそう写るのね。信じてほしいけど、オレはずっとやられっぱなしだったよ」

「そうですね。そんなでしょうね。でもそれなら、ずいぶん鍛えられたんですね」

「そう。ずいぶん鍛えられたね。毎日やりあってたなら、そりや上達もするでしょう」

「毎日・・・ですか？」

「ひとつ屋根の下に暮らしていれば、そういうことにもなりしょう？」

「・・・・・・・・・Tu habitais avec

elle? (あの方と? 同棲? されていたんですか) 」

「Oui, exactement. Ensuite, nous avons divorcé? . (そう、その通り。そして? 離婚? したんです) 」

「Une cohabitation avec elle! Tu avais de la chance. (同棲なされてた。それはついてましたねえ) 」

「Oui, j'avais de la chance. Triste malheurusement. (うん、ついてたね。とっても不幸なことね) 」

ある日家に帰るとさ。『お帰りなさい』、とか、につこり……。あの美荘殿にお出迎えされてちゃって……。もう頭真っ白。何が起こったかと思つたよ。だってさ、俺達、すごい別れ方したんだよ。憎み合つて、危うく殺し合いになるところだったんだから」

「何が起こつたんですか」

「『長大受けるんですけど、しばらくごやつかいになつてもよろしいですか?』 とかなんとか、おふくろにかけあつたらしい」

「あ〜」

「まあ、言つならば、あいつは、ウチのおふくろの飼ひ猫だったんだよ」

「私はその餌づけに失敗したんです。子どもの頃は、とっても犬を飼いたかつたんですけど」

「そう。犬の方がいいよ。猫はダメだよ。特に酒癖の悪い猫は」

「久しぶりに会つたその猫ちゃんは、ずいぶんとお綺麗になられていたんじゃないですか? 」

「前よりも、お洒落にはなつてたね。とつても」

「伸一さんは、あの方の恋人だつて、キャンパスではもつぱらの評判でしたけど」

「それは知っている。そう思われても仕方ない。

閑話休題。驚いたのは、むしろ中身の方だよ。頭のおかしかつ

た時期はさておき、子どもの頃、まったく話せなかったアイツがだよ。話すわ話すわ。しかもその話題たるや、文学、音楽、映画、深層心理学、理論物理学etc・・・どうなってるの？」

「美禰子さんの話って、おもしろいですよね。ライト兄弟が空を飛ぶことを目指した本当の理由（注1）、とか。普通の人が見逃すような、裏話に精通してて」

「真砂子さんが一番印象深かった話ってなに？」

「ミレヴァ・アインシュタイン（注2）」

「ああ。あれは考えさせられるよね」

（注1）初飛行に成功した時、ライト兄弟は自分たちが歴史に名を残す偉業を達せたと喜んだ。空を飛んだことではなく、この世の戦争を終わらせた者として。もし空から偵察できれば、どんな名将の作戦も見抜けるから、容易に打ち破れる。もはや戦いを仕掛けてこようとは思わないだろう、純真な彼らはそう考えたのだ。

（注2）アインシュタイン博士の最初の妻。学生結婚をするが、女性が大学で学ぶこと自体まだ珍しい時代の偏見故、退学を余儀なくされる。また両親からも勘当される。初期の相対性理論の論文には、共同研究者としての彼女の名前が添えられていたが、後に削除される。有名になった後、離縁。博士はより外向的な妻を迎える。

離婚後、ノーベル賞の賞金を慰謝料として送られる。三軒の家が建ち、二軒を貸して生計を立てる。最初の息子は立派に成長してくれたが、次男が偉大な父親の重みに負け、問題行動を繰り返し、精神病棟ではてる。その後始末と介護に疲れ果て（次男が死んだ時には家をすべて売り払っていた）自身も発狂。悲惨な最期を遂げる。

美荘女史は、業績だけをもって人を神のように崇めたがる人々を風刺している。また、トールマン大統領に、ナチスが原子力爆弾の製造を計画していることの危険性を唱え、ヨーロッパ戦線に参加して事前にナチスを滅ぼすよう書簡を送るが、それこそが大統領に

原爆開発を急ピッチで進める決心させてしまった故事に触れ、どうすれば長崎に爆弾が落ちるのを止められたのか、と二人に質問したことがある。

「伸一さんは？」

「ゲーテの子どもの頃の話」

「それは聞いたことありません」

「彼は裕福な家庭の子で、小学校に上がると上級生からイジメられた。八歳の時かなあ。彼は父親の拳銃をこっそり持ち出して、イジメっ子たちにそれを突きつけて言うんだ。」

「君たちの卑怯なまねはもう許さん。決闘したまえ。わたしはこれでお相手する」

「すごい！」

「でしょ！ でも実はその後が話の本題で、彼は父親に正直に言うんだ。」

「本日父上の拳銃を無断でお借りしました。言えば断られると思いましたので」

この父親がまたすごい人なんだ。この子がバカな振る舞いをするわけがないと、息子を深く信頼しているんだよね。」

「いったい君はこれをなにに使ったんだね」

ゲーテはあつたことを話し、ああいう人たちと一緒にいてもたえにならないので学校を辞めさせてほしい、と申し出るんだ。その時の父親の返答がいい。

「なるほど確かにお前の言う通りだろう。だが勉強はどうする？」

人生の先輩として言うが、勉学は必要なことだ」

息子の人生の問題だから、自力で答えを見つけさせようとするんだ。そしてこの親にしてこの子ありだ。息子は少し考量して、

「自分でやります」

「それはすごいですね」

「こういう親子関係っていいな、と思った。ただこの話にも？裏？

があるんだ。まあそれは後で話そう。

で、俺はそんな女に一日中つきまとわれてたんだ。語学も上達すれば、教養も増すさ」

「優秀な家庭教師じゃないですか」

「俺はそんなもん注文してないんだけど」

「？ハネムーン？は、十分に楽しめたんじゃないんですか？」

「からむね。こんなことがあった。もう時効だから言うけど、教養課程の数学のテストの時、『95点でいい？』、とかなんとか言っちゃって。あの美莊殿が、俺の答案を代筆してくれるの」

「あの方が、自発的に……ですか？」

「そう。それがすごい芸が細かくて、解答用紙を一枚余計にかつさたって、自分の答案は2Hの鉛筆で、そして俺のは2Bで、筆跡をそっくりに真似て書くんだ。器用だよね。」

真砂子さん知ってる？ あいつの華奢で華麗な達筆。どこの書道家？ っていうくらい腕前だから」

「それは知りませんでした」

「で、その続きがおかしいんだ。答案用紙を集めるじゃない。俺が自力で書いたつたない解答用紙を、あいつは抜き取って、教室を出る時に、さっと目を通すんだ。」

『ふん。かろうじて赤点免除かしら？』、てな顔でニヤツと笑うと、びりびり引きちぎってばらまくんだ。

オレは怒りながらも、バレちゃいけないから、何喰わぬ顔で拾い集める。回りの連中は、コイツらなにやってんだ？ ってな目で見ると。もう大変だったよ」

「あの方らしい」

伸一は手すりに両肘を寄せ、海を見る。

「もしできることならば、あの頃のあいつの姿を、真砂子さんに、見せてあげたい……と思うことがある。イメージで語れば、雲一つないイタリアの澄み切った青空、そんな感じ」

この人が視線を逸らす時は、何かしらの含みがある。

「それにしても、なんで？離婚？されたんです？」

「Parce que "Tout les hommes sont mortels" . (『人はすべて死す』ですからね)」

それはBeauvoirの小説で、やはり勧められ読まれた一冊だが、伸一の意図は理解できなかった。

「おっしゃる意味がよくわかりませんが」

「夏休みに、イヴォンヌが死んだんだ」

真砂子はその名前を初めて聞いた。それが例のピアニストのことを指しているのはすぐにわかった。

「あいつは今も昔も自分のことはいつさい話さない。だから長崎を離れている時のことは、まったく知らない。何処で何をしていたのか、検討もつかない。ただ俺の知っている範囲で言えば、彼女とは日本に湯治で訪れている時に知り合っただけ。彼女は、正真正銘の天才だった、みたいだ。クラシックの演奏かって、今の時代はコンクールに優勝してキャリアを開始する、という方法しかないのが現状だけど、彼女はその波に乗り遅れた。年齢制限に引っかかったんだ。」

どうも、精神のバランスを崩していた時期があったらしい。だから、あいつと通じるところがあったのかなあ。

けれどその遠回りこそが彼女を飛躍的に成長させた。『ピアニストと音楽家と芸術家は違う』、という言葉があるけれど、彼女はピアリを弾くだけの専門馬鹿にはならず、自らの器を大きく広げた。

そして得たものをあいつに惜しげもなく注いだ。美荘さんも・・・受け取るだけの素直さ、素質があったんだろうね。残念ながら、極短期間ではあったけど・・・あの劇的な変容は、大いなる奇跡だよ。

彼女は国内でデビューした。地方都市の、小さなコンサート・ホール。真砂子さんも聞いたでしょ？ 聴衆のあの熱狂。行く先々でセンセーションを巻き起こした。しかも毎回のようプログラムを変えている。俺は音楽のことをとやかく言える身分じゃないけれど、



ただ者じゃないよね」

彼は振り返る。けれどまだ目を合わさない。

「『三年あれば、あの女性<sup>ひと</sup>は世界を制覇する』あの頃、それがあいつはよくそう言ったものさ。幸福感に満ち溢<sup>あふ</sup>れた、それこそ御来光のような笑顔でね。

あいつはもうあんな封には笑わない。少なくとも、俺は見たことがない。

再会できるのを、すごい楽しみにしていたんだ。それがあの結末だ。残酷にも程がある」

「あの方は……そうとうショックを受けられたんじゃないですか？」

「ショックなんてもんじゃないよ。部屋の隅にうずくまってがたがた震えてるの。それが収まったと思ったら、今度はじっとしたまま動かない。というか……動けないんだ。声をかけてもまったくの無反応で、目は開かれているけれど、何にも映ってはいやしない。そんな状態だった。今度こそ、本当に気が狂うんじゃないか、と思った。幸いに、持ち直してくれたけれど、しばらくは、腑抜け状態だった。そしてある日、

『お世話になりました』って、不意にいなくなっちゃった。そして休暇が終わった」

「伸一さんは、あの方に……何をなさったんですか？」

「……どういう意味？」

「あの方が回復する、きつかけとなる何かをされたんじゃないですか？」

「鋭い……そういうことに、なるのかなあ。

おふくろは病院へ連れて行こうとした。でもあいつも俺も、精神科の物質的なアプローチには好感を持ってない。だから何か別の手段を採れないか、と思ったんだ。そして思いついた。イヴオンヌの演奏を聴かせてみよう、って」

「あの方は反応されたんですね」

「ああ。生気のない顔がわずかに動いて、頬に一筋涙が伝わって・・・」

そこまで言うとは口をつぐみ、また目を逸らす。

「滅多にないことだけど、あいつの核心に迫らざるおえない時、というのがある。そんな時は言葉をなくす。」

あの時もそう。最初は、上手いことやったかなあ、と思ったけど、ぬか喜び。やっぱり素人の手の出せることじゃないね。

翌日、俺は同じことをした。振り向いたあいつと目が合った。そしてあいつは泣き崩れた。だけどその悲しみ方が、尋常じゃないんだ。親しい人の死を悲しむ、そんなレヴェルを遥かに越えた、膨大な量の

？悲しみ？なんだ。なんか、地上のすべての瀬手物が死に絶えていくのを目撃しているような・・・そんな凄惨さなんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「真砂子さん。あいつが抱えているトラウマの量は、質量ともに凄まじいだ。そこをよく理解して欲しい。それこそ俺がほんとうにお願いしたいことなんだよ」

「・・・・・・・・はい」

「で、休み明けには、性格が一変していた。真砂子さんも知ってるでしょ？ あいつは、時として、刺し違える覚悟でかかってくる」と

「・・・・・・・・はい」

「そんな調子」

「伸一さんも、災難でしたね」

「そういつていただけると、ありがたい。もともと、高校の時ほどじゃなかったけど。それでも会えば喧嘩だ。たまったもんじゃない。経済的には寄生階級にすぎない土族がどんな残酷な拷問を働いていたか、さんざん聞かされたよ」

「そんなひどいめにあわされながらも、伸一さんはあの方を見放さなかったんですね」

「……そういうことになるのかなあ？　ところが困ったことに、オレはその結末が気に入ってるんだ。世の悲惨な現実に対する同情がなさ過ぎる人殺しの末裔が、となじられ続けた俺は、ある日ふと思いついたんだ。」

「そうだ。鍼灸師になろう、って」

「突飛な発想ですね」

「そうなんだけど、俺にとっては、天啓といってもいいくらいの閃きだった。土族の末裔として、いい罪滅ぼしになるしね。そんで今の先生に話を聞きに言った。中学の時部活で腰痛めた時、世話になったんだ。その時、例のガンが治癒できる、って話が出て、これだ！　って確信した。」

「あいつに言っただってやったさ。『オレは、この世の悲惨な出来事に遭って、ただ誰かを責めるだけの愚か者にはなりたくない。どんなにわずかだといえども、オレはオレにできる範囲の最善のことをする。焼け石に水を撒くようなものだ、と笑いたければ笑うがいい。そのかわりオレはおまえの戯言には一切つきあわないからな』」

「……それは、一種の絶縁宣言ですよ」

「そう。新学期になって、俺は本当の意味で専門課程に進んだんだ。もう一緒に講座もないし、これで終わった、と思った」

「それでもあの方との関係は続いているのですから、どちらかが折れたわけですね。伸一さんの方が、ですか？」

「……そういうことになるのかなあ」

「伸一さんは、優しいというか寛容というか慈悲深いというか……どうしてそんなにも、あの方を許してさしあげられるんですか？」

「『窮猫傍らに寄らば人殺しの末裔といどもこれを斬らず』、とても言うのかなあ。まあ順を追って話そうか。」

ある日のことだ。俺は偶然道端で、鍼の先生にあった。休診日だったから、茶店に腰を落着けて、いろんな話をした。そしたらあの先生、ふと、多重人格の症例に出会ったときのことを話してくれた。彼女が自分にとって？　決定的な患者？　となった、っていうんだ」

「多重人格、ですか」

「そう。まったく歯が立たなかった、っていうんだ。とにかく邪気が溜まっていて、焼け石に水どころか、焼け野原に水、状態。先生は気功師でもあり、気の流れが見えるんだけど、実は目に見えない層があつて　次元が違う、と言つてもいいらしい　そこに逃げ込んだり潜んだり、神出鬼没な動きをして、今までの経験がまったく役に立たなかった、って。

ところが、クライエントはとっても喜んでくれたんだ。ある時は八歳くらいの子が現れて、お姉ちゃんね、あなたの鍼がとっても気に入っていて、こうしてリラックスしてられる時間が、今人生で一番幸せを感じていられる時間なんだって。ぼくに、とっても感謝していることを忘れずに伝えてくれて、言うんだよ。

先生は、できることなら何でもしてあげたい、と思っているのに、まったくの無力でいる。それでいて、こんなにも感謝してくれる。

あんなに辛い経験をしたことはなかった、って」

「それで、その方は結局どうなったんでしょうか？」

「自殺した。というか、？他殺？だろうね。別の人格による」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それが大きな転機となつて、俺の先生は心理療法とか、他の分野も勉強するようになった。そして、若い人を育てなきゃ、とも思つたつて。まあ、そのお陰で、俺が今こうしていられるわけだ。

俺はその時、ふっとひらめいたことがある」

「・・・・・・美莊美禰子」

「そう。あの美莊殿に、頭を下げてご教授を願うのが、俺のとるべき最善手だという、？怖ろしい？アイデアを思い浮かべたんだ。なにせその手のことに関しちゃ、生きた教科書だからね」

「その手を打たれるのには、相当抵抗があつたはずですが」

「そう。でも正に一番選びたくない手を選ばなければならい状況だ、というのは理解していた。

俺には特技があつて、あいつが半径25メートル以内に近づくと、

気配を感じられる。ある時力フエで、あいつが背後から見つめているのを感じた。以前は、来るな！、と強い防御の波動を発して寄せつけなかった。あいつも俺の気を感じられるらしい。

あいつは俺の前に座り、じっと見つめる。非難するのでもなく、許しを請うのでもなく。ややあつて俺は切り出した。この前は言い過ぎた。お前が望むなら、関係を修復したい。だが顔を合わせば言い争うようなことは一切望まない、って。そして俺の先生の話をした。俺はこの道で、できるかぎり最高の施術がしたい。もし可能ならば、精神病理学について教えてくれないか。俺はお前が体験してきた苦しみには敬意を払っている、って、頭をさげた。

その時のあいつの答えがいいよ。いつもと違うモードで、言うんだ。

『かしこまりました』、って」

「かしこまれちゃったんですか」

「そう。そうしてアレクサンダー大王並の、スパルタ教育が始まった」

「それはそれは・・・」

「厳しすぎる、ってクレームつけたときの、あいつのセリフがいい。『伸一君の？本気？って、その程度？』

もうやるしかないでしょう」

「美禰子さんは、いい教師でしたか？」

「ああ、俺が学ぶにはね」

「深層心理学って興味あるんですけど、伸一さんも美禰子さんも、There is nothing more dangerous than a little knowledge.」（ちよつとの知識ほど危険なものはない。生兵法は怪我のもと）とか言っちゃって、ちつとも教えて下さないじゃないですか」

「うん。それは本当のことだからね。じゃあちよつとだけ話そうか。ケーススタディってやつだけど、ある中高年の男性が毎晩のように同じ夢を見る。大きな洋館が、大爆発してぶっ飛ぶんだ。それが怖

ろしくて怖ろしくて、日常生活がまともにおくれなくなった。ところがカウンセラーは面白いことを言う。

『夢の中で死んだって、ほんとうに死ぬわけじゃないんですから、思い切ってその屋敷に近づいて、中を覗いてみてはいかがですか？』

患者は怖ろしかったけど、やってみるんだね。何回かトライして、ついに屋敷についてドアを開けたんだ。すると中には雄ライオンが今にも襲いかかりそうに吠え猛っていて、恐怖のあまり眼が覚めた。するとまた、カウンセラーの言うことがいい。

『ライオンに喰われるなんて、めったにできない体験ですよ。夢の中なんですから、どんな気分がするか、一度食べられてみてはいかがですか？』

患者は意を決してやってみた。すると、屋敷の中にはライオンがいない。そして奥の部屋のドアを開けると、今度は兵士が立っていた。

その時、封印されていた記憶が開け放たれた。彼は第二次世界大戦に兵士として参戦した。そこは地獄だった。助けを求める瀕死の戦友を置き去りにして、行進しなければならなかった。戦後、彼はあまりに辛い戦地の記憶をすべて消し去った。戦友とも連絡はとらなかった。幸いに、混乱期は生きるのに精一杯だった。だが長い時を経て、無意識の中の運命の導き手は尋ねてきたんだ、そのままでもいいの？ って。

彼はかつての仲間や遺族と、連絡をとることにした。そして彼らが癒やされていない傷を抱えていて、支えあえる仲間を求めていることに気づいた。そして彼はネットワークを組織し、あの戦争残したものの、その意味を語り合う機会をつくり、みんなとの交流を深めていったんだ」

「面白い物語ですね」

「病いは一般にネガティブなもの、と信じられているけど、それはその人の世界観や人生観、そして生き方の変換を迫り、より？ ほんとうの自分？ になるためのきっかけを与えてくれる。そういう側面

もある。そういうことを言い出したのはユングだけど、そんなの学  
び出したらきりがない」

「そうでしょうね」

「話を戻そう。再会して三年目となって、オレはひどいミスをした。  
美荘殿に、鍼の施術をさせてもらってもいいですか、とお願いしち  
やっただ」

「それがどうして大きなミスなんでしょうか」

「あいつが？ 尖端恐怖症？ なの、すっかり忘れてた」

「尖端恐怖症、って」

「いや、失礼。精神病理学で言う恐怖症ではない。ただあいつはも  
のすごく刃物を嫌うんだ」

「それはわかります。あの人は、わたしが包丁握っているところを  
見るのさえ、嫌がる方ですから。でも、なんでそんなに怒<sup>いか</sup>られたん  
ですか？」

「それはわからない。ただ・・・いきなりモードが変わったんだ。  
極端な比喻を用いれば、まるで交代人格と入れ替わったようにね」

「その状態は、なんとなく想像できます」

「俺の言い方も悪かったんだと思う。タイミングも。でもねえ、そ  
れにしてもだよ。」

『そんなこと言うなら、わたしはあなたを殺すかもしれない』、あ  
の方に、そうおっしゃられてしまいましたから」

「その状態は・・・まったく想像できません」

「もちろんその場で謝った。それでも足りないと思ったから、後日  
もう一度、こころを込めて謝罪した。けれど一言もしゃべってくれ  
ない。あなたを殺すかもしれない、と言った、あの時の眼、そのま  
まなんだよね。」

俺はユングにピストルを手渡した、女性患者のエピソードを思い  
出した。その人もひどいトラウマを体験し、精神病に陥って、友人  
や家族や治療者から、次々と見放られてきて、もうこれ以上は耐え  
られない、というところまで追い詰められていた。だから、セラピ

「の間、ずっと懷に拳銃を忍ばせて、

『あなたにまで見放されることがあったら、わたしは、あなたをこれで撃ち殺そうと思っていました』

もし付き合っていたのがこの患者なら、俺はあっさり撃ち殺されていただろうね。

で、あいつとは連絡が途絶えた。もちろん家にも寄りつかない。まったく打つ手がなかった。これは……ほんとに終わったかな、って、思った」

「それでもいまだにつき合いがあるということは、結局、あの方は許してくださったわけですね」

「たぶん……」

「変な言い方ですね。どういう経緯で、仲直りしたんですか」

「この件に関しては、俺は君に感謝した方がいいのかもしれない」  
「おっしゃる意味が分かりませんが」

「あの時、俺はあいつに、本を一冊貸していた。それを返される時が、本当の最後かな、って、思ってた」

「！？……まさか、あの時ですか」

「そう、あの時でございます」

「美禰子さん……すごいにこやかでしたよ」

「そう。まるで何事もなかったかのように」

「伸一さん……すごい動揺していましたね」

「俺はこれでも、何をどう言おうか、何十回もシ

ュミレーションしてたんだ。それが……まったく、どういうタイミングで現れれば気が済むんだろうねえ、あのお方は」

「わたし……あの時始めて、美禰子さんと出逢ったんですけど」

「あいつだってそうだよ」

「わからない。あの方の心境に、どんな変化が起こったんですか」

「そういう女性心理は、こちらがお伺いしたいんですけど」

どっかで聞いたことのあるような科白<sup>セリフ</sup>だけど、

「その後は、」



「まるで何事もなかったかのように、にこやかに、話しかけてきてくださいましたけど」

「以前と同じように？」

「いや、キミのことばかり聞きたがった。俺はしばらく、どう対応していいか、わからなかった」

「……深層心理学のお勉強は、どうなったんです？」

「そのまま終息した。もっとも、すでに消化しきれない量を詰め込まされていたから、丁度よかったのかもしれない。下地は十分にできたと思う。後々必要な分は、自分で学んでいけばいいし。それに、あいつは膨大な量のメモを残して置いてくれたから。読むべき本、その要約、読むべきページ、感想、意見、などなど」

「それはちよつと、尋常じゃないですね」

「尋常じゃないねえ。でもあいつの一体どこが尋常なんだい？」

「……鍼を打つ、って話は、どうになりましたか？」

「奇跡が起こりました。なんと、美莊殿自ら切り出されまして、ご許可をいただきました」

「美禰子さん。どんな具合でした？」

「身体の芯の方に、そうとうな邪気が溜まっていた」

「それは施術された後のお見立てですか？ それとも、それに気づいていたから鍼を打とうとされたんですか？」

「真砂子さん……鋭いね」

「気づていらしたんですね。それって、すごいんじゃないですか」

「いやいや。あれだけのトラウマイックな状況を生き抜いてきたんだ。無傷でいられるわけない。今は様々な？武器？を身につけたから、マインドを守っていられる。ということは、邪気は身体の方を攻撃するだろう。簡単な予測さ。」

それともうひとつ。あいつさあ、人を腹立たせて、煽あおつて、我慢の限界を試すような、ところあるじゃない。あれが癪さかに触つててねえ。口ではかなわないだろ。かといって、はっ倒すわけにもいかない。ところが、ある時とってもいいアイデアが思い浮かんだんだ」

「どうされたんです？」

「押し倒して、バックをとって、キツく指圧してやったんだ」

「……で、伸一さんは、もちろん簡単にはお許しにならなかったんでよね」

「当然。日頃の恨みを、思う存分晴らさせていただきました。あのヤロウ、わたしが悪うございました。もうしません、許してください、って、ずっとわめき続けたから」

「でも美禰子さんのそういう姿……一度は見てみたい気がします」

「でしょ？ そう思うでしょ？ ただ、真面目な話をすれば、内臓がすごい凝り固まっているの。あれじゃあそのうち身体を壊す、そう思った。」

それにあいつはねえ、いつでも緊張してて、スイッチがなかなかOFFにならないんだ。だからかなりの不眠症だった」

「でも今は、治癒されたか、著しく回復されたんですね。伸一さんのおかげで」

「そう願いたいもんだね」

「で、どんな感じでしたか？ 鍼を打たれた感想は」

「まったく歯が立たなかった。正に、焼け野原に水、という感じ」

「それほどひどい状態なんですか、美禰子さんは」

「俺の腕が未熟だ、というのもある。俺達はステンレス鍼で習うんだよね、扱い易いという理由で。でもそんなじゃ通用しない。すぐに本式の銀の鍼に変えたよ。無謀かなあ、とも思っただけ。こっちが上達しなけりゃ、とても相手にしてもらえなかった。もう必死になって勉強させていただきました」

「美禰子さんは、どういう反応をされました？」

「最初こそひどく抵抗があったけど、満足していただけたみたいですよ」

「どれくらいの頻度で施術されました？」

「週一。二回打った週もあった。俺が卒業するまで、続いた」

「完治したんですか？」

「あいつが止める、って言ったんだ。そう言われちゃ、どうする」とも出来ないよ」

「あの方は……きつと喜んでいたと思います」

「そうね。あの包丁を握れない美莊殿が、お礼に料理を作ります、とおっしゃってくださいましたから」

「……何を作られたんです？」

「ポトフ。皮を剥かない人参とジャガイモが丸ごと入った、とっても美味しそうな、ポトフ」

「それじゃあ、お世辞が上手くなるじゃないですか」

「まったくその通りで」

「で、二回目は？」

「カレーライス」

「やはり、野趣あふれる、豪快な？」

「いや、そこは戦略を練りました。シェフ、お手伝いしてもよろしいでしょうか？ と下手に出て、持ってきた、食事前のナイフで切ってもよろしいでしょうか？ と聞いてみる。だめだ、と言うからファーストフードなんかでついてくる、薄っぺらいプラスチックの小さなナイフを取りだして、これでならよろしいですか？ と、渋々OKをもらいましたから」

実はポトフもカレーも真砂子が教えた。珍しくあの女性<sup>ひと</sup>が、教えて、と言ってきたのだ。もっとも、人参も馬鈴薯も皮を剥くよう教えたのだけだ。

真砂子が教えたのは、この二品だけだった。

「その後は、美禰子さん……何を作って下さったんですか？」

「いや。わたくしが料理を教える羽目となりました」

その方が、あの女性<sup>ひと</sup>は満足したにちがいない。

「伸一さんって、料理もお出来になるんですか？」

「出来る、ってほどじゃないけど、一応は仕込まれた」

「いいじゃないですか。けっこう楽しそうに過ごされたように見え

ますけど」

「そうかもしれない。ただあの頃は、とにかく鍼が打ちたくて打ちたくてしょうがなかった」

「そうでしょうね」

「実は、この頃になって、俺はようやくあいつのことが理解できるようになった。臍気ながら、やっと全体像が見えてきた。長所も短所も、いいところも悪いところも、ようやくにね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「真砂子さん」

「はい？・・・・・・・・」

「今日は君にお願いしたいことがある。聞いてくれるかなあ」

「言いもしないうちから、聞いてくれ、ですか」

「俺もあいつにそういう口の聞き方をされたことが、一度あった」

「わかりました。お聞きしましょう」

「もつともオレは？聞かなかった？んだけどね」

えっ？！・・・・・・・・

「あいつの状態は君が想像しているよりはるかに悪い。だから、あいつの弱さをもつと理解して、感じて、思いやってほしいんだ。あんな環境で育ったんだ。あいつにとって、誰かと関係を作るのが、どんなに困難なことか・・・・」

実はね、長崎（なガサキ）に戻ってきてしばらくの間、あいつはほとんど一人で外に出れないくらいだった。だからいつも俺の袖をぎゅっと掴んでた。人が怖く怖くて仕方なかったんだろうね」

「そんな！・・・・それじゃほとんど、生きていけない状態じゃないですか」

「そう。俺も言ったさ。そんなんじゃ生きていけないだろ、って。そんな時のあいつの答えがいいよ。」

『ご心配なく。くたばるのは私ひとりですから。伸一君と無理心中する気は、到底（到底）ございません』、だとさ。

だって真砂子さん。俺ら以外に、あいつに？友だち？、っている

？ 知り合い、と呼べる人だつて、わずかだろ。当然のごとく係累もゼロ。それがどういふことかわかる？

改めて考えてみてよ。精神病を引き起こす程の衝撃が、どれほど激しいものか、それが思い返される時、どんなに強烈な怖れを引き起こすのか。おれらにはあいつが体験した？ 本当の辛さ？、というものはわからない。でも察することはできるでしょ。もつと感じてみて欲しい。だからお願いしてるんだ。

美莊さんと親密な関係を作つて欲しい、つて。

君は君でどうしたらいいかわからないんだろうけど、君から近づいていかなきゃ、関係は進展しないんだよ」

その指摘は、今の真砂子には刺激が少々強すぎた。

「泣き言を言える義理じゃないですけど、わたしは、どうしていいかわからなくて・・・それで今日、お会いしたいと思つたんです」

「Je comprends que c'est difficile d'être sympathique ? elle de temps en temps . Mais . . . essayez un peu . Oui , un peu plus . (ときどきあの女性に共感的であるのが難しいこともあるでしょう。けれど、もう少し共感的であるように試みていただきたいのです。ちよつとだけでいいのです)」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それにねえ、君が思っているほど、俺らは仲良くはない」

「おつしやる意味がわかりません」

「確かに、俺達の関係つていふのは濃密だよね。はつり言つて家族を抜かせば、オレの人生の95パーセントをあいつが占めている、といつても過言じゃない。でも、感情的な繋がりは、ないんだ」

「？ ない？ つて！」

「？ ない？ はさすがに言い過ぎだね。でも、とっても？ 希薄？ だよ」「どういふ意味でしょうか？」

「昔も今も、あいつは俺にずっとところを閉ざしたまま。なんか、絶対に人に馴れない野生動物に相對しているような感じ」

真砂子は、ようやく彼の言わんとしている意味が飲み込めた。

「今年の春からは、君同様オレもあいつとはほとんど会っていない。でも一人で歩いていられるんから、あいつも進歩したんだろうね」

「・・・美禰子さんは、どういうおつもりなんでしょう？」

「あくまで俺の推測だけど、長崎を離れようとしているんじゃない？ 感情的な繋がりが無い今のままなら、キミと別れ易いでしょう？」

「！？・・・」

「だから捕まえるなら今のうちだよ。余計なお世話かもしれないけど。というか、そうお願いしたい。君は約束してくれたよね」

「・・・はい」

「俺にはできなかったことなんだから」

「なぜ、そんなことをおっしゃるんですか」

「まずはあったことから話そうか。卒業旅行に行くちょっと前のことだけど。さっきゲーテの話したでしょ。あれは『天才達の通信簿』という本に載っている、って言うんだ。いつか読もうと思ってて、読んだんだけど、ゲーテにそんなエピソードはないし、本のどこにも載ってないんだ」

「それはどういうことですか？」

「あいつが記憶違いするなんて考えられない。その気になれば、まるでビデオに録画するくらいに、覚えていられたから。だから、ふたつの可能性が考えられた。ひとつは、美荘さんが自身で創作し、俺をかついだ。もうひとつは、一種の？天啓？が降臨して、あいつの記憶を違え<sup>た</sup>させた。天才と狂人は紙一重、って言うでしょ。ゴッホやシューマンは狂い死んだけど、芸術家なんか特に、狂気をはらんだ精神構造をしている。最上級の褒め言葉で、美荘さんもそんな神々の啓示を受け取ることができる、天才なのかなあ、って思ってる・・・」

俺はすっかり舞い上がっちゃったんだ。だから、あいつが本当の

ことを知ったらどんな反応を示すかなんて、まったく考えられなかった。

俺は言った。ゲートにそんなエピソードはない、って。そんなことはない。あいつは毅然とした態度で言う。ページ数まで覚えている、と。俺は本を渡した。あいつは忙しくページをめくり、

崩れ落ちた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「イヴオンヌが死んだ時と同じ。がたがたと、いつまで震えが止まらない。そして目の焦点が合わない。話しかけたって、耳に届いていやしない。そんな状態。それでも夜更けになって、ようやく落ちて着いた。ようやくにね。そして真顔で言うんだ。正気をとり戻すとあいつ・・・・・・・・俺のほうを向いて、真顔で言うんだ。伸一さん。お願いがあるんですけど、聞いていただけますか、って。

いいよ、と言うと、

『わたしを殺してください。あの深淵には二度と落ちたくない。今度落ちたら、もうはい上がれない。それら死んだ方がましです。お願いします。どうかわたしを殺してください』

俺は、なんてばかなことを言ったんだろうね。

狂気に陥る恐怖、って、おれらにとっては実感の伴わない抽象名詞だけど、あいつにとっては、いつ起こってもおかしくない、現実の可能性なんだ。おれは、あいつの身になって、思いやることが出来なかった。鍼も心理療法も付け焼き刃。正に焼け野原に水だった。旅行から帰ってきて、施術を中断してください、と申し出られたあの圧倒的なトラウマと立ち向かう、？その時？、ではなかったんだね。

俺にとって、美荘さんは・・・・苦いね。痛い、辛いね・・・・俺が直面したくない自身の一番の弱点や欠点を写してくれる鏡、傷口にまぶされた塩。それと同時に、

最良の運命の導き手でもある。

前々から先生に、しっかり勉強してらっしゃい、見込みがあればウチで雇ってあげるから、と言われてたんだけど、試験の時、ほんとびっくりしたらしい。気づかぬうちに、腕を上げてたんだね。先生とは、今はとってもいい関係を作れてる。

俺は、もつと美荘さんに感謝すべきなんだろうね。

俺の担当で一番症状の重い患者さんは、約十年間半身不随を患ってあっちこっちの病院を探し回り、俺の先生に巡り会って、やっと杖をついて歩けるようになった。まだあちらこちら悪いんだけど、尿道が圧迫されていて排出する時に痛むのが、今一番辛い、って言う。週に一度治療する度に、三日間は痛みが引く。でも週二回やると、ペースが速すぎて、他の部分に支障が出る。この人がさあ、毎回、

『ありがとう』、って言うてくれるんだよね。それがさあ、本当にこころのこもった、？ありがとう？、なの。

こころに？しみる？のよ、とっても。

ありがたいよね。ほんと、？有り難い？と思う。俺は言われる度に、こころが洗われる思いがする。それと同時に、

俺は誰かにこんなに感謝の思いを表したことがあるか、と、いつも内省させられる。

たとえば美荘殿に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おれらの関係はもはや発展する余地がない。だが君らは違う。それと、君を見てて思うことがある。君はあいつのこと、本当に好きでしょう。？愛？にも色々な形があるけど、はっきり言って、？愛している？でしょ。その思いがね、あいつの胸の深いところに



届いているのが、俺にはつきり感じられるのよ。

そしてあいつも同じ？想い？でいる。

君は美莊さんに、それほどの劇的な変化をもたらせた。自覚して  
いようと、いまいとね。

君たちなら、きっと深い絆が結べそうな気がするんだ。だからお  
願いしているんだ」

船は岸边へ向かっていた。彼は言うべきことを言い終えたようだった。真砂子は深い感動に打たれていた。それとも、？打ちのめさ  
けていた？と言うべきか。

「伸一さん。伸一さんが美禰子さんに注いできてくださった、思い  
やりや優しさのすべてに、感謝させてください」

「ははっ。キミが感謝することじゃないでしょ。それに、知つての  
通り、オレは優しい感情だけを抱いていたわけじゃない」

「たとえどんな悪感情を抱いたとしても、伸一さんの思いに比べれ  
ば、私の愛情なんて微々たるものです」

「それは逆だ。君の愛情がこの見渡す限りの海だとしたら、俺のは、  
(彼は親指と人差し指でつまみ)こんな、1gほどの重さでしか  
ない」

「1gといえども立派な海です。それに、謙遜するにも程がありま  
す。愛情なくしてどうしてそれほどの献身が可能なんですか」

真砂子は彼に、どうしても、？愛してる？、という言葉を使わせ  
たかった。

「確かにオレがあいつに与えた親切は尋常じゃないかもしれない。  
でもその根底にある感情は、愛情とは、とても言えそうにない」

「ではそれは何なんでしょうか？」

伸一はしばし言い淀む。

「哀惜、というか。悔悟、というか。俺はあいつがおかしくなっ

たことについて、ある種の責任を感じていたのだ」

「おっしゃる意味がわかりません」

「むかしさあ、あいつがあまりにも可哀想だからって、お袋が・・・ウチに引き取ってあげようか、って話が、何度か出たことがある。でも俺が大反対して、おじちゃんになった。

大学生になつて再会した時も驚いたけど、高校生になつて再会した時も、負けず劣らず驚いた。震撼した、と言つてもいい。人が狂った姿、精神が崩壊していく過程を目撃するなんて、気持ちのいいもんじゃない。

時間を戻したかつたるそれが不可能なことで知りつつも。

その一方で、俺はどんどんあいつを憎んでいった。関われば関わるほど、あいつを殺してやりたくなつた。そしてついには手をかけた。

幸いに・・・何かの力が働いて、俺を押しとどめてくれたけど。

そんなあいつも、稀に正気でいられる時間があつた。ある時、

助けて下さい、って言われたことがある。

藁一本乗せられたが故に折れた背骨、その激痛に耐えながら、必死でうつたえる。すがりついているのが正に、その最後の藁一本を乗せた当人だと知らないでね。

おふくろが捨て猫一匹引き取るのを、なんであんなにも反対したんだろう。俺は心底後悔した。俺には猫の気持ちがわからなかった。その痛みに気づいてやることができなかった」

船が棧橋につく。岸に戻る時間だ。真砂子はもはや言つべき言葉が見つからない。

「あれっ。何だったっけ？　そもその君の質問」

真砂子はそんな問いには、すでに興味を失っていた。

「美禰子さんと出逢って、一番よかったと思うこと、です」

「わからない。なんかひっかかっているんだけど、思い浮かべられない」

「じゃあ質問を変えます。伸一さんの印象に残っている、一番素敵な美禰子さんの姿、ってなんですか」

「それはあの髪だよ。昔から綺麗だな、と思ってた。夕日を浴びた時なんか、金の絹のように日光を弾くんだった」

その時、気の乗らない返事をしていた彼が、あつ、と叫んだ。

帰り道は送ってもらわなかった。真砂子はまっすぐ部屋へ帰れなかった。このまま誰もいない山奥でも行って、ひっそりきりになって休みたかった。あまり膨大な出来事があり、頭もこころもパンクしそうだった。ひと気のない公園のベンチに腰掛け、ずっと考え事をしていた。なかなか整理はつかないが、核心に近い部分に接近したのだ、と思った。

自分のしたいことははっきりしていた。

あのひとにもっと近づきたい。

真砂子の願いはそれだけだった。ただそれだけだった。

アパートに戻ると電話が鳴った。病院からだった。

真砂子はさつと血の気が引いた。

美禰子が倒れたという。血を吐いて、かなりの量だと。

## 二

「本当に、親類の方とか、誰もいらっしやらないんですか？」  
「はい」

真砂子は説明に困った。経緯を知らない人には、ほとんど異常な答えだろう。

だかかく言う自分も、あの女性と？近い？関係であるとは、けして言えなかった。

「でも、どうなんでしょうか？ 美荘さんの様態は」

「ご安心下さい。しばらくは安静が必要ですが、命に差し障るようなことはありませんから。直ぐによくなると思いますよ」

「そうですか。ありがとうございます」

「ただ・・・前々から痛みを感じていたはずなんですけどねえ。なにか、そんなことを言ってますでしたか？」

「いえ、なにも」

レントゲン写真を見つめながら、主治医は首をひねった。

「ずいぶん我慢強い方ですね」

「はい。とつても、我慢強い人です」

「悩み事とか、何かひどくストレスがたまるようなことに、心当たりはありませんか？」

「いえ。ただ、就職のこととかで、悩んでいたかもしれません」

「ああ、四年生ですか。それは大変ですよねえ」

それなりに納得したのか、医師は後の言葉を継がなかった。

「あの・・・会つても、よろしいでしょうか？」

「はい。どうぞ。ただ、あまり疲れさせないようにお願いします」

「はい」

教えられた番号の部屋を探した。名前を確かめ、ノックをした。返事はなく、真砂子はそつとドアを開けた。

彼女は静かに眠っていた。確かに顔色がよくない。だが医師の言う通り、深刻な様態ではなさそうだ。

枕元のクローゼットの上に、自分宛の手紙があった。折り畳んだレポート用紙に、鍵で重しがされてある。手に取って、真砂子はその特徴的な、華奢で華麗な筆跡をまじまじと見つめた。

親愛なる村田真砂子様、

美禰子さんは病気です。しばらくは、不自由を強いられてしまうようです。申し訳ありませんが、私の部屋の清掃をお願いできないでしょうか。かなり派手にやらかしてしまいました。どうか気持ち悪がらないでください。それと着替えなど、日常の必需品を適当に見つくるって持ってきてくださりますと、とても助かります。よろしく願いますね。

p s .    どうか、櫛くしと鏡をお忘れなく。

美莊    美禰子

枕元へ寄り添い、心持ち青白くやつれた顔をまじまじと見つめた。彼女の胸にかけられた、白い毛布の動きは穏やかだったけど、何をこんなにも苦しまなければならぬのか、と真砂子は胸を痛めた。

彼女のアパートへと寄った。何度か、この部屋の前までは来たことがある。けれど中へ入るのは、これが初めてだった。

小綺麗ではあるが、テレビもなければレンジもない、殺風景な室内だった。もう少し飾りがあってもいいと思うのだけど、必要最低限のものしか置かれていない。それでも流石に、ミニコンポはある。なんでも伸一の所から？盗んできた？そうだが、彼女はこんな環境で、

いったい何を夢見て過ごしてきたというのだろうか？

血に染められた畳を丁寧に清めた。

それから真砂子は毎日彼女を見舞った。入院したというのに、あ

の女性は不思議なくらい上機嫌だった。だが何を言ってもまともに取りあってももらえない。それどころか、あれ食べたいこれ食べたいとただをこね、コーヒーかが欲しいとわめいてみたり・・・相手をするのはひどく骨が折れた。どうかしている、と真砂子は思った。連絡をしたのに、伸一はなかなか見舞いに来てくれなかった。真砂子は彼の到着が待ちわびられた。それほどに手を焼いていたのだ。彼は来た。手に赤い花束をたずさえていた。

蔓珠沙華。  
まんじゅしゃげ

さつと彼女の顔に緊張感が漲る。そして睨ような眼差しで、あの女性<sup>ひと</sup>は言った。

「藪医者様がなんのご用？」

「藪患者殿にプレゼントをお届けに」

「あら、ありがとう。でもどうして菊じゃないの？ そっちの方が似合ってるんじゃない」

「それじゃあ菊が可哀想だ」

「それじゃあ？この子たちに失礼だわ」

「元気そうだね。その分じゃ、見舞いの必要はなさそうだね」

美禰子は黙り込んだ。道端に咲いていたから摘みできた、と彼は花束を渡した。

彼女は瞳を閉じ、匂いをかいだ。

毎日会っているというのに、二人の距離は縮まらなかった。

ある日訪れると、ドアの向こうから、楽しげな笑い声が洩れて<sup>も</sup>いた。他にも来客がいるらしい。ノックをして部屋へ入る。沢木さんと水野さんと、それに伸一がいた。真砂子はその光景に、鈍いショックを覚えた。

伸一も、水野さんも、沢木さんも、初対面の二人と上手く話を合わせていた。相手を受け入れることができ、関心を持って聞く耳があり、その思いも感じられているようだ。自然な流れで適切な距離

を計りながら、友好的な関係を作りあげ、ゲームのような会話を楽しんでいた。相手の最良の持ち札を引き出す面白さ、と言おうか。

真砂子はひとり、この場にとけ込めないでいる？自分？を感じた。みんな引きあげた後も、こころは揺れていた。あの女性ひとは何も言わず、窓の外景色を眺めていた。真砂子は少し離れた椅子に座り、ぼんやりと、曼珠沙華を眺めていた。ラフマニノフのプレリユードメロディの、風のような旋律が舞っていた。

不意に、彼女がくすくす笑いだした。忍ぶように小さく、最初は受け流そうとしたのだが、長く引きずれば、耳に障り出す。

「何がおかしいんですか？」

彼女は、以前はけして見せなかった、ひねた笑顔で振り返ると、  
「だってあなたは、わたしがどこで死んだとしても、すぐに駆けつけて来てくれそうで」

「美禰子さん！」

「そういうのって、うれしいなあ〜って」

「美禰子さん！」

真砂子は語気を荒げたけれど、彼女はその反応リアクションを楽しむかのように、ニヤツ、と笑った。

「そんなに怒らないで。わたし、病気なんだから」

病人だろうが何だろうが、言っていることと悪いことがある。

彼女はまた、窓の外へと顔を向ける。真砂子の怒りは収まらない。  
「わたし、あなたにつれなくされると、とっても辛いのよ」

近づけば、ひらりと身をかわし。距離を置けば、すり寄ってくる。親しげにしているも、けしてこころの内は明かさない。私が？恋？してるのは、そんないたずら好きな妖精だった。

けれど今回ばかりは、引き下がれない。この女性ひとの真相に迫って見たかった。生の心情に触れてみたかった。  
手段は持ちあわせているはずだ。

「美禰子さん。わたし、” Plein soleil ”（『太陽がいつぱい』）見ました」

「Quest-ce diable que tu veux  
savoir de moi !（一体わたしの何が知りたい!）」

？<sup>おび</sup>怯えた？、という言葉では、とても事実を言い表しきれない。

真砂子は瞬時に自身の行動を後悔した。人が？恐怖？に圧倒される様を、始めて目撃した。防御の手段をすべて突き崩された姿・・それは尋常でない震え方だった。その眼はじつと自分を見つめているが、意識はまるで凍りついたように時を刻んでいない。

彼女が言葉を発するまでの数分の時を、真砂子は無限のように感じていた。

「あなたは、わたしをどうしたいの？」

彼女の瞳から、みるみるうちに涙がこぼれ落ちる。真砂子は何も言うことができない。彼女は吐き捨てるように言った。

「好きにきなさいよ。いいから好きにして。どうなりと、あなたの望む通りに」

### 三

彼女の病室のドアを開けると、彼女が？刀？を構えていた。

「いいでしょ？ これ」

彼女は無邪気に見せびらかす。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

勿論それは錯覚で、目映い反射光の中、それが本物に見えたのだが、それは妙に似合っていた。

「どうなさったんですか？」



「誕生日プレゼント」

「伸一さん、からですか」

「そう。『そういえばおまえ誕生日じゃない？』、とか言うの。そんなの、もうとつくに過ぎているのにな。」

「何がいい、っていうから、ねだってみたの。もつとまともなものを注文しろ、とか言われたけど。」

「愛着のある品なのかと思ったら、押入にしまい込んで忘れてた、ってあっさり譲ってくれた」

「伸一さん、って、剣道をやられてたんですか？」

「あら！？ 真砂子ちゃん知らなかったの。彼は八歳の時から十年連続で全日本のチャンピオンになった人よ。古武道の型演武で、海外から招聘されたこともある」

「まったく知らない。」

真砂子はその意味も価値も計りかねた。

「でもなぜか止めちやつたの。『精一無雑、必死三昧。殆ど飢鷹の鳥を搏し、餒虎の獸を攫むが如し』、とかなんとか。あんなに一生懸命打ち込んでいたのにね」

「穏やかな笑みを湛えながら、彼女は木刀を振り下ろした。その眼差しに、」

自身の最良の思い出を写しているかのように。

#### 四

退院してからというもの、彼女は疎ましくくらいにまとわりついてくる。笑顔ではいるものの、眼が笑っていない。話には聞いていたけれど、人の感情を逆撫では我慢の限界を試すようで、少々気味が悪い。悪意は感じられないが、子猫のように無邪気でもない。

人の感情を掬<sup>く</sup>することも、関係を深める意図なども、まったくくない。真砂子はかわせすことができず、対処に困っていた。

年が押し詰まる頃、彼女の就職先が決まり、結局長崎に残ってくれることになったというのに、喜びは半減だった。

「いいなあ、みんなあ。卒業旅行だのなんのつてはしゃいでる。うらやましい」

この女性<sup>ひと</sup>の学生生活も、終わろうとしていた。

「真砂子ちゃん。旅行いこうか。ヨーロッパがいいな」

「ダメです。わたし、そんな余裕はありません」

「友達がいのない人ねえ。せつかく行く気になったんだから、一緒に行つてちょうだいな」

と彼女は腕に抱きついてくる。

これが最近のこの女性<sup>ひと</sup>なのだ。

軽いタッチではあるが、ただでは済ませない、そんな強い思いをにじ滲<sup>にじ</sup>ませている。

「・・・スキーぐらいでしたら、どうにかな」

「あつ！ いいね。スキー行こうか。スキー」

（・なるかもしれませんが、私だつていろいろと都合が・・・

・）

真砂子は言いかけた続き<sup>セリフ</sup>を飲み込んだ。

「じゃあ、決定。いいわね。冬休みにでも。あつ！ 年明けしちゃうか。場所はどこにする？ わたしが決めちゃっていい？」

断りきれないのはわかっていたが、こつも一方的に事を運ばれるのは悔しい気がする。

「美禰子さん。それなら、ついでにわたしの実家に寄りませんか？」

「えっ！ いいの？ うれしい。行く！ 絶対行く！」

空港に出迎えに来てくれた高志を見ると、彼女は、

「うわっ！？ ほんとに弟がいる」

と思ひ切り驚いてみせる。さすがの弟も一瞬咄然としたようだが、

その？挨拶？はいたく気に入ったようで、すぐに？反撃？を開始した。

「まったく、姉貴の？ともだち？、っていうから、どんな方かとご想像しておりましたが、期待以上の素晴らしいキャラクターで安心いたしました」

「美荘でございます。お褒めいただき、光栄ですわ」

「村田高志でございます。普段何かとわが拙姉の世話をしていただいているお客様に、褒め言葉はこころにあること、ないこと、いろいろ取りそろえておりますので、どうぞご気軽にご用命下さいませ」  
「これはこれはご丁寧なおもてなしを。こちらこそ、お上品な気だてであられる貴公の姉君には、こちらもお世話になっておりますので、お礼申しあげますわ」

「あつ！ それ猫かぶってんですよ。どうです、こいつ。化けるのが上手くなりましたか？」

「ええ。そりやもう、すっかり板に付いちゃって」

二人は同時にこちらを振り向いた。

荷物を？ポーター？に預けて、二人で街に出た。彼女は一泊しかしてくれない。東京は初めてだというけれど、興味がないらしく、買い物済ませて早々と家へ戻った。

夕食の支度は賑やかだった。母は久しぶりに教師になった。手先の器用な人ではあるのだけど、慣れていないせいか、ゆったりとしたペース餃子の具を包むのだが、勝手が違うらしく、どれも不細工な出来映えだった。作業が終わると彼女はそのひとつを掌に乗せて、至極満足げに、

「うーん。完璧だわ」

と見惚れていた。

なにが完璧よ、と母はあきれ、姉貴より下手な人間は初めて見た、と高志は言っが、彼女はいかにも楽しげで、にこにこ笑っていた。

真砂子も昔、餃子を包むのが苦手で、

『これが母の作ったの。で、これが姉貴の。作風の違いがよく現れています』

弟によく揶揄やゆされたものだった。だからムキになって練習した。そしてとうとう母と見分けがつかなくなった。真砂子は得意げに、二つの皿を弟に突き出し、言った。

『どう？ もう区別がつかないでしょう？』

『わかるよ。それくらい』

と弟は、澄ましたもので、ふん、と言うように餃子を見ると、  
『不味い方が姉貴のだろう』

久しぶりに、食卓の席がすべてうまった。高志は野球の話をして彼女を面白がらせていた。この夜の彼女は特に聞き上手だった。温かい関心と共感的な眼差しが、相手の話を刺激するのが、母までもが請われるままに、真砂子の昔話を語り始めた。

君の分までしっかりと滑ってくるからね、と美禰子は高志を悔しからせ、二人は出発した。

スキーには思い出がある。

小学生の時に一度、家族総出で出掛けたことがある。真新しいウエアーを買って、新聞に載る降雪量情報に一喜一憂し、日に何度もカレンダーを見た。初めて見る特急の乗車券が、何かとても貴重なもののように思えた。

汽車の旅は快適で、トンネルをくぐる度に耳が痛くなるのも面白く、灰色の空に小雪の舞う千曲川沿いの雪景色は、しっかりと胸に焼きつけられた。リフトの揺れるおもしろさ。晴れた日のゲレンデのまばゆさ。ナイターの、ちよっぴり大人になった気分。何もかもが目新しく、楽しかった。

民宿に泊まり、狸鍋を食べながら新年を迎えた。また来ようね、

と言い合ったが、叶わなかった。

行きの車中この話をすると、彼女は、今回の旅、そこにすればよかったかなあ、と言った。

ゲレンデはスノウボーダーが割合が目立っていた。スキーに関して、真砂子は初級者の域を出なかったが、彼女は颯爽さつそうと滑り抜けていった。

coffee break、雪山が背景の窓際の席へ座る。帽子をぬぐと、ほどけた髪が日の光を弾く。？金の絹？とはよく言ったものだ。

「美禰子さん、スキーお上手ですね」

「そうでもないわ」

「運動神経、いい方ですよ」

「そうかしら。たまには身体も動かさないとね」

「美禰子さんって、本気になれば、ほんと何でもできそうで」

「それは、買いかぶりというものじゃない？」

「音楽、文学、映画、芸術全般に造詣が深く、マルチリンガルで、理論物理学もこなせば深層心理学にも精通している」

彼女の頬が、ぱつと赤く染まる。そして何か言おうとするのだが、真砂子はその機先を制した。

「初めてお会いした時、わたし・・・世の中に？本当の女性？がいるのなら、この人だ、って思いました。神秘的なものを感じました。勿論？女神？だなんて思っています。ただ、無限の優しさ、思いやり、慈しみ、愛・・・そんな神秘への扉を開いてくれるように、思えた。

わたしにとっては、世界で一番大切な人なんです」

最初からこの旅が、ただで済まされるわけがない、と思っていた。そして真砂子も、ただで済ますつもりなど、毛頭もなかった。

シャワーを浴びて冷えた身体を温める。先に上がっていた美禰子  
はいつものように、熱心に髪を梳すいていた。

「美禰子さんの髪って、ほんときれい」

「『ぶすだどみんなから言われるの。あの子は目が綺麗だ、とか、  
髪が綺麗だ、って』」

二人は声を立てて笑った。それは彼女のお気に入りの劇の一節で、  
前にも引用したことがある。

「うん。でもそれ、半分くらいは本当なんだなあ。昔よく言われた  
んだ」

残念ながら、どうやらそれは本当らしい。だがもうそんなことは、  
どうでもいい。

この女性ひとを見てると、真砂子はプシケーの神話を思い出す。野を  
歩けばその美しさに、花々は自らを恥じらって枯れ、人々のそのあ  
まりの賞賛に、女神アフロディテが嫉妬した。という彼女は、プ  
シケー（魂、不死、蝶）の名前が示すように、毛虫やさなぎという  
変態を経るため、？醜美？の概念がまったく欠けていた。本当に美  
しい人というのは、自らを美しいとは思わず、？無心？なのだろう。  
そして真砂子は今夜、

その魂プシケーをこそ捕らえてみたいのだ。

l a n u i t . . . l ' a u b e d u n o u v e  
a u m i l l ? n i u m

（あの夜・・・新千年紀の黎明）

夕食はミレニウムの演出もあって、素晴らしいものだった。部屋  
に帰ると、彼女はまた鏡に向かう。左手で髪を掻き上げたまま何や  
ら覗のぞいている。今回は、彼女よりもその手首に光るクリスタルが、

真砂子の目を惹いた。

彼女がこちらを振り向く。真砂子の視線の意味に気づくと、歩み寄り、左手をそつと差し出した。

真砂子はブレスレットを外そうとして、はつと手を止めた。そこには、

無数の傷跡が刻まれていた。

二本目のワインも飲み干してしまった。とても？素面？では語り合えそうもない。小さな円卓に相對して座っているのだが、彼女は口を開くどころか、殆どな目を合わすことすらできずにいた。そしてさらにルームサービスを頼もうとしたが、さすがにそれは真砂子が止めた。真砂子は、彼女が語り始めるまで、いつまでも待つつもりだった。

彼女は立ち上がり、鞆を開けた。振り向いた彼女の首には、七色の天使達が舞っていた。

「真砂子ちゃん。あなたは どうして長崎へ来たの？」

「はい？・・・」

「何故わたしと巡り逢おうとしたの？」

一瞬泣き出しそうな、哀惜に堪えない表情を見せると、テーブルを通り越し、二つ並んでいるベットの間に、真砂子に背を向けて腰掛けた。

「幼い頃、両親を亡くした。それから親戚のところを転々とした。施設に入れられたこともある。どこへ行っても歓迎されなかった。というか・・・ひどく粗末に扱われた。でもわたしは？感じる？ことができなかった。そしてほとんど、話すことができなかった。その頃既に、わたしはおかしくなっていたんでしょね。だからどこへいってもイジメられた。きつと格好のターゲットだったと思う」

真砂子も席を立ち、再び彼女と相對して、腰掛ける。

「でも、長崎にいられる時はよかった。いつも伸一君が守ってくれたから。おじさんも、おばさんも・・・笹岡家の人たちはわたしにとっても優しくしてれた。なぜかはわからない。

瞼に焼き付いている映像がある。あの庭で、伸一君が一心に木刀を振り降ろしている。

わたしのことなんか、見向きもしないでね。

中学に上がった頃から、家でも学校でも、虐待がエスカレートしていった。わたしはどんどんおかしくなっていた。

十六の時、初めて手首を切った。その時の周囲の慌てよう、恐怖におののく姿といったら・・・大した見物だった。やっぱり血を見る、って怖いことなのね。私は、力の歪んだ使い方を覚えたの。

イヴオンヌに出逢ったのはその頃。知らない言葉で道を聞かれ、あたふたしたら、私の傷に気づいてくれた。そして両手で私の手首を握りしめ、

『自分を傷つけてはいけない。自分を愛しなさい。もっと優しくしてあげなさい』

あの時、フランス語なんてまったくわからなかったけど、あの女性<sup>と</sup>は、確かにそう言った。そして自分がつけていたこのブレスレットを、この手首にはめてくれた。

温かい、慈悲深い眼だった。わたしは、あんな眼差しで誰かに見守られたことなんて、なかった。この女性<sup>ひと</sup>の側にいたいと思った。一ヶ月に満たない短い間だったが、寄り添いたいだけ寄り添わせてくれた。

けれど彼女と別れて、わたしはすぐにブレスレットを外してしまった。

長崎に戻った時は、わたしは堕ちるところまで堕ちていた。言葉



のナイフを振りかざし、誰彼ともなく斬りつけていった。

一番傷つけたくない人にさえ……

私はますますおかしくなっていた。幻聴や幻覚なんて日常茶飯事。意識が飛んで、記憶が消える時間さえあった。

わたし、彼の前でリストカットしたことがある。なぜそんなことをしたのかわからない。前後の記憶もない。彼に頬を叩かれ、正氣に戻った。

（目を醒ませよ。頼むから目を醒ましてくれ）

わたしの両頬に手を当てて、そんな思いで見つめてくれた。

あの人は、もう二度とそんな眼差しで、わたしを見つめてはくれない。

真砂子ちゃん、聞いた？……わたし、彼に殺されかけたことがあるの。人を殺す瞬間って、あんな目をするのね。わたしもこんな目でみんなのことを見てたんだ、って思った。

十七の誕生日を迎えた。お祝いしてあげるから、って、おばさんに招かれた。行ってみると、急用で出かけてて、伸一君がひとり。目があった時、わたしは、

本当に嫌われてるのがわかった。

けれど、彼は料理本片手にケーキを作っていてくれた。私も手伝った。手伝わせてくれた。私は料理なんか作ったことがなく、伸一君もケーキは不慣れみたいで、仕上りは不細工だった。でも、十七本の口ウソクを<sup>こも</sup>点して食べたなら、とってもおいしいの。

それから映画を観たんだ。

” Plein Soleil ” . . . . .

衝撃だった。De lon の、Tom の Marge を見つめる眼、人生にただひとりの愛だけを求めている。それは彼が経験しなければならなかった辛苦を償ってあまりあるものだから。私には、彼の思いが手に取るようにわかった。彼が生き抜くために忍ばなければならなかった、そのすべてがわかるような気がした。

そこに描かれていたのは、私自身だったから。

映画が終わると、隣で伸一君も泣いていた。ああ、この人は、わかつてくれた、今ふたりのこころの中に、同じ感動が流れている、そう思った。

帰り道、夕日に染まった川縁に、曼珠沙華が咲いていた。

倒れるようにしゃがみ込み、泣いた。だって懸命に咲いている。

踏みつけられても踏みつけられても、生まれ落ちた場所で、ただひたすら生きている。誰のためでなく、ただそつと、命そのままに息づいている。その時思った。

映画監督になろう、って . . . . .

だけどわたしはそこでミスを犯した。その思いを彼に漏らしてしまった。

わたし映画監督になりたい。あんな本当の愛を描いてみたい。私は言った。彼は怒ったような目をして？本当の愛？って、聞く。私

はその意味が分からなかった。

『愛って言葉は今のおまえに一番似つかわしくない。いったいおまえは誰を愛しているというんだ。誰彼ともなく噛みつきやがって。そもそもおまえに人が愛せるのか。そんなやつがどうして本当の愛を撮れるというんだ』

わたしは自分の思いを言葉で表現することができなかった。言えは言うほど噛み合わなくなっていた。彼は吐き捨てるように言った。

『トムのマルジュへ寄せる思いが本当の愛だって？ どうしてそんな勘違いができるんだい。あいつもただの？人殺し？じゃないか』

わたしはその胸に、？ナイフ？を突き刺してやった！

真砂子は人が殺人者になる瞬間を目撃した。胸元めがけて突き刺されるその？切っ先？を、真砂子は避けることができなかった。だがかわす必要もなく、その矛先は鋭角に逸<sup>そ</sup>らされていた。

こうやって、何度も何度も……ナイフさえあれば、ひと思いにすべてを終わらすことができるのに。どうして？ どうして？と、彼女は激しくベットを切り刻む。

？再演？は激しく彼女を消耗させた。必要な落ち着きを取り戻すには、十分な時間が必要だった。

「あの時わたしは、ひとつの？可能性？を殺した。ただそれだけを望んで生きてきたというのに……未来永劫、叶うことなど、もはやない。

気がつくわたしはイヴオンヌの側にいた。フラッシュのような極短い記憶の断片はあるけれど、どうやって海を渡ることができたのか、わからない。Aide moi. Je deviens folle.（助けて。私は気が狂った）そんな走り書きを送っていたのだという。

彼女はひたすら優しくしてくれた。あふれる程の愛情を注いでくれた。

『Les anges des sept couleurs t'en gardent toujours. (七色の天使達がいつでもあなたを守っている)』

そう言つて、このネックレスを首にかけてくれた。

一年が過ぎようとしていた。彼女は大学へ行くよう勧めてくれた。日本へ戻るのもいい、四年間に、自分の生きる道を見つけなさい、それくらいなら援助してあげられるわ。そう言ってくれた。ありがたかった。けれどその時は、

どんな未来をも思い浮かべることができなかった。

誕生日が来た。私は見直してみた。

” Plein Soleil ” . . . . .

愕然とした。Deleonに、まったく感情移入ができなかった。あまりに印象が違っていたの。あの時気づくことができなかった？ 偽りが、手に取るようにわかってしまった。

この愛？ は？ ほんとう？ ではない、と思った。母親に愛されなかった少年の、歪んだ愛し方なのだと。

それは苦い体験だった。苦過ぎるくらい、苦い . . . .

けれどあのラスト・シーンには、こころを動かされた。あの時と同じように . . . .

わたしは泣いた。涙涸れつくすまで泣きいた。そして思った。映画監督になろう。パリの学校へ行こう。Agnes VardaとJacques Demyが出逢った地へ。けれどその前に、

長崎へ戻ろう。あの人のもとへ帰ろう。そう思った」

ベットに俯伏<sup>うつぶ</sup>して彼女が泣く。引きちぎらんばかりにシーツを掴み、声を抑えて忍び泣く。まるで泣くことさえ許されなかった境遇を、生き延びてきた者のように。

真砂子はその傍<sup>かたわ</sup>らに座った。そして波のように揺らいでいる彼女の髪に、その指先をそつと滑らせた。ずっと梳<sup>と</sup>かし続けてきたその想いを掬<sup>き</sup>するようになり、月明かりのようになめらかなその髪を、思いのままに愛撫した。慰められて、堰<sup>せ</sup>き止められていた感情が溢<sup>あふ</sup>れ出し、美禰子は激しく泣いた。その涙の川に、真砂子の涙の雫<sup>しずく</sup>がこぼれ落ちる。

彼女を強く抱きしめ、言った。

「あなたが好き。たとえ誰を傷つけてきたとしても。あなたが好き。たとえどんな暗闇をさまよってきたとしても。愛してる。ずっと愛してる。」

J e t ' a i m e . J e t ' a i m e t o u j o u r  
s . T o u j o u r s . . . .

## 六

年が明けた。彼女は真砂子の実家へは寄らず、真っ直ぐ長崎へ帰るという。半ば強引に、空港まで見送りに行った。長崎で再会した時、彼女は、あと一年はここにいるんだよね、と呟いた。

卒業式、彼女は借りた袴をつけた。伸一の母が代わりに出席してくれた。真砂子は写真を撮った。ほのかに桃色に芽吹く桜の蕾<sup>つぼみ</sup>の下

で、

彼女は泣いていた。

logue (大団円。もしくは、序章)

新学期、美禰子のいないキャンパス。親友と呼べる人の価値を、真砂子は肌で感じていた。

彼女は感じが変わった。あの華やかなあどけなさが消えた。緊張感はまったく解きほぐされていた。仕事を終わると、彼女は当然のようにアパートに寄ってくれるのだが、もう気安く鏡に見とれることもない。口数も減った。もうからわれこともない。そして彼女は、いつも森厳なる静寂の中にいた。

その日も、真砂子が夕食の後片づけをしている間、彼女は窓際の壁にもたれ、そっと目を閉じていた。真砂子は言った。

「美禰子さん。一緒に暮らしませんか？」

夢から覚めるように、ゆっくりと瞼が開かれ、彼女はかすかに微笑んだ。

彼女は直ぐに越してきた。それからというものの、仕事に出る以外、彼女は昏々と眠り続けた。

真砂子はこの街に残ろう、と思った。この女性の側を離れてはいけなかった。たとえいつか旅立ってゆく人であろうとしても、それまでは、ずっとこの女性の側<sup>ひと</sup>にいたかった。

そんな時だった。伸一にプロポーズされたのは。

図書館の裏の並木で、彼は先に待っていた。真砂子は見慣れた後

る姿を見つけた。西日が眩しくて、手をかざした。

彼は気配を察し、後ろを振り向いた。

何もかも、あの時と同じだった。

いけない、と思ったが、止まれなかった。” La forza del destino” me pousse. (運命の力が私を後押しする)

「好きだ。結婚してくれ」

彼は単刀直入に言った。

「東京なんか帰るな。俺の側にいてくれ」

一生を見据えた覚悟が欲しいと、口を滑らせたのは自分の方だった。今彼は、それに応えてくれる。知り合った二年の日々、私だけを見つめていてくれた。どこにでもいるような、普通の娘なのに・・他の誰でもない、私にだけに特別な価値を与えてくれる。出会った頃はむしろ避けていた。そんな私が、はたしてこの男性に見合うのか。

「きつと幸せにする」

彼の目は、信じる、と言っている。こころの奥底から湧き上がる、津波のような喜びが、彼女の躊躇いの一切を押し流していった。

「・・・愛してる」

Oui. Plain amour . . . si tant

．．．(ええ。愛がいつぱい。こんなにもたくさん)

「愛してる」

si brillant ! (燃えさかるほどの)

「愛してる」

le meilleur (最高の)

le meilleur

le meilleur . . .

私を選んでくれた。その一生を賭けてくれた。選ばれた自分を誇りに思う。約束の言葉を信じたい。この瞬間を待ちわびていたのか。

涙があふれた。

la troisime partie

la fin de

intermezzo

長崎の街は華やかな祭りの夜を迎えた。

美禰子は髪を結った、真砂子は髪を切った。ふたりとも、沢木さんが見立ててくれた浴衣を着た。お互いの腕に精霊船を捧げ持ち、華やかな喧噪を離れ、言葉少なに川面を歩いていった。

たおやかな、彼女の鬢に憂う風情を、真砂子は酔うような思いで見つめていた。巡り逢えたよろこびと、今こうしてその側にいられることのしあわせが、胸に熱くこみ上げてきて、この女性の今宵の姿を、しっかりとここに焼きつけた。

ひと気の途絶えた場所で彼女は立ち止まると、真砂子の方を振り返り、そっと同意を求めた。親友が頷くと、彼女は川縁にしゃがむ。そして巫女のような身姿で、水面に揺らめきながら流れて行く、光の群を見つめていた。

かつては遙かに思えたこの女性の瞳さえ、今はこんなにも身近に感じられる。

真砂子もその隣にしゃがみ込み、浴衣の裾を正した。ふたりは肉親の思い出と哀惜を水に流した。せせらぐ水面にその影を揺らしながら進む、二艘の精霊船。その後を、ふたりはいつまでも見送って



いた。まるで、

小津の姉妹を演ずるように。

## 第四部

—

建て替える前の、古い家の居間に掛けられた小さな柱時計が、コチ、コチ、と時を刻んでいる。それは真砂子の脳裏に浮かぶ幻想だった。ダイニング・テーブルの席に腰掛けたままの彼女の目には、何も写っていない。こころは時のない空間をさまよっていた。目の前には、最後の一行を読み終えられずに指先からこぼれ落ちた、一通の手紙が広げられている。

長崎へ帰らないと。できるだけ早く。今すぐにも。

頭の中で、単調な旋律が繰り返される。<sup>フレーズ</sup>けれど生命の流れは完全にせき止められまま、四肢を動かすことも<sup>あた</sup>能わない。瞼に<sup>まぶた</sup>写るのは、古時計の頭でつかちな六角形の針盤、振り子を左右にゆっくりと揺らし、ぼおーん、ぼおーん、と大きな響きを奏でた。

真砂子は我に返った。見上げると、クォーツの時計が二時を知らせていた。

長崎へ帰らないと。できるだけ早く。今すぐにも。

だがこのままでは帰れない。だが残ったとしても、どうすることもできない。解決の糸口さえ見つけられない。正に板挟みだ。時間の流れがこんなにも残酷に感じられたことはない。

真砂子は一散に家を出た。行く宛はない。

何故わたしはここにいるのだろうか？

今年の春、彼と共に上京し、父母へ婚礼の挨拶をした。その時は、村田真砂子で戻ることのできる、最後の帰郷だと思っていた。

伸一と相對した母は凜々<sup>りんり</sup>しかった。けしておだてるのではなく、娘の長所をひとつ、またひとつと数え上げ、大切にやって欲しい、と語ってくれた。ついぞ見たことのないそんな母の真剣な側面に、真砂子は頭が下がる思いがした。

彼は妻となる人の昔話を聞きたがった。母はお節介にも、押入れの中にうもれていたアルバムを探し出し、思い出話を始めた。

それからふたりで、喜与原の町を歩いた。東京見物するよりも、君が生まれ育った場所を胸に刻んでおきたい、と言ってくれた。

その時の道順をたどる。

加奈崎神社。千歳飴の袋をしつかりと握りしめている、七五三の写真。足にまとわりつく着物が嫌で、不機嫌そうにちょこまかと歩いた。

友達と連れだって歩いた通学路。あの頃の私は無邪気で、たわいないことにけらけらと笑っていた。みんな結局ばらばらになってしまった。でもときどきは、思い出してくれるのだろうか？

荒川の土手。春にはシロツメクサの咲く草原。冠を編んで遊んだのは小学生の頃。その冠を編めと言われても、もうできない。今も女の子達は編むのだろうか？

その頃よく、制服を着たカップルを見かけた。デートコースにしては味気ないね、と友達と言いつつ合点<sup>ちてん</sup>のだが、羨ましくて、遠くからずっと眺めていた。

河川敷沿いの喜与原小の校舎。教室から、子供達のコーラスが聞こえてきた。自分達も歌った、お別れ歌。下校の時刻を迎えたのだ。自分が過ごした教室の風景が思い浮かぶ。

いつまでも たえることなく 友だちでいよう  
あすの日を ゆめみて きぼうの道を

信じあう、よろこびを たいせつにしよう  
きょうの日は、さようなら またあう日まで

嫌な歌だ……

聞きていると、涙があふれてきた。人に見られていないのいいことに、真砂子は泣いた。

今朝長崎から、一通の手紙が届いた。

#### 親愛なる村田真砂子様

曼珠沙華が咲きました。私の一番好きな花。わたしを和ませ、穏やかな安らぎで満たしてくれる、こころの支え。耐え切れぬほどの暗闇に陥った時も、私をそつと見守っていてくれた。そんな思いを今、あなたに送ることができたら、と祈っています。

来月の七日に旅します。万端用意していたこと、あなたには言えませんでした。愁嘆場は苦手です。誰にも告げぬまま、静かに旅立ちたかったけど。それがわたしの慣習でしたから。でもそんなのはやっぱり、不実だよね？

真砂子ちゃん。あなたはほんとうに気づいているのかしら？ あなたがわたしに与えてくれた愛の大きさを。そしてわたしが、いくら感謝しても感謝しきれないほどの思いでいることを。

私が戯れに交わした口づけを、あなたは一遍の詩に変えた。友情の証にと、彼は私の手を取り、口づけた。それは指先で摘めるほど

の1gに満たない愛だったかもしれない。けれどそれこそが正に、私が彼との関係にひとつのピリオドを打つために必要としていたものであり、ここから望んでいたことだったのだから。

人を傷つけて止まない性情が、どんどん変容されていくのを、私は肌で体感した。もう思い残すことなどありません。

私は愛するためにこの地に舞い降りた。愛することを学ぶために。私は寛容でない、情け深くもない。時に妬み、誇り、礼を失する。自分の利益を求め、苛立ち、恨みを抱くこともある。そんなわたしに、あなたは溢れるほどの愛情を注いでくれた。

あなたとともに過ごした長崎の日々、生涯で最も美しい・・・出逢いの瞬間から今の今までが、わたしにとってはかけがえのない宝石です。わたしはあなたに愛されて幸せだった。あなたの愛はわたしのこころの庭に、美しい花々を咲かせてくれた。私は神のように愛せない。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐えることなど、とてもできそうにない。けれどあなたと一緒に咲かせた花々は、たとえ踏みつぶされようと、引き千切られようと、愛の歌を奏でることをやめはしない。

わたしには、あなた以上に愛しい人はいない。

それが別れ際になって、他ならぬあなたを、こんな辛い目にあわせてしうつなんて。ほんとこころ苦しいのですけど、今のわたしには、他にどうすることもできません。許してくださいね。

あなたが式までにちゃんと戻ってくるのは知っています。でも、ほんとに戻ってきてくださいね。わたしのこの胸に、あなたのその美しい姿を、一秒でも長く刻ませて下さい。

いつかまた、巡り逢える日を楽しみにしています。その時は、夢

に思い描いた通りの人となつて、あなたの前に立つてみたい。この先どんな運命が待ち受けていようと、きっとあなたの親友として恥じない人でいます。そしていつだって、あなたの、あなた方のしあわせを祈っています。

曼珠沙華の花を見たらわたしを思い出して。

この地で巡り逢った一番愛しい方へ、最良の思いを込めて、

美莊 美禰子

それが最終通告だった。

巡り逢えたのが運命なら、別れてゆくのも運命だ。私がプロポーズを受け入れた時から、決めていたような気がする。親友の幸せを見届け、人知れず旅立とうとした。

一緒に " Plain Soleil " を見て泣いた人とも別れて。

ある時、彼女と共に馬に乗った。山間の木立の小道をくぐり抜ければ、美しい長崎の海。穏やかな潮風に包まれ、しばし見惚れた。

ある時、部屋の窓辺に座り、とっても綺麗なまんまるのお月様を、ふたりで見つめていた。不意に彼女は寄り添い、その身体を私に預け、もたれてくる。

その肩を強く抱きしめ、その髪に顔をうずめた。

ある時、伸一が彼女に言う。もう一度挑戦させてくれ、と。彼女は惜しげもなく裸身をさらす。うつぶせた彼女の髪を、彼がそっとかき上げた。

ある時、水野さんの伯父さんの畑は麦秋を迎えていた。強めの風が、縦横無尽に黄金の穂を揺らしていた。彼女もまた、自らの長い髪がなびく風情を楽しんでいた。

あの頃、彼女とともに時は有った。

彼の地が結びつけ、育<sup>はぐ</sup>んでくれた友情。出会う前までは、こんなにも大きな意味を持つ人が現れるなんて、思ってもみなかった。美しい日々だった。本当にしあわせだ、と思えた。けれどそれは一夏を過ぎす花のように、あまりに短い月日だった。貴重な季節の、そのかけがえのなさに気づかぬまま、

私は一体何をしていたのだろうか？

再会できるのはいつのことか。十年。あるいはそれ以上……会えずにいても、ふたりの絆が切れることはない。彼女への思いが絶えることはない。それならば何故、

どうしてあの女性<sup>ひと</sup>の側にいてあげられないのだろうか？

いつだって彼女の成功を祈ってる。その幸せを願っている。けれど、肌で感じあえる温もりが途切れるなんて、信じられない。彼女にだけ、そっと打ち明けたい悲しみに出会った時は、一体どうすればいいのだろうか？

本名川に流した二艘の精霊船。夢の彼方へと消えていった。

いつか再び出会えるその時まで、ふたりとも別々の場所で、異なる人々と付き合い、違う夢を見て生きるのだ。

ちよつと巡り逢う前と同じように。

今度戻つたらほんとうに終わりだ。私が見つけた一番宝石は、掴んだと思う間もなく、指先からこぼれ落ちてゆく。

何故？ どうして？

園児達の賑やかな歓声が聞こえた。喜久井町の幼稚園は赤い屋根。土手の階段を下りると、手入れの行き届いた花壇に、コスモスの花がきれいに並んで咲いていた。私が如雨露で水をあげた草花達も、ういない。あれからこの土は、

何代の生死を見守ってきたのだろうか？

その頃は、プールの横に小さな小屋があつて、兎を飼っていた。細かい網の隙間から、毎日のようにキャベツをあげた。あの兎達ももういない。

弔ってもらえただろうか？

母に手を引かれ、毎日通った道。法性院の銀杏の樹。堂々たる風情も、いつのまにか衰えてしまった。もうその実を拾うこともない。喜与原町へ向かう道は、ほんの少しゆるやかに下っていた。

遠く人影が見える。小さな影と、それより少し大きな影。ふたり



はにこやかに微笑んでいる。黄色い帽子をかぶった少女の差し出した小さな掌の上に、おばあちゃんはそつと十円玉を乗せた。

「おばあちゃん、ありがとう」

その明るい声に、猫背の背中も微笑んだ。

あれは、あの時の私だ。

あの日、小学校の裏の通りで、私もおばあちゃんに十円をもらった。そして、『おばあちゃん、ありがとう。おばあちゃん、ありがとう』と、繰り返し叫んだ。もう二十年前のことだ。

真砂子の瞳から、頬に一筋の涙がこぼれ落ちた。その時、

「あゝ あいつ乞食いじつばあに十円なんかもらってらあ！」

「てめえ。十円なんかもらってうれしいのかよお！」

八歳くらいの三人組が囃し立てる。憑つかれた笑みを浮かべながら、群をなした勢いで執拗しつように寄りたてる。憂さ晴らしの機会に出合い、喜んでいる。

怯える老婆は、不自由な足を引きずりつつ逃げ出した。少女は怖さのあまりに泣き出した。

リーダー格の少年がその頭を小突いた。そして振り返り、子分達に向かって得意がる。

「止めなさい。君達」

彼はうん臭そつに振り向いた。

「うるせえな！ おまえにや関係ないだろ！」

その頬骨を狙った。親指を畳たたんだ掌の、一番堅い部分。打ち下ろすのに逡巡ためらいはなかった。少年はもろく膝から崩れ落ちた。

これくらいで済むと思うなよ。

襟首を両手で掴み、引き上げた。人形のような虚うつろな目。鼻から

は、一筋の鮮血が流れてる。

こんなヤツにも血が流れてる。

「自分がどういうことをしているかわかっているの？ 人のところを踏みにして楽しんで！ その踏みにじられる、ってことがどういうことか、わかってるの？」

何をしているの？ 私は……

その首に、両手が蛇のように絡みつく。だが締め上げているのは自分の意志ではなかった。

いい気味だ・  
・  
・  
・  
・

こころの冥府には、その頸動脈の締めまりゆく感覚を楽しむ何者かが巣くう。真砂子は背筋が凍った。この腕は、既に意識の統制下にはなかった。あやつられ、さらに強く締めつける。

いけない、と思ったが止められない。かつて被害者として舐め<sup>な</sup>させられた凄惨の一切が、真砂子の意志を麻痺させる。今ここで起きていることが、とても現実とは思えない。意識が朦朧<sup>もうろう</sup>と溶解する。消えていく方が楽だった。

でも、  
けれど、  
・  
・  
・  
・

絶対に踏み越えてはいけなかった！

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

両腕は、尚も引きちぎらんばかりにシャツの襟を掴み、震えている。だがもはやその頸を締めつけることはない。

何故？ どうしてひと思いにひねり潰<sup>つぶ</sup>してやれない。

心臓が激しく波打つ。真砂子の意識は身体を取り戻した。激しい怒りに震えながら、けれどももうコントロールを失うことはない。投げ捨てるように少年を払いのけ、言った。

「行きなさい。あんたなんか用はないわ」

取り巻き達を睨<sup>にら</sup>みつけ、

「あんたたちも！」

激しく追い払った。容赦など、ただの一滴もいらない。彼等とはとぼと歩き出す。緩やかに右に曲がる路、視界から消えるまで、油断なく彼らを注視した。

後ろには、まだ打ちひしがれたままの少女がいる。

赤いランドセルを背負った彼女は、両手を目に当てて泣いていた。小さな年頃の女の子は皆こうして泣く。しゃくり上げる度に、黄色い帽子が揺れる。体育着の上に羽織っている、可愛いらしい薄いピンクのカーディガン。きつとお母さんが選んでくれたのだろ。真砂子は膝を折り、少女の前にしゃがみ込んだ。この子を見下ろしてはいけない。

「もう大丈夫よ」

そうしてできるだけやさしく、少女の肩に手を触れた。

「泣かないで。もう大丈夫だから」

慰められ、少女はよけい激しく泣いた。その淑<sup>しと</sup>やかな髪をどんなに愛情を込めて撫<sup>な</sup>でてあげても、こころは容易に癒やされそうになかった。だが真砂子には辛抱があった。指先に思いを込め優しく包む。しゃくりあげる波が、しだいに納まってきた、その時、

「もう十円なんていらない！」

その叫びは、真砂子のこころの古傷を、再び鋭利に突き刺した。

「お願い。そんなこと言わないで」

少女の両肩に掛けた手に、思わず力がこもる。

「あのおばあちゃんね、あなたのことが大好きなの。可愛くて可愛くてしかたないの。だから、だから喜んで欲しくて」

「イヤッ！」

小さな身体いっぱい力を込め、少女は真砂子の手を邪険に振り払った。

「あの子たちいつもいじめる」

こころが千々に砕けそうになる。

「お姉ちゃんを守ってあげる！　ずっと守っててあげる。だから、だからお願い。受け取ってあげて」

泣き腫《は》らして真っ赤に染まった顔を、絶望的なほどの悲しみで歪め、少女は叫んだ。

「イヤッ！ 十円なんかいらぬ。おばあちゃん、きらい！」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

はい。十円

あの日、あの人はそう言つて十円玉をくれた。盛夏の昼下がりが、小学校の裏の通り。私はひとりきりで泣いていた。

弟が生まれた。母は手のかかる赤ん坊につきつきりで、私はいつでも放って置かれた。

弟はよく泣いた。そんな時、母は私が邪魔になる。

「外で遊んでらっしゃい」

と言い渡された。

けれど私は側を離れようとはしない。

するとお財布から十円玉を取り出して、

「これで何か買ってらっしゃい」  
と言うのだ。

ぐずっている、すっかり困ったような顔をする。その向こうでは弟が泣いている。

私は十円玉を受け取り外へ出た。

家に居たくて居たくて仕方なかったのに、一度表へ出ると、今度は逆に帰れなくなった。まだ友達もなく、何をしたいのかわからなくて、私はふらふらと、あちこちの道をさまよっていた。

それでもまだお金があるうちはよかった。何を買おうかと考える時間があった。あの頃は、まだ十円でもいろんな物が買えた。ポールチョコ、あられ、べっこう飴・・・お菓子を買ったって、私はすぐには食べなかった。大切に大切に眺めて、日の暮れまで保たせておいた。荒川の土手にしゃがみ込み、わけもなく、喜与原の景色を見つめてた。

声を掛けてくれる人なんて、誰もいなかった。

あの日も私は十円をもらって外へ出た。ところが、ぎゅっと握りしめていたはずなのに、何のはずみか、小学校の裏の道で落としてしまった。ちゃりん、と綺麗な音を響かせ、十円玉はころころ転がっていった。

行かないで！ と叫んだけど、硬貨は真っ直ぐ下水口へと落ちていった。

母にもらった十円。私と世界を結びつけていた唯一の絆・・・

私は呆然と立ちすくんだ。目に、涙があふれてきた。だが十円玉は行ってしまった。私は泣いた。泣くより他に仕方なかった。涙は

後から後から止めどなく溢れてきた。そうしてひとりっきりで、

一体どれくらい泣き続けていたのだろうか？

「どうしたの？」

誰かが声をかけてくれた。涙に霞む目<sup>かす</sup>にぼんやりと、人の姿が写った。

「落としちゃったの！ 十円」

私は夢中でその人に抱きついた。何処の誰だか知らなかった。けれど誰でもよかった。そんな私を、あの人は、その胸にしっかりと抱きしめてくれた。

「ああ、可哀想にねえ」

同情深い声。そして優しく頭を撫<sup>な</sup>でてくれた。慰められ、私はよけい激しく泣いた。その胸の中で、何度も何度も涙をぬぐった。そうしてどれくらい、抱きしめていてくれたのだろう。ようやくに私が泣きはらした顔を上げると、あの人は、包み込むような笑顔で応えてくれた。そしてふところから小さな蝦蟇<sup>がまぐち</sup>口を取り出して、

「はい。十円」

皺だらけ指先に、十円玉が光る。その輝きを、私はただ呆然と見つめた。いつまでも動けずにいた少女の手を取ると、あの人は、てのひらにそっと十円玉を置いてくれた。

人に親切にされたのは、それが初めてだった。

目映く光る銅色の硬貨。あれはただの十円ではなかった。見上げれば、温かい笑顔が輝いている。

「おばあちゃん、ありがとう！」

私はこころの底から叫んだ。純粋な感謝の思いが、真実な喜びが、後から後から込み上がってきて、私は小躍りするようにスキップした。

「おばあちゃん、ありがとう！」

何度も何度も振り返り、叫んだ。その度にあの人は、優しい笑顔でうなずいてくれた。

だが私は喜び過ぎた。家に帰り、母にそれを話してしまった。

「えっ！ 誰？ 知らない人？」

母は心底ぎよつとしたらしい。けれど、少女はもつと驚いた。

「ダメよ。知らない人に何かもらっちゃ。お金くれるお菓子くれるって、どこかへ連れてかれたりするのよ」

母は私の肩に手をかけ、（それは震えていた）、優しい声で、（それは無理して作っていた）、言い聞かせようとした。そして微笑もうとするのだが、顔筋は強張って、醜くひきつらせた。

「だから絶対にダメよ。知らない人から何かもらっちゃ。ねえ・・・わかった？」

その時、もうもらわない、と言えば、あるいはそれだけで済んだのかもしれない。けれど、

ちがう！ あの人は、いい人なのだ！

こころの中で何かが叫ぶ。私は愚かにも、頑なに抵抗した。唇をぎゅつと噛みし、締め、双の拳を力一杯握り締めた。そして母の恐怖心を、ひどくあおってしまった。

「ダメよ、絶対！ 世の中、悪い人多いんだから！」

母の顔が青ざめた。私の襟を握りしめた手が、痙攣していた。

「お願いだからもうもらわないでね！ いい子だから。絶対もらわないでね！」

弟が泣いた。でも母は振り向かなかった。この人は、何か一つのに気を取られると、

他のことがまったく見えなくなる。

「ダメよ！ 絶対に！ 絶対に！」

泣き出しそうな顔で、訴えるように揺さぶる。強く、締め上げるほど強く。何度も、何度も……

それがいつまで続いたのかは知らない。

私の記憶は、不意に途切れる。

だが、それだけでは済まなかった。

悪いことに、人に見られてた。

「おまえ、十円なんてもらって嬉しいのかよ。この乞食女！」

悪童達に囲まれ、私は散々に囃し立てられた。

「乞食っ子！ 乞食っ子！」

逃げ道をふさがれ、小突かれ、叩かれ、髪を捕まれ、引き回された。

「乞食っ子！ 乞食っ子！」

泣いても泣いても誰も助けてくれなくて、私は身を守る術もなく、容赦なくいたぶられた。

それも会う度に！ 会う度に！

なんて酷いことを……

私は自尊心の欠片も奪い去られた。よりによって、そんな時に、再びあの人に巡り逢ってしまった。

会いたくはなかった。けれど運命には逆らえない。いじめ抜かれ、



骨の髄まで惨めにされた自分を、どうしてさらけ出さなければなら  
ない？

逃げ出したかった。でも足が動いてくれない。

あの人は私に気づくと、あの時と変わらない笑顔で近づいてきた。  
けれど私の異変を認めると、その穏やかな優しい目を曇らせて、  
「どうしたの？」

寛容にもここを開き、受け止めようとしてくれた。弱き幼きも  
のへの限らない同情。

その愛情を何故見せた！

生きるのに必要な温もりなら、崩れる前に与えて欲しかった。私  
が味わった苦痛は、耐えられる限度を超えていた。即座に吐き出さ  
なければ、自分自身がつぶれていた。選択の余地などない。腹の底  
から強く激しく、私は叫んだ。

「十円なんかいらぬ。おばあちゃんなんかキライ！」

何故？ 何故？ どうして？ ..... .

人を傷つけたのはあれが最初だった。

傷つけるつもりはなかった。だがあの笑顔を苦痛に歪ゆがませたのは、  
まぎれもなく私だ。泣きながら走り去った少女の後ろ姿を、あの人  
は、

一体どんな思いで見送ったのだろう？

そんな最悪の自分を、誰も知らない。あの人でさえ、今はもう覚えていない。もう謝ることもできない。許されることもない。私が私である限り、この痛みはこころの奥深くで、永遠に疼き続ける。

でも何故？ 何故？ どうして？ ……

どうして取り返しがつかないのか！

あの一瞬が取り返せるなら死んでもいい。

あの人には、親も夫も子供もない。親切にしてくれる人も、誰もいない。

なんて恐しい。

ぼけ、と陰口を言われながらも、気づがずに、餓鬼達に見つけられれば繰り返しいじめられ、けれど身をつんざくほどの嘲りも、痛みも、もはや記憶することもできずに、杖をつき、弱った頭と足を引きずって、でもあの人には命ある限り、

誰かを愛し続けるだろう。

「お姉ちゃん、泣かないで。泣かないで」

その小さな胸にしがみつき、真砂子は泣いた。

「お姉ちゃん、泣かないで。泣かないで」

心根のやさしい少女はいつまでも、

哀れな彼女を慰めてくれた。

その夜、真砂子は夢を見た。

遊園地のミラールームの中を歩いていた。迷宮ラビリンスの回転鏡が写すのは、少女の頃の自分。長く髪を伸ばし、カチューシャをつけ、白いワンピースを着ていた。

早くここから逃げ出さないと。

そして幾つも幾つも壁を押すのだけれど、出口が見つからない。くるくると回る鏡に自分が写る。けれどどれも写真のような絵だ。その時、

床が大きくゆっくりと回り出した。

まるでメリーゴーランドのようだった。そして、踏み出した足下あしもとが、

すーと静かに沈んでいった。

まるで観覧車のようだ、と思ったていたら、迷宮は無重力空間ラビリンスに投げ出されたように、解体しながら膨張していった。そしてあつと言う間に地球を越え、宇宙規模の大きさへと膨らんでいく。もはや踏むべき大地もない。身体が溶解し、意識が抜け出し、重さのないまま、宇宙空間をただよった。

鏡の中の少女達も回転しながら、様々な方向に散らばっていった。

それはまるで巨大な万華鏡のようだった。

空間の一点で命が生まれ、色彩とりどりの衣装をまとい、八や十二の面から成る立方体の花を咲かせ、回転しながら、無限の彼方まで広がり、そして消えていく。無限の輪廻が展開する。

それは美しい交響詩であった。真砂子は壮大な開放感に包まれ、歓喜の渦の中にいた。

けれどもその感覚は長続きしなかった。宇宙はひとつ、またひとつと次元を失い、小さな平面となった。愉悦さも優しさも消え、生命の輝きが薄れた。少女達は色彩を失い、写真のような大きさにまで縮小され、すべては六つのピースから成る同型の円となり、平面上を規則正しく整列し、回っていた。

単調で機械的な回転。その歯車のような噛み合わせは、何かを押し潰していく凶器のようで、真砂子はぞっとした。

その時、平面の裏側で、心臓が生まれた。ドクッ、ドクッ、と鼓動が生じ、水面に雨が降り注ぐように、鏡の中の少女達は、再び波動となって広がり、干渉し合い、揺らぎ合い、ざわめいた。

その不気味な脈動は、次第に大きくなっていった。真砂子は途轍もない恐怖を感じ、

目が覚めた。

### 三

ベットに横たわり、夢の余韻を醒ました。

朝の食卓、母はにこやかで、食事の支度をしてくれて助かるわ、

と言った。それから部屋に戻り、ぼんやりとしていた。ゆっくりと流れる穏やかな時間の中で、真砂子はただじっと、漣なみだむこころを安らげていた。

昼下がり、表へ出た。何事も変わりのないままだった。真砂子は明日、長崎へ帰ろう、と思った。もう十分だった。この上何に巡り合わなければならないというのだろうか？

その時、真砂子は喜与原の商店街に近い疎まばらな雑踏の中に、おばあちゃんを見つけた。杖を突く猫背に丸まった小さな背中。それと同時に、こちらに向かって歩いている、

昨日の少年を見つけた。

彼も、老婆の姿に気づいていた。一方のあの人は、ゆったりと、ただ杖のつく先ばかりを気づかって、行き交う人が誰かなど、わかるはずもない。

少年は、じっとあの人を見つめていた。それは穏やかな目であった。

真砂子はその瞳に、共感的な色彩を認めた。

それは希望の輝きだった。他の人との有意義な関係を築いてゆける、愛の領域へと至る神秘の鍵。すべての人が可能性として持っている宝物。

擦れ違い、彼は老婆の姿を名残るような思いで見送っていた。そして正面を振り返り、真砂子の笑顔と出逢った。

その時、ふたりはお互いに通じ合った。

彼もまた、にっこりと笑み返してくれた。二人を遠く隔てていた

障壁が、にわかに消えていった。

けして根が悪いんじゃない。真砂子はそう信じたい。

無邪気さは少年の特権であろうか。まるで小躍りするように、彼は浮き浮きと彼女の横を通り過ぎていった。そのしあわせを祈るような思いで、真砂子は彼の後ろ姿をじっと見送った。

「明日、帰ります」

「そう。空港には、何時に着くの？」

「三時四十分」

昼までに戻れぬことはない。でもそうすれば、伸一は無理をしてでも迎えに来る。

「そう。じゃあ仕事が終わったら会おう」

「はい」

夕方、早番の仕事を終えた母は、娘の急な決定を聞かされた。何もそんな急に戻らなくても、と言いかけたが、この娘が容易に聞くはずもない、と思い直し、黙った。

真砂子は二階へ上がり、明日の出発の支度を始めた。けれど、ふとひらめいたことがあり、階下へと降りてきた。テーブルの椅子に腰掛けていた母は、娘の顔を見るなり、叱り散らすような強い口調で言った。

「何もそんな急いで戻らなくなたっていいじゃない。伸一さんだって、ゆっくりしてきていい、みんな一緒に長崎へ来ればいい、って言うてくれるんだから」

真砂子は一瞬、子供の頃にかえったような気がした。

母の言っていることは正しい。確かに、家族水入らずで過ごせる、最後の日々だ。大切にしたい方がいし、大切にしたい。

「うん……」

事を荒立てる気はない真砂子は返答に困った。けれどどんなに強硬にまくし立てられようと、

飛行機の予約を取り消す気など、毛頭ない。

「そりや笹岡に対しては、その方がいいんだろうけど……」  
母は語調を下げた。早速に折れてくれて助かった。もうどんな悶着ちやくにも、巻き込まれたくはない。娘はそっとテーブルの前を通り過ぎた。

「また散歩？」

と母は聞く。

「……うん」

まるでばつの悪い小さな子供のようだ、と思った。

「まったく強情なんだから」

その声には、いつもと違う響きがあった。振り向くと、テーブルのいつもの席で、母が気落ちしたようにうつむいている。気丈な母も、寂しい時はある。そして似合わない程のか細い声で、呟いた。  
「そういうところは私に似たんだね」

#### 四

喜与原の町に夕日が沈む。荒川の土手に登り、暮れゆくオレンジ色の光を見つめていた。母が幼なかった頃、この町に沈む夕日はとても大きかったと言う。今はもう、そんな大きな太陽が見られることはない。母が見た夕日はさぞかし美しかったろう。けれども自分は、この夕日が好きだ。どんなに小さかろうと、こころを照らすその鮮やかな美しさに変わりがない。

河川敷を吹く風もすっかり秋めいた。遠くで、電車が鉄橋を渡つ

て行く。野球をしている子供達も、家路をたどる時刻が近づいていた。

小学校の裏。遠い昔に通った、駄菓子屋が見える。

真砂子は階段を下りた。店は看板だけを残し、すでにたたまれていた。横にスライドするガラス戸から見えるのは、普通の家庭の光景だ。

心臓が高鳴る。真砂子は校舎の裏へと回った。

そう。この道。

二十年前、盛夏の午後。雲一つない、抜けるような青空。小学校の塀の網には朝顔の蔓が巻きつき、向かいの家の青い塗炭塀の前には、朱や黄色の白粉花おしろいが咲いていた。

十円玉を落とした下水口が見える。

二十年間、私は注意深くこの道を避けてきた。用があれば必ず遠回りした。あの駄菓子屋へは、二度と寄りつかなかった。友達に誘われても、断った。たとえどんなに仲がこじれようとも、意に介かいしたりはしなかった。

あの日、何故私はこの道を通ったのだろうか？

他に行き場所がなかったのか？　すぐるように、たったひとつの幸せな記憶を求めたのか？　まだ無垢であつたところを、汚水に落とすとも知らないで、

ゆつくりと、一歩づつ……

人は楽園には留まらない。生きていけば、悲しみや苦しみに出会



い、罪に汚れる。辛苦に潰され墮ちてゆく者もあれば、蓮のように慈愛の花を咲かす者もいる。でも、

何故泥にまみれなければならないのだろうか？

あれからしばらく、私はひとりで外へ出られなかった。母も無理には強いなかった。二階の手すりに座り、ひもすがらぼんやりと、外の景色を眺めていた。

『真砂子』

ある日、階下で母が呼んだ。いつもとは違う、穏やかな声だった。少女はそつと階段を下りた。弟は揺りかごの中で、すやすやと眠っていた。母は茶の間に座り、娘を見やると裁縫の手を休め、  
『はい。これ』

と、につこり笑って、少女の手にお手玉を差し出した。

娘は、こんなにも優しい母を見たことがなかった。だからお怖  
ず怖ずと、いつまでも手をこまねいてた。母はいぶかしがりもせず、  
『こつやって遊ぶのよ』

と手本を見せてくれた。深緑と紫色のお手玉は、母の笑顔を包みながら、くるくると円を描いて回った。

『真砂子もやってごらん』

少女はこの新しいの遊びに熱中した。少しでも続くと母は、上手い上手い、と誉めてくれた。そして瞬く間に上達した。すると、もうひとつ、またひとつ、その度に色の違うきれ布を縫い合わせ、新しいお手玉を作ってくれた。

幼い頃、母が遊んでくれたのはその一度切りだった。  
だが少女はいつだって忙しい母の傍らで、

その手の空くのをじっと待っていた。

校舎に沿って歩く。校庭にはもう誰もいない。正門の手前の路地

を右に折れ、緩やかに曲がる小径を行くと、やがて、あの赤いポストが見えてくる。

昨日、私はここで泣いた。見も知らぬ少女の胸にすっかりとしがみつきの、泣いた。誰も知らない、誰にも言い出せない思いに責め立てられ、泣いた。

私はこの町に生まれ、育った。生きる喜びも、哀しみも、苦しみも、痛みも、すべてはここで教わった。

私達は、愛するために生まれてきたのだ、と信じたい。時として困難に立ちふさがれ、耐えきれない程の辛苦に出逢うとしても、そう信じていたい。

もう思い残すことなど、何もない。

法性院の墓地に夕日が沈む。コンクリートの壁から卒塔婆そとぽが覗く。銀杏の木々がさざめいて、金色の葉を落とした。向こうから、母子が乗る二台の自転車がやってきた。夕飯の材料を買ってきたのだろう。お母さんの乗る自転車の籠の中には買い物袋がある。交差点の手前になると、母は小さな娘に、

「絵麻ちゃん。止まるのよ」

と言った。補助輪の付いた自転車をこぐ少女は、言われるままに止まり、ふたりして、右を見て、左を見ると、嬉しそうに微笑み合った。

「そう。よく見てから渡るのよ」

彼らは真砂子の横を通り過ぎると、喜与原町へと戻っていった。美しい風景だと、思った。その時、

こころの奥底から、悲しみとも喜びとも区別つかない、巨きな情動が込み上がり、真砂子は目を閉じた。ヴィジョンが浮かんた。

どうしようもないほどの悲しみを胸に抱え、泣きじゃくる少女が

一目散に駆け寄ってきた。

それはあの時の？わたし？だった。

誰からも忘れ去られ、こころの奥底で、そうして二十年間も泣き続けていたのか。その柔らかな身体を、真砂子はしっかりと抱きしめた。

もう泣かなくていい。もうそれ以上苦しまなくていい。もはやあなたに罪はない。

二十年間流し続けた涙が、立派にそれを贖<sup>あがな</sup>った。

もう？ひとり？にはしない。私がいる。私がいる。私がいる。そう慰めながら、真砂子は、

母になるのだ、と思った。

あの海に見える街で、私なりに。時々やり過ぎて憎まれながら、でも一生懸命に。

法性院の壁に沿って歩く。町は暮れかけいた。夕日に赤く染められた空が、少しずつ深い紺色に変わっていく。家々は明かりを灯し、それぞれの食卓に、それぞれの家族が集まる。

美咲町と喜与原の境の四つ角へと差し掛かった。商店街から音楽が流れてくる。

その時、真砂子はおばあちゃんの姿を認めた。歩道ではなく、自動販売機の並ぶ通路から、ひよい、と現れた。きつとまた十円を見つけたのだらう。昨日のことなど、まるで何事もなかったかのよう

に、あの人は明るい笑顔で、喜与原町へと歩いていった。

だが背後には、青いトラックが迫っていた。

その瞬間を、真砂子は今もはっきりと覚えている。

耳を劈く急ブレーキの音。けれど車はあの人をはね飛ばした。純真な笑みをたたえていた顔が、みにくく苦痛に歪められ、その骨のもろく碎ける衝撃が、我が身の痛みのように感じられた。背中丸められたまま、けれど頭が反り返すように天を仰ぐ。あの方は声にならない悲鳴をあげた。左手からは杖がこぼれ落ち、そして固く握り締めた右の掌が解け、

赤褐色の鈍い光が飛び散った。

頭部を守るという反射的な動作さえ、もはや行うことができず、老婆は無惨にも頭から落ちた。緩やかに、赤黒い血が流れ、無表情な顔の下のアスファルトを、染めていった。

あつけなく、ひとつの命が途絶えた。

その時、行人のざわめきと悲鳴にまぎれ、聞こえるはずのない十円玉の弾ける音が、

やけに鋭しく真砂子の胸を切裂いた。

#### 第四部（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。  
魂込めました。

このHPの制作関係者並びにご利用の皆様へ、感謝いたします。  
ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5743m/>

---

おばあちゃんの十円

2011年2月1日15時33分発行